ダンゲロス／IF

餅男

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０１０年・８月――あの時、〝彼〟がちょっとだけ用心深かったなら？

これはそんな可能性から枝分かれしただけの、〝ちょっとした〟物語。

目次

第一話　気付き　1
第二話　「ｘｘ」　13
第三話　マムシカレー　23
第四話　処刑日　34
第五話　「一ノ瀬蒼也」　43
第六話　テロ組織〝生徒会〟　56
第七話　番長小屋　67
第八話　変わる流れ、変わらぬ悪意　77
第九話　決戦前夜　88
第十話　〝転校生〟　100
第十一話　かつての戦い、今の戦い　112
第十二話　〝相互理解〟　124
第十三話　魔人小隊　136
第十四話　魔剣「福本剣」　147
第十五話　職員棟の上と下で　157
第十六話　「鵺野蛾太郎」　168
第十七話　出陣　180
第十八話　完全熟達者（オーバーアデプト）　190

第一話　気付き

――？

「僕がですか？　そんな事はないでしょう。日々、頭の痛い事だらけですよ」

――。

「……元気過ぎるくらいですよ。あの馬鹿は、相変わらず〝番長〟を名乗ってグループ拡大に勤しんでいるようです」

――。

「嬉しそ……っ!?　父さん、からかわないで下さい！」

――？

「そ、それは……そうですが、昔の話です」

――。

「……その必要はないでしょう。あいつには既に今の仲間がいる。それは、僕も同じです。信頼に足りる仲間が」

――？

「まさか、そんな事は有り得ません」

――。

『それでも』？　そうですね。その時は……」

「……長、会長！」

「ン……ん、んん……？」

私立希望崎学園生徒会長・ド正義卓也は自分に呼びかける少女の声で眼を開いた。どうやら、少し椅子に身を任せようとしただけで微睡に引き込まれたらしい。

少しずれかけていた眼鏡を直し襟足の髪の跳ね具合が整ったままである事を確認すると、数秒もかからずド正義は完全に意識を覚醒させた。自分に用事があって訪れたのであろう、眼前で心配そうにこちらを見詰める右目を髪で隠した少女、歪み崎絶子に声をかける。

「歪み崎くんか……すまない、少し眠ってしまっていたようだ」

「大丈夫ですか、会長？　ここ最近、色々と大変だとは思いますけど

ちゃんと休まないと」
「分かっている。とはいえ……明日の一連の〝行事〟だけは滞りなく遂行しなくてはならない。それが終われば、多少は僕も休めるだろう」
「……」
〝行事〟という言葉に対し、絶子は僅かに表情を曇らせた。明日は二学期の始業式の日であり――同時に、番長グループＮｏ．３であった「口舌院言葉」を激辛カレーによって頭蓋爆破させた罪により、生徒会役員「架神恭介」が特一級極刑に処される日でもある。
身体を足元から５㎝刻みで鋸引きされてゆく特一級極刑は、他のモラルの低い魔人生徒への見せしめの意味もあるとはいえ凄惨極まる処刑である。自身の能力によって健全な精神を持つに至った絶子にとっては直視も難しいであろう。
ド正義は椅子から立ち上がり、窓から見える夕方の学園を見下ろした。夢の島に造られた直径数ｋｍの巨大学園は地上三階の会長室からでは見渡せない広さだ。
――あの時、自分は父になんと答えただろうか。
父・ド正義克也が大学の研究室で殺される数日前の、最後の親子の会話。
それをド正義は、どうしても思い出せなかった。

ダンゲロス／ＩＦ　第一話　気付き

私立希望崎学園、通称「戦闘破壊学園ダンゲロス」。
数年前に発生した〝魔人〟及び一般生徒含む百八十名の死者を出した凄惨な学内抗争の後、誰かによって作られた警句の看板「この先ＤＡＮＧＥＲＯＵＳ！　命の保証なし！」を地元の不良が読み間違えた事から広まったこの通称は、畏怖と嫌悪を込められて囁かれる。
普通の人間が何かしらのトリガーで覚醒する事で突如誕生する〝魔人〟。常人を超越した身体能力を有し、常軌を逸した様々な能力を操る彼ら彼女らを快く受け入れる程に一般社会は寛容ではない。

〝魔人〟となった者はコミュニティから疎外され、誹謗され、時として実力行使を伴う排斥を受ける。多感であり、良くも悪くも行動の抑制が効かない学生のコミュニティであれば尚の事である。昨日まで気持ち良い関係を築けていた友人や教師や恋人が、〝魔人〟となった途端に爆発する汚物を見るかのような視線を向けてくるのだ。それは時によって死よりも残酷である。

そんな彼ら、彼女らが中学を卒業して流れ着く場所、それが希望崎学園である。

細かい経緯は割愛するが、様々な紆余曲折を経て現在の希望崎学園には全校生徒６００名の中に１００名を超える魔人を抱えている。普通の学校で一学年に1～2人、一般的に治安が悪いとされる学園でも一学年に１０人前後、全校で３０人居れば多い方である事を考えると破格の数字であり、それが更に進学を考える魔人を呼び集める構図となっている。

ある者は周囲からの迫害から逃れるために、またある者は覚醒と共に芽生えた凶暴性を振るうために、またあるいは広範囲破壊系や大量殺戮系、当人の自覚なく発動する自動発動系などの危険すぎる能力に目覚めもはや希望崎以外の選択肢が残っていなかったために、彼らは希望崎の門を叩く。

そして――その学内は、存外平和であった。

かの悪法、学校敷地内の治外法権を認める「学園自治法」により、通常の学校であれば魔人は暴れ放題。それが〝番長グループ〟などを作れば実質その学園を掌握したようなもので、強盗傷害、殺人にレイプなど何でもありのディストピアと化すところである。

では、何故ダンゲロスはそうなっていないのか？　これは、極めて繊細なパワーバランスによる均衡が保たれている事に依る。

生徒会長・ド正義卓也を中心とした魔人集団「生徒会」と、番長・邪賢王（じゃけんのう）ヒロシマ率いるアウトロー魔人集団「番長グループ」。彼らは互いに新入学してきた魔人を仲間に勧誘し、場合によっては暴走するだけの狂犬めいた魔人たちを能力で、あるいは拳で粛清してきた。結果、学内の２／３の魔人がどちらかの勢力に就く状態となり、多大な

被害を及ぼす全面対決を回避しつつ静かな睨み合いが続く事となったのだ。
――否、正しくは「続いていた」と表現すべきだろうか。
両者の関係は、本年（２０１０年）初夏の頃から急速に悪化していた。
学内最強の魔人剣士にして番長グループＮｏ．２である白金翔一郎の剣道部部長引退強要に伴う、強権的な剣道部の廃部。
更にそれによって生まれた軋轢を修復するために企画された生徒会・番長グループ合同レクリエーション「お楽しみ会」で起きた口舌院言葉の爆死事件。
立て続けに起きたこれらの事件は番長グループ側に「生徒会が本格的に番長グループを潰しに来た」と思わせるには十分であり、また学内最強のカウンター能力者にして穏健派として両組織の関係を取りなしてきた口舌院が死んだ事で「これを好機として番長グループの殲滅を行うべき」という生徒会タカ派の声も抑えきれなくなりつつあった。
その先に予測されるのは最悪の事態――どちらかが全員死亡するまで何日でも続けられる、正式な手続きの元に行われる全面戦争「ハルマゲドン」。
ハルマゲドンだけは回避せねばならない。そのために、言葉爆殺事件の実行犯を特一級校則違反者として容赦なく処刑することでどうにか落とし所としたいというのが今のド正義の思惑であり、最も頭の痛い懸案であった。

「それで……ただ僕を起こしに来た訳でもないだろう、歪み崎くん。何か報告でも？」
「あ！　いえ、その……地下牢獄の架神くんに、面会希望の要望を〝されている方〟が……」
ド正義の問いかけに、絶子は用件を思い出したのか改めて背筋を伸ばして言った。
「……架神に？」

生徒会「元」役員・架神恭介（三年）。彼の人となりを一言で表すならば〝直情径行の馬鹿〟という言葉が最も適切だろう。
ド正義がまだ組織としての生徒会を本格的に旗揚げする以前、旧番長グループ（邪賢王が先代番長を殺す前に学園を支配していた魔人グループ）に脅されて毒入りカレーを作らされていたのを救ったのが彼である。
「ド正義、俺はこれからお前の為にカレーを作るぜ！」
救助された時、彼は泣きながらそう言うとその場で生ド正義への助力を決意した。なので生徒会では古参勢に含まれ、それなりに人望もあるべきなのだが――残念なことに、彼の性格には多大な問題があった。
本人は先を見通した策略家ポジションを気取っているようなのだが、その思考は短絡的にして性格は極めて直情的。後先考えず「敵」と認識した相手には周囲が困惑する程の敵意を剥き出しにして悪口雑言を撒き散らす。まあ、有体に言えばトラブルメーカーである。
そういった性格もあり、生徒会発足からのメンバーの割に同期からの評価は非常に低く、役員とはいえ重要なポジションにも置かれる事はなかった。
ただ、視線だけでカレーの辛さを自在に調節できる自身の能力「サドンデスソース」を活用するためにか彼のカレー作りの腕前は高く、それを周囲に振る舞う事も多々あり、また見かたによっては豪放磊落とも取れる架神の姿に尊敬を抱く下級生もいたようである。
ただ、絶子は「されている方」と言った。生徒会の1、2年が面会希望をしてきたならば彼女は「要望を『してきた生徒が』」と言うはずだ。つまり、面会希望をしてきたのは少なくとも絶子より立場が上の人間という事になる。
「……駄目だ、相手が誰であれ許可できない」
絶子の顔にまっすぐ視線を向けつつ、ド正義は僅かの沈黙の後に答えた。
「特一級極刑を受刑する罪人は『学園の綱紀を大きく揺るがし、その生存そのものが害悪である』と認定された者となっている。感受性の強

い者が面談した場合、悪影響を及ぼす可能性もある」
「それは、まあ、分かりますけど……」
絶子の顔には困惑が浮かんでいる。ド正義はその表情から「面会希望者」がそれで引き下がってくれる相手ではない事を理解した。
ド正義は大きくため息をつくと、彼女に尋ねた。
「歪み崎くん、一体誰が、あの架神と面談したいと言ってきたんだ？」
絶子はそう聞かれ、おずおずと答えた。
「……校長先生です」
「……」
もう一度、ド正義は大きくため息をついた。

『ド正義くーん！』

直後、ドアの外から若い女性の陽気な声が聞こえてきた。分厚い生徒会室のドアを通して届くという事は相当に大きな声で言っているはずだ。
どんどんどん。
続けてドアを叩く音。
『ド正義くーん！　聞こえてますかー!?』
「……」
「……」
ド正義と絶子は無言で顔を見合わせた。ド正義は大きく肩を落とし、絶子は苦笑を浮かべる。
どんどんどんどん。
またドアを叩く音。さっきより一回多い。
『ドーせーいーぎーくーん！』
「……歪み崎くん、開けてくれ」
「は、はい」
このまま放置していれば声の大きさとドアを叩く回数が増えるばかりだろう。魔人生徒の攻撃にも耐える材質の扉だが、一般人である〝彼女〟の拳を痛めさせる訳にもいくまい。

ド正義の指示に絶子は頷くとぱたぱたとドアに近づき、観音開きの扉の片側を開けた。
「ド正義く……ひゃあっ!?」
扉の向こうの人物は、丁度そちら側を叩こうとしていたようだった。振り上げた小さな拳が宙を切り、その勢いのままコテンと部屋に転がり込む。
流石に転んでしまうとは思っていなかったド正義は、慌ててその人物に声をかけた。
「だ、大丈夫ですか、先生!?」
「いたたた……ド正義くん、開けるなら開けるって言ってよぉ……」
どうやら鼻を打ったらしい。少し赤くなった鼻先をさすりつつ、身長150㎝ちょっとの小柄な身体をスーツで包んだその女性、希望崎学園校長・黒川メイは答えた。
黒川メイ、27歳。今年度から就任してきた校長歴5ヶ月の新校長であり、一般人。
ウェーブのかかった長い髪と、どこか「着せられた」感のあるスーツ姿。そして小柄な割に出ている所は出て、引っ込む所は引っ込んでいる均整の取れたプロポーションが特徴の、男子生徒を中心に人気を博している校長だ(ちなみにその〝人気〟はオナペット的な意味も含む)。
「そんなに叩く事も無いでしょうに……ええっと、それで校長。歪み崎くんから伺いましたが、地下の罪人と面会したいと?」
「こらっ、ド正義くん。『罪人』じゃなくって『架神くん』でしょ?」
なるべく淡々と尋ねるド正義に対し、メイはちょっと頬を膨らませつつド正義を見上げて言った。せわしなく表情や行動が変わる様は、どこか小動物を思わせる。
「……罪人は罪人です。確かに『彼』は長年に渡り生徒会に尽力してくれましたが、現校則上から見ても明確な殺意による殺人を行った以上、許されるものではありません」
日頃から生徒会の予算支援などに協力的な校長とはいえ、そこを譲る訳にはいかない。ド正義は凛とした表情で彼女に言った。

「……うぅ」
理路整然と正論を言われ、むくれつつもメイは一旦引き下がった。だが、一応は校長としての矜持があるのだろう。ひと呼吸置いてから再度ド正義に訴えかけてきた。
「……ねえ、ド正義くん？　確かに架神くんが口舌院さんを殺したのは事実だとしても、それは生徒会を、ひいては番長グループに悩まされていたド正義を思っての事なんでしょ？　処刑は避けられないにしても、せめてもうちょっと痛くない刑にしてあげられないかな？」
「無理に決まっているでしょう。ただでさえ下手人が生徒会の身内ということで、番長グループからの印象は最悪です。一等落とした電気椅子ですら、彼等は納得しないかもしれない」
呆れ混じりにド正義は答えた。明るく天真爛漫なのは人柄としては良いのだろうが、どうもこの校長は事態の深刻さを理解していない。
「そう……そうよね……」
メイはそう言うと、しゅんと落ち込んでしまった。正しいのはド正義側の筈なのだが、何故か罪悪感がこみ上げてくる。
「分かったわ。処刑の裁量については生徒会に一任していますし、先生からどうこう言える事じゃないものね……それなら、架神くんとの面会だけは許してもらえないかな？」
「……お言葉ですが先生、何故彼に会おうと？」
生徒会として多少の接点があったとはいえ、そこまで彼女と架神は親しい間柄だったろうか。そう思うド正義に、当たり前のようにメイは答えた。
「何故って……当然でしょ？　校長として、明日処刑される架神くんに最後の挨拶と、あとカレーのお礼をしておきたいの」
「カレーの？」
「ほら、私がここに赴任してきて一ヶ月くらいの頃に、生徒会のみんなで歓迎のカレーバイキングをやってくれたじゃない」
「ああ……」
そう言われてド正義は思い出した。

魔人への嫌悪感も露わに生徒会の活動に対して否定的だった前校長に比べ、メイは魔人学生への理解もあり、生徒会予算の捻出などにも協力的だった。そこで五月頃、赴任一ヶ月のお祝いも兼ねて彼女の歓迎会を生徒会でやろうという話になったのだ。

その準備に際し彼女の好物がカレーと聞き、腕を振るったのが架神だった。ゲストが可愛い年上という事もあり、彼の張り切り具合は見事なものだった。何処からか高級な具材を用意して、正統派の欧風カレーやインドカレーに始まり、スープカレーにホワイトカレー、マッサマンカレー等々を一人で全て作ったのだ。ド正義もそれには感心したが、うっかり最初に食べたのがマカナウ・カレーだったのが少しトラウマになった。ちなみにマカナウとは蛙の事である。

「ねえド正義くん、お願い。5分でいいから架神くんに会わせて？本当にちょっと、お別れを言うだけだから……」

そう言うとメイは上目遣いにド正義を見た。

身長差ゆえにド正義は彼女を見下ろす格好になったが、その際に彼女の大きく盛り上がった胸元からブラのフリルが僅かに見えた。

「ンッ！　ンンッ！」

「ド、ド正義くん？」

思わずド正義は咳払いをしつつ視線を逸らした。

（黒……なのか……）

苛烈なまでの厳格さで周囲から尊敬を集めるド正義ではあるが、18才の思春期真っ只中を謳歌する少年である事も事実である。下着が見えれば思わず目で追ってしまうし、童貞も卒業している（〝ある生徒〟の存在により、ここ二年半の間で男子生徒の童貞率は大幅に低下している）。

「……分かりました。地下階の生徒会分室にいる者に、僕が面会の許可を出したと伝えてください。ただし、面会時間は5分でお願いします」

「ありがとう、ド正義くん！」

ド正義の言葉にメイはぱっと表情を明るくすると、嬉しそうにド正義の手を握った。柔らかく暖かいメイの小さな手の感触が伝わって

きて、少しド正義の脈拍が速まった。
やがて、メイは手を離すとぺこりと頭を下げ、生徒会室を退室していった。途中で「きゃあっ!?」という声が聞こえたあたり、また廊下で転んだのだろう。
「……ふぅ」
「お疲れ様です、会長」
「全くだよ。あの人には困ったものだ」
大きく息をつき、ド正義は会長用のチェアに腰かけた。扉の近くで様子を伺っていた絶子からの労いの声に頷き返す。
絶子はどうもあの校長が苦手のようであった。ド正義にはどうにもピンと来ないが、女性だからこそ分かるものがあるのかもしれない。
「とりあえず、私も今日の分の仕事は終わりましたから帰りますけど……会長、本当に無理はしないでくださいね？」
「ああ。分かっているとも」
再度の念押しをしてくる絶子に、ド正義は少し無理をして微笑みを浮かべた。
おそらくそれが無理したものである事には気付いているのだろう。絶子はド正義の微笑みに苦笑で返した。
「本当、どうなってるんでしょうね？　今年に入ってから何だか嫌な感じの事件が急に増えてきて……まるで、呪いでもかけられてるみたいです」
「歪み崎くん、冗談でもそういう事を言うものではないぞ？　社会では、組織運営を妨害する能力を持った魔人サラリーマンを非公式に抱えている大企業もあると言うからな」
「少しは調子が戻ったみたいですね、会長」
「……明日は忙しくなるぞ、今日はこれで帰り給え」
「はい、分かりました！　失礼します！」
彼女の気遣いに内心で感謝しつつ、ド正義は絶子の退室を促した。元気よく返事を残し、絶子は生徒会室から出ていった。
「……」

静寂を取り戻した生徒会室の中、ド正義は椅子に腰かけつつ漫然と考えた。

「……本当に、何故なのだろうな」

誰に言うともでもなく呟く。

絶子の言う通り、今年に入ってから番長グループとの関係が急激に悪化してきたのは事実だ。去年、ド正義が「新校則」と称した全生徒の生殺与奪を実質上掌握する「学園総私刑化計画」の雛型を提案した時でさえ、口舌院などが緩衝役になってくれたとはいえここまで険悪な状況にはならなかった。

そして今の状況は、ド正義としても決して望んだものではないのだ。

ド正義は眼鏡の奥の瞳を閉じた。ここ数ヶ月の事を思い返す。何かがおかしくなってきている。何かが。

では――この数ヶ月で、何かそうなり得る要因があっただろうか？

「……？」

それは、〝ちょっとした〟違和感だった。

「いや……それは無いだろう」

自分の頭に浮かんだ発想を、自分で否定しようとする。

今年度に入ってから生徒会に参入した生徒に、数十人の魔人を操作できるような能力者はいなかった。それ以外で学園にとって大きな変化があったと言えば――校長の急遽の交代。それくらいだ。

だから校長が怪しい？　馬鹿げた短絡的な発想だ。ド正義は自分の思いつきの浅はかさを内心で笑い飛ばそうとした。

「いや……無い……筈だ」

だが、何故か笑い飛ばせない。

考えてみれば今年に入ってからの番長グループとの関係悪化の発端は、メイが生徒会名義で剣道部の取り潰しをした事だ。確かに彼女に番長グループの危険性を（下手に近づけさせない為に）語った事はあったし、そこからの善意であると解釈もできよう。しかし、何故わざわざ生徒会の名を使う必要があった？

「……」

口説院言葉が死んだお楽しみ会もそうだ。あれは確か――彼女が企画立案し、生徒会からの歩み寄りという名目で実施された。
何故――『魔人に理解ある校長』は、仲介人にすらならず、裏方に徹した？　第三者として彼女が立っていれば、もっと開催の交渉は円滑に進んだはずだ。
何より、何故企画立案者がそのお楽しみ会に全く姿を見せなかった？
「……何を考えている、僕は」
お前は疲れている。だから善意で動いている校長すら疑わしく見えているだけだ。ド正義卓也。
内心からそう言ってくる声。それをド正義自身も信じたいと思った。
だが、最初は小さな違和感であったそれはド正義の中で少し大きさを増し、軽く笑い飛ばせるものではなくなっていた。
本当に――彼女は、生徒会のために、魔人のために働いてくれているのだろうか？
「……！」
ド正義は、瞳を閉じたまま拳を握った。

世の中は、〝ちょっと〟の積み重ねで出来ている。
〝ちょっと〟の勇気、〝ちょっと〟の誤解、〝ちょっと〟の努力、〝ちょっと〟の優しさ、〝ちょっと〟の行き違い。様々な人の〝ちょっと〟が積み重なり、世界は動いてゆく。良い方向にも、悪い方向にも。
これは、そんな可能性のひとつの物語。
あの時、彼が〝ちょっと〟用心深かったならば？　〝ちょっと〟冷静になれたならば？　〝ちょっと〟先を予測できたならば？
そんな〝ちょっと〟から枝分かれしただけの〝ちょっとした〟物語だ。

第二話「ｘｘ」

薄暗い部屋に、空調の音と幾つものＰＣが稼働するカリカリという音のみが響く。
季節が残暑にかかる頃とはいえ、室内は肌寒い程に冷えていた。ＰＣ冷却のため、エアコンの温度は常時最低に設定されている。
それなりの広さはある部屋のようだが厚手のカーテンをかけられた窓は締め切られ、椅子も机もなく、床には無数のケーブルが伸び、やはり幾つもの機械やモニターに繋がっている。
「……」
その部屋の中央、何台ものモニターに囲まれる中で胡坐を組む、学生服姿の男。
学生服を着ているという事は、彼は一応学生なのだろう。断定できないのは、その男の容貌にある。
頭に頭髪は全く無く、水気の無い頬は痩せこけ、虚ろな眼は何処を見ているのかも分からない。半開きの口から時折垂れる唾液と、たまに行う瞬きが辛うじて彼が生きている事を示している。
そんな彼を囲むモニターには、様々な情報が高速で流れている。彼の手元にキーボードは無いが、それらのモニターに表示される情報に対しそれ以上の速度で対応を行っているようだ。
「……」
ドアが開く音。
「失礼する」
一分の乱れもなく詰襟の制服に身を固めた、長身の眼鏡の少年が入室してきた。ド正義卓也である。
「……」
男はド正義にまったく反応せず、虚空を見つめたままである。
しかし、その手が僅かに動いた。緩慢な動作でモニターの一つに触れ、ド正義の方に向ける。
【よお。珍しいな、お前が直接来るなんて】

モニターにはそう表示されていた。

ダンゲロス／ＩＦ　第二話『ｘｘ』

「ああ。携帯を使わず話をしたい事柄だったのでね」
ド正義がそう答えると、まるで普通に会話しているかのような速さで次のメッセージが表示される。
【まあ、出せる茶もねえがゆっくりしていってくれ。防犯カメラから拝借した女子水泳部の動画でも見るか？】
「……」
【ハハッ、冗談だよ】
ド正義の眉の険しさが増す前にまたメッセージ。通常のタイピングで可能な速度ではない。
この男の名はｘｘ（個人データを本人が消去したため本名不明）。
生徒会書記を務める三年生であり、魔人学園と言われる希望崎でも唯一の電脳系魔人である。数年前に魔人に覚醒し電脳世界に精神をダイブさせる能力を身に着けたｘｘは一日の大半を電脳世界で過ごし、精神の入れ物に過ぎなくなった肉体は生存に足りる程度の食事と睡眠、排泄行為のみを行うだけとなっている。即身仏めいた姿になっているのはその為だ。
また彼は、その能力の発展形として対象の精神を圧縮してデータ化する事で植物人間化させる技『インターネット殺人事件』を身につけており、過去にはそれで実質的な連続殺人を行った重犯罪者でもある。しかし、最終的に実態を掴まれ拘束された際、その能力に目をつけたド正義が司法取引めいた交渉で生徒会に引き込んだのだ。
そして現在、彼は生徒会ＰＣ室の主として生徒会の情報収集、管理、調査などを一手に引き受けている。
【それで、何なんだ？　その用件ってのは？】
これが本来の人格なのだろう。相手が生徒会長のド正義だろうとざっくばらんな口調でｘｘは尋ねてきた。

ド正義は少しの逡巡を見せた後、ゆっくりと言った。
「……人物調査を頼みたい」
【調査？　何か後ろ暗い事をしてる奴がいるって事か？】
「いや、調べてほしいのは生徒ではないんだ」
そこでド正義は言葉を止め、息を吸った。
「その……調べてほしいのは、校長だ。彼女のプロフィールが『本物』かどうかを調べてほしい」
【校長？】
それはｘｘにとっても意外な言葉だったのだろう。返事の速度が僅かに落ちる。
殆どＰＣ室から出ないｘｘだが、校長の事は当然知っていたし彼女の評判も把握していた。〝魔人にも優しいドジっ子校長〟という評価は既に定着しており、希望崎生徒間のＳＮＳでも彼女の人気は高い。
【どういう事だ？　あの校長が偽の経歴でここに来てるってのか？】
「うむ……どう言えば良いか……」
その問いかけに対し、ド正義は彼にしては珍しく返答に困っているようだった。少し考え、曖昧な返事を返す。
「正直なところ、そういった疑いが有る訳ではない。単に僕の心配性かもしれない……特に怪しいところが無ければ、それで良いとは思っている」
【何だ、そりゃ？】
「少しだけ、引っかかる事がある。その僕自身の疑いを晴らしたいのだ。ｘｘくん、今の頼みは通常業務の妨げにならない範囲で行ってくれればいいし、君が疑わしくないと思ったのならそこで調査を打ち切ってもらってもいい」
【オーケーオーケー、ま、暇つぶし程度にやらせてもらうさ】
「……よろしく頼む」
ド正義は最後にそう言うと頭を下げた。
【もう行くのか？　何だったら、この前生徒会でとっ捕まえた盗撮野郎が撮ってた女子新体操部の更衣室動画でも土産にどうだ？　凄え

ぞ、三年のレズの先輩が後輩三人と蛇の交尾みたいに……】
「……」
【冗談だよ】
ド正義の額に青筋が浮かぶ前に次のメッセージが表示される。そのままド正義はｘｘに背を向け、退室してゆく。
ＰＣ室のドアが閉まり、再び室内はｘｘとＰＣとモニターだけの世界になった。
【さて……】
電脳世界のｘｘは考える。退屈そうな依頼ではあるが、生徒の携帯の盗み聞きや情報整理にも飽きてきたところではあった。気分転換には悪くなさそうだ。
【そんじゃ、行くか】
ｘｘは更に自分の精神を電脳世界に埋没させる――

【さ、どこから始めるかね】
黒い影法師めいた姿のｘｘのアバターは肩を回しつつ周囲を見回した。薄暗い空間に、０と１の数字がノイズめいて無数に浮かんでいる。これはサイバーパンク小説のネットダイブに憧れる余りに覚醒したｘｘのイメージ世界であり、視覚化が困難な電脳世界を彼の好みに調整しているものだ。
【……まずは表看板からってか】
ひょいと手をかざすと、そこに一冊の大判の本が浮かび上がった。表紙には「ようこそ、希望崎学園へ！」と書かれている。希望崎のホームページをイメージ化したものだ。パラパラと本がめくれ、『優れた学習環境』『安心の魔人対策』『一般校より低い生徒の死傷率』などの美辞麗句が踊るページが次々と表示される。
【ハハッ、下らねえ】
それらの記事を一笑に伏すと、ｘｘは目当てのページに辿り着いた。教員紹介ページである。
『皆が安心・安全に、健やかに成長できる学園にしてゆきたい』
一番最初の部分、そんなスローガンと共に微笑む黒川メイの写真が

掲載されていた。１９８３年生まれ、○○教育大卒、××商社勤務――
――特に劇的でもない、普通のプロフィールだ。
ｘｘはそのページを無造作に破り取ると、折り畳んで口に放り込んだ。これでｘｘの脳に情報が保管され忘れる事はない。
【んじゃ、次は……】
ｘｘの身体は浮かび上がり、高速で飛翔する。
一旦海外のサーバーを幾つか経由して、ｘｘは今度は大学構内めいた場所に辿り着いた。メイが卒業したとされる大学のサーバーに到着したのだ。彼の前には『立ち入り禁止！』と書かれた巨大なバリケードがある。
【はい、お邪魔しますよっと】
ファイアウォールを視覚化したそれを、ｘｘは軽々と蹴とばした。一般人向けのセキュリティなど電脳魔人であるｘｘには障子戸同然である。
そのままずかずかと中に押し入ると、一瞬にして立っている場所が図書館に変わった。大学のデータベースである。『卒業生名簿』と背表紙に書かれた一冊を手に取ると勝手にページが『く』のインデックスの所で止まり、メイの写真が貼られた書類が表示される。
ｘｘは少し落胆した。ド正義は彼女が怪しくない事を望んでいたようだが、実際その通りだったようだ。普通に教育大を卒業し、ＯＬを経て校長になっただけの一般人か。
【つまらねえなぁ……まあ、もうちょい調べてみるか】
シロの可能性が高くなってきたが、大学の在籍を確認しただけではド正義も満足すまい。彼女に関連していると思われるデータを乱雑に漁る。擬装は施したが、ファイアウォールが破壊された事に気付かれれば魔人警察の電脳課が動くかもしれない。そうなると面倒だ。
【……ん？】
ｘｘの動きが止まった。
大学の記念行事、教授たちのゼミの記録、学生の就職に関するデータや、様々な記録映像――
【……ククッ、面白くなってきたじゃねえか】

影法師の口元が歪み、白く尖った歯が露になる。
４年間の大学生活において、例えサークル活動などをしていなかったとしても、行事への参加やゼミの研修旅行など何かしらの画像が残っている筈である。
それが――全くない。
彼女が所属していたとされる教授のゼミにおいて、彼女の写真が一切無いのは流石に不自然と言えた。
ちょっと面白くなってきた。ｘｘは笑うと、素早く大学のサーバーを抜け出た。ここではこれ以上の情報は掴めまい。
次に向かうべきは――

『良くは無いですなぁ。邪賢王さんが黙っているから口には出しませんが、今にも生徒会に殴り込みに行きそうな雰囲気ですわぁ』
「……そうだろうな」
蛍光灯の白い光が生徒会室を照らす。既に宵闇となった外の景色に目を向けつつ、部屋に戻ったド正義は何者かと通話をしていた。
電話の向こうの相手は番長グループ幹部・攻撃隊長にして三年生の〝バル〟。番長グループ発足初期からド正義が送り込んでいたスパイである。
彼の魔人能力は、敵組織構成員に「この人に限って裏切る筈がない」という意識迷彩をかける『裏切帝（ウラギルティ）』。その迷彩は例え相手の眼前で情報を垂れ流そうとも疑われない程で、スパイ活動にこれ程適した能力はない。
『特に、白金さんが相当に頭に来とりますなぁ。あの人は口説院さんと深い仲でしたし、犯人が見つかって処刑されるからって、それで簡単に水に流せるモンではないでしょう』
白金翔一郎。番長グループＮｏ．２にして〝剣の悪魔〟の異名を持つ学内最強の剣士。美男美女のカップルという事もあり、彼が言葉と交際していたのは有名な話だ。
のんびりとしたバルの言葉に、ド正義は〝あの日〟のこと、仲良し会で言葉の頭蓋が爆発した時の様子を思い出した。あの時、白金は帯

刀していた真剣に手を伸ばし、鯉口を切る寸前まで行っていた。仮にあのまま鞘走っていた場合、ド正義の能力で最終的に白金を殺せたとしても、そこまでの数秒で何人殺されていたか分からなかっただろう。

「明日の始業式後の処刑には番長グループは来るのか？」

『邪賢王さんは行きません。あの臭いで体育館に入った日にゃ、一般生徒にまで迷惑がかかりますからなぁ。行くのは白金さんにオレに、新しくＮｏ．３って事になった剣道部元副部長の服部さん、それと何人かって感じですわ』

「そうか……犯人が架神だった事については？」

『納得してるのが半分、疑ってるのが半分……ってところですな』

「それでも多い方だろうな……」

ド正義はため息をついた。それはそうだろう。これが状況が逆で、生徒会幹部が殺されて番長グループから「こいつが犯人なので公開処刑します」と下っ端を差し出されたならド正義も信用できまい。

そういう意味では「カレーの辛さを変える」という代替えの利かない能力で言葉が殺されたのは不幸中の幸いだったと言える。少なくとも実行犯は架神で疑い無いのだ。彼を最も残虐な特一級極刑で処刑すれば、多少なりとも番長グループの留飲を下げる事はできるだろう。

「分かった。こちらは明日の処刑を滞りなく進める。何かそちらで動きがあれば時間を問わず僕に連絡を」

『分かりました。何とか、ここらで収まりをつけたいところですなぁ』

「……全くだ」

バルの言葉にド正義は同意しつつ、電話を切った。

「……」

先ほどド正義の中で生まれた疑念は、まだ消えない。再び携帯を取り、ド正義は別のところに電話をかけた。送信先は地下の生徒会分室。

『ははっ、はいっ！　ここっ、こちら生徒会ぶんしゅ、分室です！』

二度のコールで若々しい、緊張した応答が返ってきた。ちょっと噛

んだようだ。「架神に入学当初から世話になったから」と、自ら彼の牢獄番を買って出た一年生の一ノ瀬蒼也である。
「一ノ瀬くん、そんなに緊張しなくて大丈夫だ。ちょっと様子を伺いたくてね」
『は、はいっ！』
　まるで緊張を解くつもりは無いようだ。
「そちらに校長が向かったと思うんだが……もう面会は済んだだろうか？」
『はい！　えっと、ついさっきまで来られてました。俺なんかにも『遅くまでお疲れ様』って言ってくれて……』
「それは何分くらいだった？」
『え!?　確か……5分くらいだったと思います』
　どうやら、メイはド正義の言った通りに面会を5分ほどで済ませたらしい。頷きつつド正義は一ノ瀬に尋ねた。
「その前後で、何か変わった事はあったか？」
『変わった事ですか？　そう、ですね……変わった事って訳じゃないですが……架神先輩が』
「……架神くんが？　何か変化があったのか？」
『その、先輩なんですけど、牢獄に入れられてからずっと騒いでいたんですよ。『聞いてねえぞ』とか、俺に向かって『会長を連れてこい』とか……』
「なるほど……それで？」
『それが、校長先生が面会に来たらすっかり静かになったんです。覗いてみましたけど、足を組んで寝っ転がってるような感じで。やっぱり校長って凄いんですねー、可愛いだけじゃなくって、処刑前の先輩のメンタルケアまで出来るなんて』
「……」
　ド正義の表情に険しさが増す。一ノ瀬の言う通り、それは只のメンタルケアだったのかもしれない。
　しかし――そうでないかもしれない。
「分かった。明日は君には嫌な役目をさせる事になる。今日はもう帰

りたまえ」
『……はい、お疲れ様でした。会長』
ド正義の最後の言葉に一ノ瀬が息を呑むのが伝わってきた。明日の特一級極刑で架神の身体を鋸で切り刻む処刑人は、彼が務めるのだ。
一ノ瀬との通話を終えド正義は考えた。架神恭介、彼の死は避けられない。何かを聞くにしても、許される時間は彼が牢獄にいる間だけだ。
魔人の能力は多岐に渡る。もし彼が何かしらの能力で無意識に操られているとかであれば、普通に話をするだけでは聞けない情報があるかもしれない。だとすれば――
「……む？」
その時、会長席据え付けのＰＣモニターが突如点灯した。ウィンドウが勝手に開き、メッセージが展開してゆく。ｘｘからの連絡である。ド正義はモニターの音声入力をオンにすると、画面の文章を確認した。
【居るか、ド正義？】
「ああ、大丈夫だ。先ほどの件か？」
【ああ。面白くなってきたぜ？　結論から言うと……クロだ】
「!?」
ド正義は無意識に周囲を見た。誰もいない事を確かめ、再びモニターに向かう。
「つまり……経歴詐称だったという事か？」
【それどころじゃねえ。調べてみたが、確かに希望崎学園の職員ファイルの職歴や学歴にある会社や学校には在籍記録が残ってるし、卒業した事になってる。本籍もちゃんとある】
「それなら……」
問題ないのでは。そうド正義が言いかけた時、ｘｘはそれを遮るように言葉を続けた。
【だけどよ……写真を含めた、一切の映像記録が残ってねえ】
「……!?」

【どーも変な所にセキュリティが強い箇所があったんでそれは回避しつつ、そこの卒業生のブログやら、彼女と同学年だった奴がクラウド保管してた卒業アルバムのデータやらを漁ってみたが……小学校から大学、社会人に至るまで『黒川メイ』が写っている写真はゼロだった】

「……」

【とどめに彼女の両親の存在が確認できねえ。魔人の被害で一家諸共行方不明なんてのは珍しくもないが……あんだけ魔人に友好的な態度で、そんな過去があるとは思えねえ】

「どういう、事だ？」

それらが意味するところを気付きつつも、ド正義は尋ねずにいられなかった。

【『黒川メイ』って人間は存在しねえ。校長は人生一人分の書類をでっち上げた、別の何かだ】

「……」

【ド正義……何者だ、彼女は？】

第三話　マムシカレー

じめじめとした空気が澱む部屋を、裸電球の弱い光が頼りなく照らす。

生徒会の活動拠点である職員棟の地下1階にある牢獄。通称『生徒会監房』。床は湿った石畳、ベッドなども無く、ここに収監された者は例え悪鬼のような不良魔人でも自身の過去の悪行に対して後悔し、未来に待つ自身の運命に恐怖すると言われている。

――しかしながら今現在、牢獄の中で寝転がる囚人服の男は後悔も恐怖も感じていないような気楽な表情で天井を見上げていた。時折、調子はずれの口笛を吹いている程だ。

「……全く、シケた場所だぜ」

そう言うとこの男、架神恭介はごろりと寝返りを打った。冷えた石畳が体温を奪ってくるようでどうにも気分が悪い。

実のところ、彼が牢獄の中においてこれだけ悠然とした態度でくつろげるようになったのは、つい数十分前の事である。それまでは、過去の収監者がそうであったように架神も騒ぎ、喚き、自身の正しさを――言葉を殺したのは事実なので、そこは否定できなかったが――主張した。

実際彼は自身の行動によって牢獄に放り込まれるとは全く思っていなかったのだ。〝そういう約束〟だった筈なのだから。

だが、自分が自慢げに語った手柄話に彼――ド正義卓也は賞賛を浴びせるどころか〝何故か〟激昂し、その場で架神を拘束。弁明をする時間も許さずにここへ叩き込んだのだ。架神からすれば全く納得のいかない、理不尽な展開であった。なお、言葉を殺した事に対しては「クズの集まりの番長グループのデカいクズが消えて清々した」程度の感覚である。

そんな訳で、彼としては全く不本意なこの状況に対し大声で訴え、番人役の後輩・一ノ瀬に無茶を言うしかできなかったのだ。

だが、それも先ほどまでの話。〝真相〟を聞かされた架神は明日の処刑を待ち遠しく思い、その先にある解放と快楽に思いを馳せてい

た。
「へへっ。『また貴方に抱かれたいわ』……って、可愛い事言うよなぁ」
先程の唇の感触を思い出し、だらしなく笑う。早いところ面倒を終わらせて、あの小柄ながらも成熟した身体をまた堪能したいものだ。
「ここで溜まりに溜まった分を全部吐き出して、ヒィヒィ言わせてなぁ……ん？」
架神の妄想は、耳に届いた金属音で中断された。分厚い鉄扉にかけられた鍵が解錠された音だ。
「まだ朝じゃねえ……よな？」
窓が無い牢獄だけに、今の時間が何時頃なのか架神には分からなかったが、流石にまだ自分が処刑場に連れていかれる時間でない程度は判断できた。また面会者だろうか。
寝転んだまま怪訝な表情を浮かべる架神の視線の先で鉄扉は重々しく開いた。逆光を背に、白い学ランを一分の隙も無く着込んだ長身の男性が姿を現す。それは架神にとっても見慣れた顔だった。
「……何だ、結局お前も来たのかよ。ド正義」
拍子抜けしたような声で架神は言った。
「……」
ド正義は答えない。そのまま無言で彼は牢獄内に入って来た。彼の陰になっていて気付かなかったが、牢獄にかかる影は二つあった。ひとつは長く、ひとつは短い。
「……あ？」
架神はド正義の背後にいた人物に気付き、顔をしかめた。
テラテラと脂ぎった顔には幾つもの大きなイボ。小さな体ながらでっぷりと太った肥満体は制服のボタンが飛びそうな程に醜く膨れ、やはり同様にピチピチに張り詰めたスラックスの股間は隠れようもなく膨れ上がっており、髷のように結わえられた頭は男性器の亀頭のような形に整えられている。
生徒会副会長・赤蝮伝斎（あかまむしでんさい）。ある意味この場に最も似つかわしい人物であり、同時にこの状況でこの場に居る筈の無い人物であった。
「……赤蝮だと？」

「ご機嫌、如何ですかな？　架神殿」
にたり、としか形容できない笑顔を浮かべつつ、赤蝮は言った。

ダンゲロス／ＩＦ　第三話　マムシカレー

――時間はド正義たちが牢獄の鉄扉を開けた十数分前に遡る。
「赤蝮伝斎、参りましてござる」
ド正義に呼び出された赤蝮はそう言いつつド正義に恭しく頭を下げた。彼は何故か常に古めかしい言葉遣いで喋るが、妖怪めいた外見に似つかわしい喋り方ではあった。
「遅い時間に呼び出してすまない、赤蝮くん」
「いやいや、既に拙者の本日の務めは終わり、あとは帰るだけでしたからな。して……如何されました？」
ド正義の言葉に赤蝮は軽く返すと、一転して神妙な表情で尋ねてきた。既に外は完全に暗くなっている。この時間に急な呼び出しとなれば、重要な案件だというのは既に分かっているのだろう。
「うむ、君の意見を聞きたい。その……校長先生の事なのだが……」
「校長の？」
怪訝な顔の赤蝮に、ド正義は自身の疑念からｘｘの現在までの調査結果を話した。
ｘｘはこの件に俄然興味が沸いたらしく、セキュリティの固い省庁のデータバンクに挑戦しようと奮闘しているが流石に短時間では難しいようだ。ひとまずは「黒川メイ」が偽装された存在である事までを赤蝮に語ると、彼は蛙めいた顔に驚きを浮かべ、やがて落ち着きを取り戻すと顎に手をあて熟考を始めた。
「ふぅむ……ｘｘ殿の情報であれば、疑いないでしょうな」
電脳魔人であるｘｘの情報の正確さと速さは生徒会の誰もが認めるところである。ド正義は顔に苦渋を浮かべつつ言葉を続けた。
「僕としても、今年に入ってから生徒会に様々な形で協力してくれた校長先生を疑いたくはない。しかしここまでの一連の流れとｘｘの情報を重ねると、身分を偽って校長として赴任してきた彼女が、何ら

かの目的で我々生徒会と番長グループの関係を悪化させようとしているとしか思えないのだ」
「しかしド正義殿、『学園総死刑化計画』の事を考えれば、番長グループとの最終的な衝突は避けられないのではないですかな？」
『学園総死刑化計画』。現在の生徒会が最優先目標としている、新校則制定による希望崎全生徒の完全管理を目的とした計画である。

1）非童貞は極刑。
2）非処女は極刑。
3）廊下を走った者は極刑。
4）掃除をサボったら極刑。
5）服装が乱れた者は極刑。
6）遅刻者は極刑。
7）レイプ犯罪は加害者、被害者共に極刑。

――何とも無茶苦茶な校則である。
実際、昨年の生徒総会でこの新校則をド正義が審議に持ち上げた時は圧倒的大差で否決され、大半の生徒が「生徒会の厳しさのアピールのためのポーズで、本気で制定するつもりは無い」と受け止めた。
しかし、ド正義は本気であった。無論、この校則が制定されたからといって生徒会が全生徒の虐殺を始めるという訳ではない。肝心なのは、この校則が制定される事で全生徒の生殺与奪を生徒会が掌握し、完全管理ができるようにする事にある。
ド正義の能力「超高潔速攻裁判」は「その場所の法律上で死刑に相当する罪を犯した者」を見つめるだけで裁判→審議→判決→死刑執行までを数秒で執り行い相手を殺す事ができる、強力極まりない即死能力である。しかし無敵の能力という訳でもなく、例えばアマゾンの奥地などの法律自体が存在しない場所では無力ではあるし、殺す場合でも基本は現行犯、あるいは対象の犯行を示す証拠や証言が必要になる。なかなかに融通の利かない能力なのだ。
だがこの新校則が実施されれば、実質的に学内で極刑対象にならな

い者はいなくなる。仮に校則を完全に順守している童貞＆処女が居たとしても、その為の「対抗策」は既に講じている。
　そしてこれに強く反対しているのが他ならない番長グループである。反対しているのが非魔人である一般生徒のみであれば生徒会の圧力による強行採決も可能だが、魔人集団である番長グループが加わればその意見は無視はできない。仮に番長側が一般生徒たちを味方につければ、一転して生徒会は窮地に追いやられるだろう。
　そのため、番長グループとの激突は避けられないとする赤蝮の意見は決して的外れではない。しかし――
「……だとしても、それは今ではない」
　そう言うとド正義は首を横に振った。
「確かに口説院言葉が死んだ事で戦力が削がれたとはいえ、番長グループには邪賢王に白金兄弟も居るし、鏡子くんが番長側に就いているのも痛い。それに加え……今の番長グループはあの〝ダンゲロスの火薬庫〟も引き込んでいる。当初は自殺行為かと僕も思ったが、存外あちらで適応してしまっているようだ」
「ふむ……それに対し、我々の側で戦で矢面に立てるのは範馬殿、一刀両殿、エース殿、あとは若干格落ちしますがツミレ殿といった所ですな。友釣殿の能力もあるとはいえ、アレは我々の戦力投入も難しくなり申す……特に鏡子殿が向こう側というのが厄介でござるな。彼女にかかれば、一刀両殿やツミレ殿では数秒も持ちますまい」
「そうだ。仮にこちらが最終的に勝ったとしても多大な人員の損失は免れないだろう……僕は翌年も在学するつもりだが、白金翔一郎や鏡子くんは卒業を考えているようだ。本格的に事を構えるのは、それからでも遅くはない」
　赤蝮は食い下がる事もなくド正義の分析を肯定した。外見通りの――否、外見以上の醜悪な性癖と性欲と能力を抱えるこの副会長だが、平時においては常に冷静であり、ド正義にとっては信頼できる相談相手である。
「だからこそ、現時点で不必要に我々と番長側の関係の悪化を進めていると思われる校長の真意を探りたい。ついては今から地下牢獄の

架神受刑者の尋問に向かおうと思うのだ」
「架神殿の？」
「ああ。ただ、例えば彼が何らかの能力で精神操作されていたりした場合、通常の尋問では効果は無いだろう。そこで赤蝮くん、君に来てもらった」
「……成程、委細承知致した」
赤蝮はド正義の意図を把握すると、大きな口を歪め長い舌で唇を湿らせた。「じゅるり」という擬音が聞こえてきそうである。
「ちなみに赤蝮くん、君の能力は架神受刑者でも大丈夫か？」
「さて、それは架神殿次第といったところですなあ。まあ彼はノーマルな性癖だったようでござる。過去に凌辱を受けたとかで無ければ……大丈夫でござろう」
じゅるり、ともう一度赤蝮は舌なめずりをした。

――舞台は再び地下牢獄に戻る。
「……赤蝮だと？」
「ご機嫌、如何ですかな？　架神殿」
にたり、としか形容できない笑顔を浮かべつつ、赤蝮は言った。
ド正義は無言で架神を見下ろした。居心地悪そうに架神が身を起こし、胡坐をかく。
「どうしたんだよ、ド正義？　ひょっとしてもう解放か？」
「……？」
明日の明朝には殺される身だというのに、架神は呑気にそう聞いて来た。口説院が死んだ時に彼からぺらぺらと自分の犯行を喋り出した際にも感じたが、どうにも架神とド正義との間には致命的な認識の食い違いがあるようだ。
鋭い口調でド正義は尋ねた。
「架神くん、明日の処刑前に君に最後に聞きたい事があって来た……君に口説院言葉の殺害を指示したのは誰だ？」
「はあ？」
間の抜けた声で架神は応え、言葉を続けた。

「おいおい、何言ってんだ？　『誰だ』も何もド正義、お前の指示じゃねえか。大丈夫か？」
「僕が!?」
　架神の言葉はド正義を驚かせるのに十分なものだった。後ろの赤蝮が思わず尋ねてくる。
「……そうなのですかな、ド正義殿？」
「そんな訳が無いだろう！　『お楽しみ会』は本当に番長グループとの関係改善を目的としたものだった。あの場でメンバーを殺すなど論外も論外だ！」
「いやいや、ちょっと待てよ。俺の能力なら相手に怪しまれずにカレーの中身を殺人級まで高められるから口説院の暗殺には最適だって〝お前〟が言ったんだろ!?」
　話の流れに不穏なものを感じ取ったのだろう。架神は確認するように言ってきた。そこには適当な嘘を言って誤魔化そうとしているような気配はない。
　混乱する頭を整理しつつド正義は考えた。どうやら彼が「自分から指示されて口説院を暗殺した」と思っている事は間違いない。だがド正義には当然ながらそんな指示をした覚えはない。
　そうなると、これはどういう事か？　日頃から番長達へのアレルギーめいたヘイトを抱えていた架神の勝手な思い込みか、第三者からそう吹き込まれたのか、あるいは魔人能力による記憶操作や洗脳の類か――
「……やはり、やるしかないか」
　ド正義は小さく呟くと、赤蝮の方を向いた。
「赤蝮くん、どうだ？」
「ふむ……」
　尋ねられた赤蝮はスンスンと鼻を鳴らすと、ド正義に頷き返した。
「……大丈夫でござる」
「分かった……頼む」
　そう言うとド正義は一歩下がった。嫌な予感を覚えたのか、架神がずり下がる。

「お、おい、何のつもりだよ、ド正義！」
「ぐふっ……ご安心めされよ、架神殿。別にこの場で架神殿を殺そうという訳ではござらぬ」
　赤蝮の脂ぎった顔が紅潮している。興奮を抑え切れないでいるようだ。
　太い指をズボンに伸ばすと、おもむろに赤蝮はジッパーを引き下ろした。
「思えば架神殿、貴殿とは一年からの付き合いでござったな……架神殿の作るカレーの妙味には、拙者も舌鼓を打ったものでござる。貴殿はお世辞にも周囲から愛される人柄ではありませなんだが、こうして最後の逢瀬を迎えるにあたり、一抹の寂しさは覚えますなあ……」
　しみじみと言う一方、赤蝮の股間から『何か』が伸びてきた。血管を浮かべた、赤黒い蛇めいた『何か』が。
「……我が愚息も、既に涙を流しておりますぞ！」
「……ッ!?」
　架神は言葉も失い、ぱくぱくと口を開閉させた。
　赤蝮の股間から顕れたのは、大蛇を思わせる魔物だった。おそらく赤蝮の股間と直結しているであろうそれは全体が粘液で包まれ、イボと血管を浮かび上がらせた胴はビクビクと震えている。先端にある口はチューリップの花弁のように五つに分かれており、その奥からは何枚もの舌が伸びていた。
　生徒会として長い付き合いである架神も、赤蝮の能力の噂程度は耳にしていたのだろう。これから自身に起きる運命を予測し、彼はド正義に怒鳴った。
「おいっ！　おいっ！　ド正義っ！　早くこいつを下げろよっ！」
「架神くん、悪いがそれは出来ない。もう一度聞く、君に指示を出したのは誰だ？」
「だからそれはお前が……ひいっ！」
　驚くべき速度で赤蝮の股間の魔獣は架神の胴体に巻き付いてきた。悲鳴をあげようとする架神の口に、魔物のイボだらけの舌が侵入してくる。

「オゴッ!? オエッ！ うごぉっ!?」
「……赤蝮くん。君のそれは〝待った〟は聞くか？」
「ううっ……多少ならば」
架神の口の中を堪能していた赤蝮は呻きつつも応え、架神の口から魔物の舌を抜いた。
「オゲッ！ ゲエエッ！」
吐き出された胃液と吐瀉物が石畳を汚す。

これこそが赤蝮伝斎の能力『メギド』――因果律を超えて、老若男女の区別なくレイプを〝完遂〟させる能力である。
４歳の頃に自身のレイプ願望に目覚めた自他ともに認めるレイプ魔である赤蝮は、性癖として強い拘りを持つ「処女限定（男の後ろの処女も含む）」という条件を満たせば、この股間の魔物を解放させ確実にレイプする事ができる。
この「確実に」というのは、単純に魔物が強いとかの次元の話ではない。対象が処女を奪われ、赤蝮の射精が収まるまでは赤蝮には一切の攻撃が通用せず、仮に瞬間移動能力などで拘束を脱したとしても瞬間的に赤蝮の魔物はそこへ届き、対象を再度襲う。
更に恐ろしい事にこの効果は対象にまで及ぶ。例え被害者が行為の前に自害しようとしても死ねず、発狂したくとも狂えず、仮に相手が余命幾ばくも無い危篤の老人だったとしても事が終わるまでは絶対に死ねないのだ。無論、相手が致死性の伝染病などを持っていた場合でも赤蝮にそれが感染する事はない。
――つまり、対象はレイプされている最中に限り、肉体的にも精神的にも完全な健康体となるのだ。

「架神くん、聞こえるか？」
「うえっ……き、聞こえるよ馬鹿野郎！ ド正義！ 何のつもりだ!?」
架神の質問には答えず、ド正義は同じ質問を繰り返してみた。
「……君に口説院言葉殺害の指示を出したのは誰だ？」
「だーかーら！ 手前が指示したって言ってんだろうが、ド正義いっ

！」
　顔を粘液まみれにしつつ架神は怒鳴った。『メギド』が発動しているという事は、今の架神は精神操作系の能力の影響下には無いことになる。となればこれは本心からの発言か。では残る可能性は――
「分かった、質問を変えよう……君に『直接』指示を出したのは誰だ？」
「ああ!?　校長だよ校長！　夏休みにヤッてる最中に『ド正義くんから秘密に連絡を頼まれた』ってよぉ！　ド正義、お前だってムッツリしてても彼女とヤってたんだろ!?」
「……!?」
　『ヤってた』の意味が理解できない程、ド正義は朴念仁ではない。架神と校長は男女の関係にあったというのか？
　ド正義の驚きを『自分の発言が図星を突いた』と誤解したのだろう、架神は自分の後ろの処女を守る意味もあってか更に叫ぶように言った。
「いい加減にしろよド正義！　この処刑も『本当は助かる茶番』だって校長を伝言役にしてきたのは手前だろうが！　それとも何か!?　あいつを悦ばすテクニックが俺の方が上だって気付いて妬いてんのか!?」
「……」
　下劣な言葉でド正義を詰る架神の姿を、ド正義は静かに見下ろした。なるほど、そういう事か。
　ある意味において架神も被害者と呼べるのかもしれない。ド正義は僅かに思ったが、すぐにそれを否定した。直接確認もせず、軽薄に殺人を犯したのは架神自身なのだ。
　ド正義は架神に言った。
「僕は、校長に一切そんな指示を出していない。明日の処刑で、君を助ける予定も全くない」
「……え？」
「更に言えば……僕は校長とは初対面時に握手をして以来、彼女に触れてもいない。君と校長がそういった関係にあった事も初めて知った」

「へ？」
その言葉は穏やかで、静かだった。
鉄面皮めいたド正義の顔を見て、ここで初めて架神は自分とド正義との間の食い違いの存在に気付いたようだった。表情が困惑から理解へ、理解から絶望へと変わってゆく。
「ちょ、ちょっと待ってくれ、ド正義……」
「さらばだ、架神くん。赤蝮くん、事後の報告はいい。それが終わったら帰宅してくれたまえ」
「しょ、承知しました……拙者のも、そろそろ我慢が……イきますぞ、架神殿！」
「ヒィッ！　た、救け……ひぎゃあぁっ！」
架神の悲鳴を無視して、ド正義は背を向けた。あとには魔物の這いずる音と、赤蝮の喘ぎと、架神の悲鳴だけが牢獄に響く。
「うがっ、ぎっ、うがあっ！」
「ほほっ！　良いですぞ、その反応は実に良いですぞっ！　架神殿の中、実に〝すぱいしぃ〟ですぞぉっ！」
牢獄を出たド正義の背後で、鉄扉が閉じた。

第四話　処刑日

希望崎学園・体育館。

常人を超越した魔人の運動能力にも対応しうる頑強さと不必要なまでの収容量を誇る建造物であり、入学式や始業式等の学内での大型式典の使われる場所である。実際、この日は希望崎学園二学期の始業式が行われ、体育館の壇上前には６００余のパイプ椅子が整然と並べられている。

しかし、その椅子の大半は空席となっており、場内に残っているのは数十名ばかりであった。

「ちょっと、もっと声をあげなさいよ！」

「もういいから縦に斬れよ縦に！」

眼を血走らせた男女生徒からの奇妙なブーイングが壇上に浴びせかけられる。

「畜生、勝手な事を言いやがって……！」

返り血塗れの学生服で壇上の一ノ瀬蒼也はブーイングに対して悪態をつくと、やはり血と脂に塗れた鋸を握り直した。〝次の５㎝〟を斬らねばならない。出来るだけリズムよく。

最初は眩暈を覚える程に強烈に感じていた血の臭いを、あまり感じなくなってきた。麻痺してきているのかもしれない。

当分、肉料理とカレーは食えなくなるな。そんな事を現実逃避めいて考えながら一ノ瀬は処刑台の架神に言った。

「……先輩、次、いきます」

「へ……えへ……ひひっ……」

既に膝から下を失っている架神は虚ろな瞳で涎を垂らし、だらしなく笑った。

ダンゲロス／ＩＦ　第四話　処刑日

――架神がこの状態になったのは、処刑が始まってからではない。

一夜を経て、一ノ瀬が牢獄から架神を連れ出した時には既に彼はだ

らしなく石畳に座り込み、へらへらと意味の無い笑いを繰り返すだけになっていたのだ。
「(……まずいな)」
壇上の立会人席に座るド正義は、そんな架神の姿を見つめつつ思った。
昨晩の彼への尋問が無意味だったとは思わない。結果、黒川メイが明らかな意思で架神を焚き付け、口説院言葉を殺害させたのが明らかになったのは大きな収穫ではあった。しかし――そこで架神が処刑を待たず〝壊れて〟しまったのはド正義にとっても予想外であった。
自分がメイに利用されていた事に気付いた絶望と、赤蝮の「メギド」による凌辱。それに加え今日の処刑で自分が本当に死ぬという事を理解した架神の精神はそれに耐えきれず、肉体より先に死ぬことを選んだのだ。おそらく今の架神は自分が死にかけている事はおろか、痛みすらまともに感じていないだろう。斬られようとも絶叫すらせず、時折笑いが甲高くなる程度の反応しか見せていない。
一般席から壇上に向けられるブーイングは、その架神の反応に不満な観客からのものである。
始業式後に行われているこの特一級極刑は自由鑑賞であり、もちろん一般的な倫理観を持つ生徒や教師たちはすぐに離席してしまう。残っているのは執行役の生徒会と、架神の処刑を見届けにきた白金翔一郎を代表とした番長グループ。残りはこういった残虐な処刑を見る事で性的興奮を得る、スナッフムービー(殺人動画)をオカズにオナニーを行っているような変態的な男女生徒たちである。彼ら彼女らにとって、生で人が死ぬ瞬間を見られる生徒会の処刑は最高のオカズなのだ。
「ああっ、もう、物足りない!」
「もっとみっともなく叫べよオラー!」
スカートに手を突っ込んだまま股を擦り合わせる女子がもどかしそうに言うと、横で自身の男根を扱いていた男子が罵声を壇上の架神に浴びせる。これが魔人でない一般人生徒なのだから、ド正義にしてみれば頭の痛い話である。彼ら彼女らは、壇上の架神が期待していた

ような必死の叫びや苦悶や命乞いもせず、ただ淡々と処刑を受けているのが不満なのだ。
受刑者の身体を足元から切れ味の悪い鋸で５cm単位で切り刻む特一級極刑は、既に中盤へと差し掛かっていた。観客に見やすいように斜めに立てられた処刑台の周囲は切り落とされた架神の肉と骨片と血で大きな水溜まりとなっており、涙を流しつつも鋸を引く一ノ瀬のスニーカーを赤く染めあげている。普通の人間ならばとっくに出血死しているところだが、魔人の体力ゆえに架神はまだ死ぬことができないでいる。なお、仮に処刑の途中で死んでも頭蓋を５cm刻みで切り、完全な肉片となって肉体が消滅するまで処刑は続く。
「ヒッ、ひひっ……」
「……次、いきます！」
「ひひゃあっ！」
男性器を切り落とされ、流石に堪えたのか架神が少し大きな声をあげた。観客が少し沸き、何人かの男子生徒は射精したのかぐったりと脱力している。
それらの惨状を壇上から見つつ、ド正義は視線をその変態たちから別の一角へと移した。口説院言葉を殺した架神の処刑を見届けに来た番長グループの面々である。
「……」
ド正義の視線に気づいたのか、その一団の中央に座る黒髪長髪の美青年がド正義を逆に睨みつけてきた。スラックスに白シャツ姿の一見普通の学生のようだが、腰に差した日本刀が剣呑な空気を青年に帯びさせている。〝生徒会〟が潰した希望崎学園剣道部の元主将にして〝剣の悪魔〟の異名を持つ番長グループＮｏ．２、白金翔一郎である。
その視線にどんな意味が込められているのか、ド正義は容易に理解できた。
「架神に何をした、ド正義？」
そんな白金の声が聞こえてくるようだ。
そう思われるのも無理はあるまい。壇上の架神の様子を見ていれ

ば「自分たちが口封じの為に彼の精神を壊した」と解釈されて当然だ。実際、赤蝮の「メギド」を使い〝何かした〟のは事実である。

「(……彼が犯人だ)」

白金からの視線をド正義は正面から受けた。ここで視線を逸らすなどすれば、逆に彼の疑いを強めさせる事になる。

「(それにしても……)」

再び視線を壇上の処刑へと戻しつつ、ド正義はもう一つの懸念へと思考を巡らせた。架神をけしかけた校長の真意についてである。

彼女はこの場には既にいない。校長を始めとする教師たちは始業式が終わると早々に姿を消した。学園自治法によって生徒の私刑が認められている状況下における〝良識ある大人〟の行動としてはそれが当然だろう。

ひと晩で集めた程度の情報ではあったが、ｘｘの調査と架神の証言で「黒川メイが自分の身分を偽り校長に赴任し、架神をハニートラップでけしかけて口説院言葉を殺し、生徒会と番長グループの関係の一層の悪化を進めようとした」という所まではほぼ確定と言えた。しかしながら、これで彼女を弾劾できるのかと言えば――困難である。

少なくとも公的な書類は「黒川メイ」の存在を認めており、それを否定する材料は「彼女の写真が無い」「両親の存在が確認できない」程度である。「親が迷信深く、子供の頃から写真を滅多に撮らせなかった」「両親は既に他界している」とでも言われてしまえばそれまでだ。写真を媒介とする魔人能力もあるので、そう荒唐無稽な理由でもないのが厄介極まる。

また、彼女がド正義にも知られないようにしつつ両グループの関係悪化を進めているのも不可解であった。互いの均衡が保たれ大きな諍いが無かったとはいえ、別に生徒会と番長グループは慣れ合っている訳ではない。校長として学園の治安維持に努めたいというのであればド正義らに直接「もっと番長グループへの抑制を」と言ってくれれば良いだけの話であるはずだ。

口説院や他の番長グループの構成員に恨みがあり、個人的に復讐し

ようとしている？　（魔人が関わる凶悪事件が当然のように連日起きる現代社会において、その手の仇討ちめいた話は珍しくもない）
いや、仮にそういった個人を狙う意図があるだけにしては偽装が大掛かり過ぎる。少なくと彼女は希望崎学園の理事会や文科省を謀って校長を務めているのだ。
「（……？）」
そこまで考え、ド正義は自分の思考に疑問を覚えた。
――そんなに容易く、文科省や理事会を騙せるものだろうか？
魔人の能力の中には変装系能力や偽装系能力、コピー能力や果ては別の生き物に姿を変える変態系（性的な意味でない）能力まで存在している。そういったスパイ系能力者の存在を各省庁や大企業などは当然ながら警戒しており、十重二十重のチェック機構に加え調査系の能力を持つ魔人公務員や魔人サラリーマンを抱えていると聞く。一般人が偽造した書類程度では、例えどれだけ精巧でも穴が見つかるはずだ。
ならば彼女は何故、校長として赴任できているのか？　残る可能性はひとつだ。
「（彼女は……それらの機関から認められた上で行動している？）」
ぞくり、とド正義の背筋に悪寒が走った。
庭を荒らす小動物を追いかけていたら、それが巨獣の尻尾だったかのような感覚。
「あ……あの、会長……」
その時、鋸を下ろした一ノ瀬がこちらを向いている事にド正義は気付いた。悪寒を振り払うように頭を振りつつ、彼に向き直る。
「どうした、一ノ瀬くん」
「か……架神さん……死にました」
そう言う一ノ瀬の顔には深い焦燥が表れている。見れば、既に臍の上あたりまで切り落とされていた架神はぐったりと頭を垂れていた。口元には笑みが浮かんだままだ。
ド正義は眼鏡の蔓に指を添えつつ一ノ瀬に言った。

「……続けてくれたまえ、一ノ瀬くん。最後まで」
「あ、は、はい……分かり……ました……」
弱々しく頷き、一ノ瀬は再度鋸を握り締めると〝次の５㎝〟を切り始めた。
受刑者が死んだ事が分かったのだろう。変態的嗜好で観に来た生徒たちはある者は満足そうに息をつき、より強い刺激を期待していた者は「もっと頑張れよなー」などと悪態をつきつつ椅子を立ってゆく。
――「架神恭介」の肉体が完全に消滅したのは、それから３０分ほど後の事だった。

「……以上が、今回の口説院言葉殺害犯・架神恭介の特一級極刑に関する報告となります」
希望崎学園・校長室。
肉片となった〝架神恭介〟の袋詰めと壇上の洗浄を終え、ド正義は木製の上質なデスクを挟んで校長への報告を行っていた。男性向けのチェアにちょこんと座るメイの姿は実に可愛らしいものであったが、今のド正義にはそれも何かの演出なのではないかと思え、内心で警戒してしまう。
発端であるお楽しみ会から今朝の処刑に至るまでの流れが書かれた報告書を、メイは青い顔で受け取った。
「分かりました。書類を受理します……ご苦労様、ド正義くん。ごめんなさいね、本来なら校長である私も立ち会うべきだと思うんだけど……先生、どうしても血がダメなの」
「いいえ、これも生徒会の職務の一環ですので」
背筋を伸ばし、ド正義は答えた。
「……本当に死んじゃったのね、架神くん。彼が歓迎会で作ってくれたカレー、とても美味しかった」
そう言うとメイは少し瞳を潤ませ、鼻を鳴らした。
これはどこまで本心からの言葉なのか？　身体を重ねた相手である以上、多少の情なりはあったのだろうか？　男女の仲に疎いド正義

にはそこまでは測りかねた。
「お言葉ですが校長、彼が殺人を犯したのは事実です。我々生徒会がそれを校則に則って量刑し、処分した。それだけの事です」
「強いのね、ド正義くんは……お父様も、そんな方だったのかしら？」
「!?」
　急に父親の事を話題に出され、ド正義は言葉に詰まった。
「父をご存知なのですか？」
「教育に携わる者で貴男のお父様を知らない者は居ないわ。『学園自治法』制定の中心人物にして１９６０年代末期の魔人解放セクト『プロテスト魔人連盟』の代表。相手がどんな人物だろうと『相手も人間、話せば分かる』を信条に対話での事態解決に努めようとした高潔な人物……そう教わりました。できるなら、お元気な内に一度はお会いしてみたかったわね」
「……父を憎む者は魔人を含め多く居ました。遅かれ早かれ、起こった事ではあったと思います」
　一年前の６月、ド正義卓也の父であるド正義克也は研究者として勤務していた大学の研究室で殺害された。他殺である。
　彼が提唱した国内全ての高校・大学の敷地内を治外法権とし、学内での諸問題は学生の自治によって管理運営されるべきという「学園自治法」は、そもそもは１９６０年代に顕在化した魔人差別や魔人否定の偏向的教育に対し「学内を学生の自治によって運営する事で、学生を偏った思想教育から守り魔人差別を無くす」というのがコンセプトであり、壮絶な学生運動の果てに超法規的措置により可決された際には全国の魔人学生たちは喝采を上げたという。
　しかし彼の崇高な思想までは魔人学生たちには伝わらなかった。「学内は治外法権」という点だけがクローズアップされた同法案実施後、各地の高校・大学では魔人がグループを作り学内を実質的に支配、レイプや殺人が横行する事態が続発したのだ。結果、魔人差別を無くす事を目的としたはずの学園自治法は魔人の横暴を認めるだけの悪法と化し、半世紀に渡り「世紀の悪法」という烙印を押される事となった。

学園自治法制定後の世論の変化により就職困難に陥った者、老後の保証を失った者、あるいは学内で魔人に息子や娘の命や純潔を奪われた親など、克也を直接的、間接的に恨む者は多い。彼はそれを生涯正面から受け止める事を覚悟し、大学の研究者として魔人差別撤廃への働きかけを粘り強く行っていた。ド正義卓也にとって尊敬すべき父であり、同時に反面教師とすべき面を持つ人物でもある。その感情は一口には言い切れない。

「……ごめんなさい。言っちゃいけない事だったわね」

「既に一年以上前の事です、気持ちの整理はできています。ご心配なく……では、失礼致します」

謝るメイにド正義は淡々と答え、頭を下げた。処刑は済んだが二学期は始まったばかりだ。11月の学園祭へ向けての準備などもあるし、生徒会としてやるべき仕事は山積みである。

一礼して退出しようとするド正義に、最後にメイが尋ねた。

「ねえ、ド正義くん……架神くんが処刑された事で、番長グループは納得してくれるかしら？」

「……断言はできません。しかし、そうあって欲しいと思います」

無難な、しかし本心からの返答を残しド正義は校長室を出た。生徒会室に向かいつつ今後の事を考える。

大丈夫だ。白金はまだ思うところはあるようだが、とりあえずの落としどころとしては決着がついた。これで当面、何かしら問題が起こらなければこれ以上の事態の悪化は防げる筈だ。何も、起きなければ

――

「何も……起きなければ、か」

足を止め、ド正義は振り向くと校長室のドアを見た。

急がねばならないだろう。彼女の「正体」に辿り着かなければ、確実にメイは何かをしてくる筈だ。おそらくは、彼女の目的はまだ達成されていない。

今度こそド正義は校長室に背を向け、生徒会室への歩みを速めた。

「ハッキング……ですか？」

『そうだ。君が在籍していた事になっていた大学や高校、小学校などのデータベースに不正アクセスの痕跡があったのが発見された。とはいえその痕跡もごく僅かなもので、アクセス元の特定などはできていない』
「ハッカーの気まぐれ……では無さそうですね」
『かなりの手練れによる犯行だ。あるいは電脳系の魔人かもしれないとサイバー課では言っている』
「……」
『盗聴を心配しなくとも大丈夫だ。この回線は私と君との間だけのローカル……まあ、糸電話みたいなものだ』
「……はい」
『そちらの進捗はどうかね？』
「あと一息といった所です。今日の処刑であの馬鹿が生徒会長に裏切られたと誤解するよう仕向けたのですが、そちらは不発でした」
『まあ、全部が全部上手く行くわけでも無いからな……』
「ですが、両陣営の関係は春に比べ格段に険悪になっています。ここで生徒会の適当な役員を殺して番長グループに罪を被せれば、十分に場を温められるかと」
『そうか……ならば、それを予定より前倒ししてくれ給え。君の偽の経歴が探られた以上、学内に疑っている者がいると考えるべきだろう』
「了解しました。対象の選別を含め、三日以内に実行に移します」
『二日だ。〝ハルマゲドン〟の申請から認可までの日数も必要になる。ハンコが必要な仕事は短縮できない。素晴らしきお役所仕事だな』
「……分かりました。二日で」
『――頼むぞ、月読（つくよみ）二尉』

第五話「一ノ瀬蒼也」

「……ご苦労じゃったのう、白金」

窓も無く薄暗い空間。壁周りには幾つもの木箱が積み上げられ、床はゴミや倒れた机や椅子、更にはよく分からない資材などが散乱している。

その空間の中心に高さ１０ｍ程の大きさの巨大な座像があった。羅刹の如き形相の何故か学ランを来た座像で、どういう訳か血と汗と吐瀉物を乾かさず数十年放置していたかのような強烈な異臭を放っている。

――否、よく見ればそれは座像ではない。生きた人間である。

「それで……どうじゃった？」

この男こそ現番長グループのＮｏ．１にしてかつて希望崎学園を支配していた番長「戦慄のイズミ」を倒し伝統の長ランを奪った男、邪賢王（じゃけんのう）ヒロシマであった。

ド正義率いる生徒会と対立し、学園の陰の部分を支配していると噂される番長グループは一般生徒からは恐怖の対象であり、無論その頭である邪賢王は様々な伝説で恐れられている。

曰く「一日一人は殺さないと眠れない」、曰く「生意気を働いた手下は文字通り『喰われる』」、曰く「あの悪臭を嗅いだだけで死んだ奴がいる」、曰く「番長小屋で毎晩退廃的な宴を行っている」、曰く「あの『鏡子』が番長側に就いているのは邪賢王の巨根に惚れているからだ」

――何れも根拠も何もない風説であるが、あの『邪賢王』なら有り得るという事で半ば事実のように生徒たちの間では語られていた。

「特に問題なく処刑は完了した……とは、言えない」

その邪賢王の正面に立つ男、白金翔一郎は険しい表情で答えた。

「何ぞあったんかい？」

「架神は処刑台に乗せられた時には既に発狂していた。日頃からヘイトを撒き散らす馬鹿だっただけに、恐怖に耐え兼ねて狂ったのかもしれないが……ド正義が口封じをした可能性がある」

「……らしくないのう、白金。根拠も無いんじゃろうに」

「ああ、オレの勘だ……だが邪賢王、俺はお前ほどド正義を信用していない」
そう言う翔一郎の顔には深い怒りと悔恨が刻まれている。口説院言葉が死んでからまだ一週間程度、彼女の死を過去のものにするには短すぎる時間である。
「ひとまずは、ここまでじゃ」
彼を鬼神のような顔で見下ろしつつ、邪賢王は言った。
「だが邪賢王、もし生徒会がこれ以上何かする気なら此方から先手を……」
「ふぬがぁっ！」
突然邪賢王は立ち上がるとそのまま垂直に跳躍し、身体を上下逆にしたかと思うと頭から床に落下した。轟音と共に木箱が崩れ、埃が舞う。
「……」
彼の突然の奇行を翔一郎は冷静に見つめていた。原因は分かっている。元番長グループメンバーにして現生徒会メンバーの女子、怨み崎Ｄｅａｔｈ子の能力に由来する自傷行為だ。まあ、どれだけ邪賢王が自身で自分を傷つけようとしても彼の肉体は絶対に致命傷を負わないのであるが。
実際、何事も無かったかのように邪賢王は起き上がるとボロボロの学帽を被り直し、再度翔一郎の前に座った。
「言葉と架神のアホウの命が同列とはワシも思わん……じゃが、互いに一人ずつ死んで一応のケリは着いたのも事実じゃ。ここでワシらから仕掛ければ、スジが通らんのはワシらの方ってぇ事になる」
「……そうだな」
「その時が来ればワシも迷いはせん。今は待て」
話の腰を折られた事で冷静さを取り戻したのか、邪賢王からそう諭された翔一郎は黙って頷いた。
その姿に、邪賢王は外見に似つかわしくない気遣いを感じさせる響きと共に頭を下げた。
「……すまんのう」

「いや、悪いのはオレの方だ。まだ頭に血が上っているらしい……少し、外の空気を吸ってくる」
白金はそう言うと身を翻し、番長グループの拠点であるこの空間「番長小屋」の戸を開けて外に出てゆく。
邪賢王は、戸が閉まる音と共に小さく呟いた。
「信じとるぞ、ド正義。おどれがそこまで腐っとらん事をな」

ダンゲロス／ＩＦ　第五話　「一ノ瀬蒼也」

「……はぁ」
確かに食欲が沸かなかったのは事実だが、何故俺は日替わりパスタを注文してしまったのだろう。
生徒たちが賑やかに集まる昼の学食、一ノ瀬蒼也はそう思いつつ眼前のミートソースパスタを持て余していた。
決してパスタが嫌いという訳ではない。一ノ瀬に嫌いなものは殆ど無く、先輩からの奢りであれば何でも食べた。しかしながら昨日の処刑の記憶が鮮明に残っている現在、このミートソースの色と具材は否応なくそれを思い起こさせてしまう。
「うぷっ」
咽の奥からこみ上げてくる吐き気に、思わず一ノ瀬は手で口を押さえた。
「大丈夫？　一ノ瀬くん」
その時、柔らかな女性の声が耳に届いた。口を押さえたまま一ノ瀬が顔を上げると、スーツ姿の小柄な女性が前の席に座っている。
「こ、校長先生!?」
「昨日は本当にお疲れ様。大変だったわね」
「いっ、いえっ！　あ、あの程度、全然ですよ！」
心配そうに声をかけてくるメイに一ノ瀬は少し声を裏返りさせつつ答えた。日頃から生徒会に親しく接する女性校長ではあるが、こうして直接声をかけてくる事はあまり無い。生徒会の業務連絡をする以外で女性と話をした事がない一ノ瀬は緊張も露わに姿勢を正した。

その一ノ瀬の様子に、メイは気遣うように言った。
「架神くんの事は残念だったわね……一ノ瀬くんも辛かったでしょうに」
そう言われ、一ノ瀬は寂しそうにしながらも首を横に振った。
「……いいえ、先生。あれは、俺からお願いした事でしたから」
「処刑役のこと？」
「はい」
一ノ瀬はきっぱりと答えた。大丈夫である事を示そうと、吐き気を堪えながらパスタをフォークに一巻きして口に放り込む。
血の臭いがしてきそうな錯覚を押し流そうと水でパスタを無理に呑み込ませ、一ノ瀬は再度口を開いた。
「俺……その、架神先輩には本当に世話になったんで。そりゃ、まあ、身勝手で口の悪いところもありましたけど、それでも俺みたいな駄目なヤツにもしっかり気をかけてくれて……だから、先輩が処刑されるって聞いた時に俺からお願いしたんです。特一級極刑で酷い死に方をするのが避けられないなら、せめて俺が先輩の引導を渡そうって」
そう言い終えると一ノ瀬は一息ついた。誰かに内心を打ち明ける事で、少し心が軽くなったようだ。多少は食べる気が起きてきたパスタをもう一巻き口に入れる。
メイは一ノ瀬の言葉を真剣な表情で聞き終えると、優しく微笑んだ。
「優しいのね、一ノ瀬くんは」
「っ!?　や、優しいって、そんな事ないですよ！　俺なんて、魔人って言ってもダメダメで……」
どきり、と一ノ瀬の心臓が跳ねた。彼女無し歴と年齢が完全に一致している一ノ瀬にとって、女性から微笑みかけられる事は極めて稀である。大人びた態度をとる子供のような挙動から〝ドジっ子校長〟というキャラで既に学生達の間では定着している黒川メイであるが、やはり大人なのだろう。その微笑みには大人の落ち着きと――色気があった。

「……ねえ一ノ瀬くん。この後、ちょっといいかしら？」
微笑みに蠱惑的な雰囲気が混じる。彼女の囁きに、一ノ瀬は考える前に頷いていた。

【……】
０と１のノイズが宙に浮かぶ電脳空間内。
【……釣れねえな】
麦わら帽子を被った影法師、ｘｘは折り畳み椅子に腰かけつつ何本もの竿を立てかけ、釣り糸を下ろしていた。
これは別に彼が釣りゲームをやっている訳ではない。釣り糸は彼のデータ探索のイメージであり、水面に見えるそれは文科省付近のフリーＷｉ―Ｆｉスポットである。

何度かのアタックの後、ｘｘは自分の能力で省庁のデータベースを突破するのはソフト的にもハード的にも困難である事を理解した。流石は湯水のように予算を使えるだけはある。最新鋭の電脳防壁に熟練のＳＥ達による執拗な位置追跡。幾つかのダミー発信源を経由して探っているだけに追跡はダンゲロスには辿りついていないが、これ以上繰り返せば自ずと探られるのは明確であった。
そこでｘｘは省庁の付近のカフェや公園などのフリーＷｉ―Ｆｉスポットに焦点を変え、そこを利用する者の情報端末から断片的なデータだけでも探ろうとしていた。
確かに省庁内の電脳防御は堅牢だが、そのデータを仕事上持ち出す者は必ずいる。そして１０人が１０人、ネットセキュリティに対して十分に注意を払っているとは言えない。特に年配の管理職などはＰＣや携帯のセキュリティを初期設定のまま放置している者もいる。それを狙う格好だ。
【ああ、またハズレだ畜生】
大きなデータの流れを感じ、引きのあった釣り糸から吸い上げたのが単なる無修正エロ動画だったのを確認しｘｘは悪態をついた。

安全性こそ高いものの、実際に餌場（スポット）に標的が来るのかは運任せ。実際、気の長い作業である。

しかしながらｘｘは根気よく釣りを続けていた。学園自治法が無ければ当の昔に逮捕されるに足りるだけのネット犯罪を犯してきた電脳魔人である。彼の経験に基づく勘が、彼女――校長の正体に関する情報の重要さを知らせていた。

【ん？】

別の釣り糸が引いた。不用意にスポットを利用したノートＰＣの中身へとｘｘがすかさず探りを入れる。

【……おっと】

ユーザー情報に触れ、ｘｘは眼を細めた。どうやらようやく〝当たり〟を引けたようだ。省庁御用達のシリアル入りの最新型ＰＣである。

素早く、しかしセキュリティソフトを刺激しないように丁寧にｘｘはＰＣのデータ内へと潜ってゆく。雑多な情報が溢れる中で、必要な情報を探す。

【黒川メイ、黒川メイ……っと】

既にそれが偽名であることをｘｘは知るが、公の書類でそれを名乗っている以上は何かしらの資料や画像があるかもしれない。画像ファイルをアルバムを開くように覗き、高速で走査してゆく。

【……あぁ？】

ｘｘは顔をしかめた。

【こりゃ一体……？】

見慣れないものでなく、見知った人物の写真。

ド正義卓也以下、生徒会メンバーの写真がそこに並んでいた。

キーンコーンカーンコーン……

昼休みの終わりを告げるチャイムが遠くで聞こえる。

前方を校長が先導しているとはいえ、生徒会役員の端くれである自分が授業をサボって良いものだろうか。

一ノ瀬は落ち着かなげに周囲を見回した。現在、彼とメイは校舎か

ら1、2ｋｍほど離れた敷地内の森の一角を歩いていた。番長グループの巣窟である〝番長小屋〟とは反対方向で、授業が始まった事もあり人の気配は皆無だ。
「あ、あの、先生。どこまで行くんですか？」
「ええっと、この辺りだと思ったんだけど……」
一ノ瀬の問いかけにメイは自信なさげに周囲をキョロキョロと見回した。小動物めいた仕草が何とも可愛らしいが、どうにも頼りない案内人である。
「あ！」
しかしながら、彼女はどうにか目的地を見つけられたようだ。小さく飛び跳ねると、その場所を指さした。
「一ノ瀬くん、あそこ！」
それは、小さなテーブルと幾つかの椅子、そしてやはり小さな屋根を備えた休憩所だった。おそらくは森の中の憩いの場所として創設時に造られ、そのまま忘れられた場所なのであろう。周囲の雑草は伸び放題で、腰くらいまで生い茂ったそれは自然の垣根となっている。
「こんな場所があったんですね……」
「ふふっ、校長になりたての頃に学内の施設を巡回中に迷った時、偶然見つけたの。地図にも書かれていないわ」
そう言うとメイは小走りに休憩所に駆け寄り、スーツのポケットからティッシュを取り出すと椅子の上の落ち葉を掃った。もう一つの椅子も同様に綺麗にして、一ノ瀬を視線で促す。
一ノ瀬はおずおずと彼女に続き、落ち葉の払われた椅子に座った。9月初旬のまだ汗ばむ気配であるが、木々が丁度良い影を落としてくれているお蔭か涼しい風が流れてくる。
「ええっと、それで……」
何でこんな場所まで？
そう聞こうとした一ノ瀬の顔は柔らかな感触に包まれた。
「!?」
清潔な白いシャツの内側から伝わる温もりと、小柄な身体の割にしっかりと存在を主張する豊かな乳房の感触。

何が起きたのか、一ノ瀬はようやく理解した。椅子に座った一ノ瀬を包むようにメイが立ったまま抱きしめているのだ。
「せ、先生……!?」
「……辛かったわよね、一ノ瀬くん」
労わるようにメイは言った。びくりと一ノ瀬の身体が強張る。
「……!」
「一ノ瀬くん、架神くんといつも一緒だったものね……架神くんも、貴方が後ろについてくるのが嬉しそうだった」
そう言われ、一ノ瀬の脳裏に架神との日々が思い起こされる。騒々しくて、面倒なところもあって、口も悪かったけど自分に気をかけてくれていた陽気な架神の姿を。そして時折の無茶ぶりに辟易する時もあったけど、何だかんだで楽しかった日々と、彼の作ってくれたカレーの味を。
胸が苦しくなり、目の奥から涙が滲んでくるのが分かる。涙でメイのシャツを汚してはと一ノ瀬は身体を離そうとしたが、メイは抱きしめる手を強めた。
「ここなら、誰も見ていないわ……一ノ瀬くん」
「先生……!」
学食でなくここまで自分を連れてきた理由を一ノ瀬はようやく理解した。
「いいのよ。男の子でも、泣きたい時は思い切り泣きなさい」
「先生……俺、俺……!」
抑えようとしていた涙が零れる。一ノ瀬は鼻をすすりつつメイの胸に顔を押し当てた。ほのかな香水の香りが鼻孔を刺激する。
「うっ、ううっ……!」
「よし、よし……」
嗚咽する一ノ瀬の背をメイの手が母親のように優しく撫でる。
生徒会役員が処刑ひとつで大泣きしてはいけない。そう思い、処刑前から懸命に抑え込んでいた感情が溢れてくる。少しの情けなさを覚えつつも、一ノ瀬は自分の事をここまで気遣ってくれた校長に感謝した。

「……ねえ、一ノ瀬くん」
「は、はいっ、先生……」
「先生、気付いているかもしれないけど口下手なの……良い先生ならここで一ノ瀬くんを元気にさせられるひと言をかけられたと思うんだけど、今の私にはそんな言葉は思いつかない。尊敬していた先輩を失った、君の気持ちを完全に理解してあげる事も出来ない」
「い、いえっ……そんな……ううっ……」
「だから……」
一ノ瀬の頭に添えられていたメイの手が離れた。その手は――
「っ!? せ、先生!?」
「だから……」
――一ノ瀬の股間を、優しく撫でた。
「……〝私で〟元気になって」
一ノ瀬の心臓が跳ね上がった。同時に股間の愚息も跳ねた。
「白昼の学内で美人女教師とセックス」、思春期の童貞少年であれば一度は妄想するであろうシチュエーションである。それがまさか、こんな形で降ってかかってくるとは。
涙は引っ込んだものの、今度は全身から興奮と緊張で汗が滲んできた。
さわさわっ
「う、うあぁっ! 先生、先生っ!」
少しズボンの上から弄られただけで危うく発射しそうになり、一ノ瀬は悲鳴をあげた。
その反応に、メイは今まで見たこともないような艶めかしい微笑みを浮かべると一歩引き、スカートの裾を摘まむと上へたくし上げた。
「あ、あぁ……」
レースに彩られた黒の下着が一ノ瀬の眼前に露わになる。
「一ノ瀬くん……脱がせて……」
メイの囁きに、一ノ瀬は震える指を差し出し彼女の腰に手を添えた。女体の神秘が、この布一枚の向こうにある。
「……」

「……え？」
その時、メイの唇が動いた。
興奮しきった一ノ瀬の脳髄はそれを完全には認識できなかったが、こう、彼女は言ったように思えた。
「大丈夫よ、一ノ瀬くん。すぐにみんなもそっちに行くから」
意味は分からなかった。ただ、この下着の向こうの〝彼女〟を見たい。その欲求に突き動かされたまま、一ノ瀬はメイの下着を引き下ろした。

――大場外ホームラン球を取りに来た野球部員が一ノ瀬蒼也の死体を発見したのは、その４時間後である。

「……！」
ド正義の額に汗が浮かぶ。努めて冷静に状況を判断するよう自分に言い聞かせるが、その動揺は隠しきれてはいない。
「何てこった、一ノ瀬……！」
後ろに控える何人かの生徒会役員。その中の一人、二年の〝エース〟が呻くように言った。
一ノ瀬の死体は極めて綺麗な状態だった。制服の上下は乱れておらず、少し落ち葉が貼りついている程度で返り血なども無い。
ただ彼の両目の部分から、二本の長く太い針のようなものがにゅっと突き出ていた。この針が一ノ瀬の両眼を貫き、そのまま脳を破壊したのだ。おそらくは即死である。
「……一ノ瀬くんのご両親にすぐに連絡を。今日予定していた生徒会業務は中止する」
ド正義は何とか「このような状況でも取り乱さない生徒会長」としての態度を整えると、背後の生徒会メンバーに言った。
「ド正義……これは、やはり……」
役員にして陸上部部長である範馬慎太郎が重い口調で尋ねてきた。その語尾は途切れているが、言いたい事は分かる。そして他のメンバーも同じ事を考えているだろう。

――これは、番長グループの報復なのではないか？

確かにその可能性は高い。ド正義もそう思う。一ノ瀬の能力は食用動物をパック肉にする「テキサス・マスクゥル」。他人から危険視されるような能力ではないし、入学半年の一年生である一ノ瀬に殺意を持つ者など番長グループしか存在しない筈である。実際少し前のド正義であれば迷いなく番長グループの犯行と断定しただろう。

だが、今のド正義にはそう断言しきれない疑念があった。もしこれが、生徒会と番長グループの関係悪化を望む者の仕業だとしたら――

「一ノ瀬くん!?」

背後からの女性の悲鳴によってド正義の思考はそこで遮られた。振り向けば、愕然とした表情でメイが立っていた。よろめくように一ノ瀬の死体にすがりつき、眼に突きたてられた針に視線を向ける。

「こんな……ひどい……！」

目に浮かぶ涙を拭いつつ、メイはド正義に聞いた。

「ド正義くん……これは、番長グループの犯行なの？」

「……可能性のひとつとしては有り得ますが、まだ調査をしていない以上何とも言えません」

「でも、番長グループ以外の誰が一ノ瀬くんを殺したと言うの!?」

語調を強め、メイは問い詰めるようにド正義に更に言った。

「……！」

ド正義はその言葉を否定できなかった。

あるいはこの場所に居るのがド正義とメイだけだったならば、やんわりと彼女の言葉を否定できたかもしれない。しかし今は生徒会役員の前である。この状況でド正義が番長グループを擁護するような事を言えば役員の皆は困惑し、ド正義への不信感を抱くだろう。

ド正義の沈黙を肯定と受け取ったのか、メイは静かに頷いた。

「……分かりました。ド正義くん、生徒会と番長グループの抗争はこれ以上の和解は不可能、全面的な抗争は不可避と判断します」

「先生？　それは……」

メイの瞳には強い決意が浮かんでいる。ド正義は嫌な予感を覚えつつ彼女の意図を尋ねた。
「校長として、学内の治安の安定化には早急な番長グループの殲滅と一般生徒に被害が及ばない状況が望まれます。よって私、黒川メイはここに校長権限に依り公認全面戦争『ハルマゲドン』開催を決定する事とします」
「ハルマッ……!?」
ド正義は言葉を失った。

全面戦争『ハルマゲドン』。
学園自治法に守られた学内において諸勢力の抗争が激化し、学園の維持すら困難と判断された場合に発動されるルール無用・時間無制限の学園内を試合場とした殺し合いである。勝利条件は相手勢力の全滅、あるいは捕虜として拘束する事による完全な無力化。それだけだ。
この間フリーの一般生徒たちは学園から非難し、職員たちは核シェルター級の防壁を誇る地下シェルターへと非難し、殺し合いが終わるのを待つことになる。まさに殺し合いのためだけの舞台が作られるのだ。
しかし、そうはいっても数十人の魔人による全面戦争である。学内の施設が破壊される可能性は高く、仮に勝利したとしても勝った側も無傷とはいかない。故にハルマゲドンの開催は色々な意味で最終判断と言えた。

そしてそんなハルマゲドンを、彼女は開催すると言ったのだ。
何とか彼女を止める言葉は無いかと頭を働かせるド正義に、メイは畳みかけるように言った。
「ド正義くん、貴方はいつも言っていたわね？　『いずれ番長グループとは決着をつける』って」
「それは……は、はい、確かに……言いました」
「既に状況は『いずれ』では済まなくなっているわ。一ノ瀬くんのよう

な犠牲を、私もこれ以上出したくないの」
「……」
「危険な事は分かっています。でも……お願い、生徒会の手で番長グループを潰して、学校を平和にしてあげて」
生徒会メンバーの視線が自分の背中に注がれるのを感じる。
「……分かり、ました」
もはやそう答えるしか、ド正義に選択肢は残されていなかった。

第六話　テロ組織〝生徒会〟

「過去の書類は箱詰め済んだものから地下倉庫に持って行って！」
「災害時用のポリタンク５０個、届きました！」
「廊下の蛇口を片っ端から使って全部満タンにしとけ！　水は幾らあっても足りねえぞ！」
「肌着の着替えの用意、３０日分で大丈夫ー？」
「男子は半分の１５日分でいいんじゃない？」
「ちょっと誰よ、必要品に『コンドーム１ダース』って書いたの!?」
「いや、絶対に要るって！」
「『期間中の非常食はＣレーションにしてくれ』って要望が……」
「そんな予算はねえってよ！　１００均スーパーでバランス栄養食ありったけ買ってこい！」

何人もの役員が走り回り、様々な連絡や確認や怒声が飛び交う。生徒会室のある教員棟はかつて無い雑然さと緊張感に包まれていた。
それらの進捗を確認しつつ、廊下を歩く人物が二人。
「どうやら、ハルマゲドン開催までには準備は整いそうだな」
右を歩く人物、ド正義卓也はテキパキと動く役員たちの姿を見つつ言った。
公式の全面戦争であるハルマゲドンは、学園が文科省に申請して行うひとつの特殊行事である。そのため書類などの準備やら各関係者らの捺印が必要であるし、何より一般生徒への告知から開催までの期間を置かねばならないため即開催とはいかない。土日は書類仕事が進まない事を考えると、おそらく最短でも９月１０日前後になるはずだ。
過去に他校で開催されたハルマゲドンのデータを元に分析したところ、その開催期間はどんなに長くても一ヵ月。生活に関する設備の整った生徒会側と、粗末な番長小屋を根城にする番長グループとでは長期戦になれば生徒会が有利となる。その優位性を確かにするためにも、事前の物資の準備は必須であった。

「ただ、この時期にこんな形で予算を使いたくはなかったですね。１１月の学園祭に使える分が相当に減りました」
その左を歩く、サラサラした銀髪をおかっぱ風に切り揃えた褐色の肌の小柄な少女。
彼女、ファーティマ・アズライールはそうぼやきつつ帳面の数字に目を走らせた。生徒会会計を務める、中東出身の魔人である。
「まずは我々が生きてハルマゲドンに勝利するのが優先だ」
「勿論、それは分かっています。死んではお金も使えません」
生徒会メンバーの中でも図抜けた金銭に関するセンスと、それに相性の良い能力を併せ持つアズライールはド正義の言葉に澄まして言った。
やがて二人は生徒会長室まで戻ってきた。この後は主だったメンバーを集めての、今後の戦略やハルマゲドン中の戦術についての緊急会議となる。
「……ん？」
その時、ド正義の携帯が震動した。ポケットから出してみると画面には「ｘｘ」の表示。
「ｘｘ君、ようやく繋がったか……」
ド正義は安堵と苛つきの混ざった声を漏らした。一ノ瀬蒼也の死体を確認した後からド正義はｘｘに連絡役を頼もうとしていたのだが、何故か通信が繋がらなかったのだ（肉体は電脳室に居るが、ｘｘの精神が電脳世界に完全に飛んでいる間は意思疎通は不可能である）。
まずは一言注意してから用件を話そう。そう思いつつド正義は着信をＯＮにして、音声入力モードに切り替えた。
「遅いぞ、ｘｘ君。今まで何を……」
【うｄｈｄｈａふぁｄｋ，ｚ槽すオ嗣ｑ７】
普段ならばｘｘからのメッセージが表示される筈の欄に、謎の文字化けが発生していた。
「……ｘｘ君？」
【ｗｐさ･ｊ輿ｘｚ４ｋｍ@ド正義！】

怪訝な表情でド正義が更に声をかけると、続いていた文字化けがようやく分かる形になった。
「ｘｘ君、何があった？」
【すまｃｃねえ、ちょｄっと無茶をした。後で俺の身２＃体をｇ保健ｒ室に運@んでおいてくれ】
ｘｘの言葉にノイズめいた記号が混じる。不穏な気配を感じ、ド正義は緊張した面持ちで言った。
「一体どうしたのだ、ｘｘ君!?」
【話ｒは後だ。ド正3義、お前ｇｇがとんでもねえ事）になってやが〉る】
『とんでもない事』ならばとっくになっている。一ノ瀬君が殺され、校長はハルマゲドンの開催を決定した」
【……!?　畜生、先ｍｍ手を打たれたかｈ】
「……先手？」
【とにか”くこ･･れを見ｇてくれ。俺はｖ少し＋休ｏｏむ】
その言葉と共に、何かのデータが送られてきた。さほどの容量は無い。このデータのためにｘｘはこれ程傷ついたのだろうか。
ド正義はそのデータを展開した。
「……？」
最初に目に入ったのは、自分の顔だった。
入学時の提出書類だろうか。証明写真サイズのド正義の写真が何かの書類に貼られ、その横には身長・体重・血液型などのデータが並んでいる。
「ｘｘ君、これは……」
だが、その下の備考欄に書かれた簡潔な表現を見た時、ド正義の表情が凍った。
「な――!?」
Ａ級テロリスト指定・ド正義卓也（希望崎学園三年・同学園生徒会長）

生徒会長室にはコの字型に長机が並べられ、既に役員達が席に着いていた。
「……遅いわね、会長」
隅の方でおどおどと周囲を見回しつつ、一年の怨み崎Ｄｅａｔｈ子が横の絶子に言った。
「そうね……会長が会議に遅れるなんて、初めてじゃないかな？」
「アズライール先輩も一緒だったし、予算の事で何かあったんじゃないかな？」
その横の友釣香魚（あゆ）が憶測を言ったその時、会長室のドアが開いた。
「……すまない、遅くなった」
その声と共にド正義は部屋に入ってきた。その後ろからアズライールが続く。
「おはようございます、会長、先輩……？」
席を立って礼をしようとした香魚は、アズライールの表情を見て言葉が途切れた。
普段からクールで落ち着いた雰囲気を保っているアズライールが、その顔に汗を浮かべ、何かに怯えるように顔を伏せている。
やがてアズライールはド正義から離れて自身の席に腰を下ろし、ド正義はコの字型の机の縦線の中央、全体を見回せる議長席に座った。
ド正義の表情は普段と変わらないように見えた。しかし、その身体から放たれる空気が何時もとは明らかに違っていた。
「……」
ド正義は全体を見回し、静かに言った。
「さて、本日の議題だが……皆も知っての通り、生徒会一年の一ノ瀬蒼也君が殺された。まだ犯人は不明だが、本件について校長は番長グループによる報復行為と判断。一般生徒への被害拡大を避けるため、全面戦争『ハルマゲドン』の開催を決定した。開始日時はまだ未定だが、おそらく９月１０日頃になると予測される」
ド正義の言葉に範馬が頷いた。ここまでは共有されている事柄だ。

そして、その対策をこれから練る事になる。場の全員がそう把握していた。
――ド正義とアズライール、そして現在保健室で治療中のｘｘを除いては。
ド正義は皆を再度見回し、大きく息を吐いた。
「フジオカ君、室内の盗聴器や隠しカメラのチェックは済んでいるか？」
「あ？　ああ、盗聴器も、その盗聴器をダミーに仕掛けられていた録音機能付きカメラも全部見つけてあるぜ」
軍服風に改造された制服を着たベレー帽の老け顔の男、フジオカは急に話を振られて戸惑いつつも当たり前のように答えた。かつては学内で無差別爆破テロを行っていた危険人物であり、そういった仕掛け場所を読む事にかけては生徒会随一である。
フジオカの回答にド正義は確認するように頷くと僅かに口元を食いしばり、目を閉じ、開いた。
「……皆に結論から言おう。このハルマゲドンは、僕たちを殺す為に仕組まれたものだ」
（――さて、これで引き返せなくなった）
自分に向けられる動揺と困惑の視線を浴びつつ、ド正義は考えた。
ｘｘからのデータを確認した直後、ド正義とアズライールは電脳室に向かい、そこで目鼻から血を流して昏倒しているｘｘの肉体を発見した。
魔人による重大な傷害事件にも対応できるように設備された希望崎学園の保健室は大学病院のそれに匹敵する設備を備えているが、ｘｘの身体は肉体的にはそこらの一般人にすら劣る。しばらくは安静が必要だろう。
そしてその後、ド正義は改めて全てのデータを確認し――先ほどの発言に至る確信を得た。アズライールが入室時に動揺していたのは、既にこの話を先に言われ、気持ちの整理が追い付いていかなったから

だ。
　ここからは幾本もの綱を渡らなければならないだろう。自分自身だけではない。生徒会の皆を生き残らせるために、ド正義は文字通り自身の血肉の全てを捧げる覚悟を決めていた。
「す……すまない、ド正義。それはどういう意味だ？　その……多分、俺だけじゃなくって誰も理解できていないと思うんだが……」
　皆の気持ちを代弁するようにエースが尋ねた。ド正義は頷き、手元のプリントの束を手に取った。
「まずは見て貰った方が早いだろう。これを順番に見てくれ。決して複写や撮影はしないように」
　そう言うとド正義は一番近い位置にいたＤｅａｔｈ子にまず書類を渡した。
「え!?　あ、は、はい……」
　ビクッと跳ねるような反応を見せつつ、Ｄｅａｔｈ子はそれを受け取り一枚目から見始めた。
「え……え!?　ええ!?」
　途中まで読み進め、Ｄｅａｔｈ子は激しい動揺を見せた。問いかけようとド正義の方を見てくるが、ド正義は彼女が口を開く前に言った。
「まずは全員が読み終えてからだ、それから説明させてもらう」
「わ……分かり、ました……」
　Ｄｅａｔｈ子は消えそうな小声で答えると、読み終えたそれを横の絶子に渡した。
「……ちょ、これ、嘘でしょ!?」
　絶子から香魚へ。
「……!?」
　香魚から横の縮れ髪の優男、夢見崎アルパへ。
「ふわぁぁ……」
　気怠そうにあくびしつつ、パラパラと書類をめくるとアルパは横のライオンめいた巨漢、リンドウへと渡した。
「……何だと!?」

リンドウが立ち上がり、向かい側の机の端の跳ね髪が特徴的な空手少女、ツミレへと渡る。
「え？　そんな、私が!?」
ツミレから横のセーラー服に袴姿の黒髪少女、一刀両断（いとりたち）へ。
「……そう、ですか」
表情を変えないまま、一刀両は横のエースへ書類を渡す。
「おいおいおい、ちょっと待ってくれよ……！」
焦りも露わにエースは横の範馬へと書類を渡した。
「ド正義、これはどういう事だ!?」
「範馬君、赤蝮君とフジオカ君がまだ読んでいない。待ってくれ」
「……わ、分かった」
範馬からフジオカへ。
「……ククッ。傑作だなあ、こりゃ！　赤蝮、お前もこれを見りゃ笑うぜ？」
フジオカは破願して楽しそうに笑った。笑いを押さえ切れないのか、含み笑いを浮かべたまま赤蝮へ。
「ほほう……何とも、これは……！」
赤蝮の蛙めいた顔に汗が滲む。
ド正義は赤蝮から書類を受け取ると途中で抜かれていない事を確認し、机に足を乗せて寝ようとしているアルパを見た。
「夢見崎君、随分と雑な読み方だったようだが……把握してくれたか？」
「ん？　ああ、読んだよ？　読んだ読んだ」
声をかけられ、やはり気怠そうにアルパは答えた。
「要はボクらが全員、国からテロリストに指定されたって事でいいんだろ？」
『……！』
アルパとフジオカ、赤蝮以外の全員がその言葉に身を固めた。
「テロリストかぁ……これでもっと、ボクを本気で殺してくれる子が出てきてくれると嬉しいんだけどねぇ……」
これはアルパの冗談ではない。彼は女性から可能な限りの残虐な

方法で殺され、相手の心の中で（トラウマとして）生き続ける事を本気で望む異常者なのだ。
　彼の反応に若干ペースを乱されつつも、ド正義は咳払いをすると改めて一同に言った。
「コホン……ま、まあ、その通りだ。今見てもらった書類はｘｘ君が……彼は今、防衛庁のデータバンクをクラッキングした際に攻撃を受け保健室で治療を受けているが……そこから奪った、れっきとした正式な書類だ」
　実際、そのまま電脳系の魔人警察に脳を焼き殺されてもおかしくはない危険な行為であった。ｘｘが生きていただけでも僥倖と言える。そして、それだけの重要さがこの書類にはあった。
　テロリストとして指定されていたのはド正義だけではなかった。範馬、架神、エース、一刀両……流石に一般生徒の生徒会メンバーまでは含まれていないが、魔人の生徒会役員が全てテロリスト指定――主犯格であるド正義のシンパとして扱われていたのだ。
　そしてもう一つ、このテロリスト指定が密かに認可されていた時期が問題であった。年度は去年の夏――ド正義の父であるド正義克也が殺され、生徒会が「学園総死刑化計画」を提唱した時期と一致するのだ。
「つまりこの我々の『学園総死刑化計画』による魔人による学内国家の樹立……これを国は、相当に危険視していたという事だろう」
　ド正義の言葉に苦みが混じる。正直なところ、ド正義にとってこれは完全に予想外の反応であった。ダンゲロスを魔人の大規模コミュニティとして成立させ、外からの差別や魔人排斥から守られた場所を作る。そうする事で一般人も魔人と距離を置けるようになり、無用の被害に悩まされる事も減り魔人差別の風潮を弱めさせる事へも繋がる。ド正義はそう考えていた。
　だが、政府は魔人という異常能力者が集まる事へ強い危険性を感じ取ったのだろう。だからこそ、それが実現する前に潰そうとしているのだ。
「ちょ、ちょっと待ってください！　私たちが去年からテロリスト扱

いされているなら、何で今まで普通に生活できていたんですか？」
「ツミレ君、それは学園自治法があるからだ」
当然ともいえるツミレの疑問に、ド正義は答えた。
「例えば我々が学内で校則違反者を殺害したとしても、それは校則に則ったものであるから殺人罪には問われないし、学校を出た瞬間に逮捕されるという事もない。同様に、学内で幾ら危険と思われる思想を啓蒙しようとも、その活動が学外にまで出てこない限りは公権力は手出しが出来ないのだ」
「とはいえ、相手方からすれば黙って『総死刑化計画』が完遂されても困る……といった所でしょうなあ」
赤蝮が同意する。逆に言えば、学内でド正義たちが死んでも「学校内のこと」として片づける事が可能なのだ。
今度は範馬が手を挙げた。
「ド正義よ。俺達がテロリスト指定されている……というのは、まあ、まだ信じられない気持ちだが理解はできた。しかしそれとハルマゲドンとどう繋がるのだ？　番長グループのカス共が架神の死に満足せず一ノ瀬を殺したのは事実だろう。結局、ヤツ等とは殺り合わねばならなかったのではないか？」
範馬は生徒会メンバーの中でも番長グループに対して強い攻撃性を隠さない、いわゆるタカ派である。架神も同様にタカ派だったが、馬は合わなかったようだ。
彼の言葉にド正義は僅かに迷ったが、それを振り払うように顔を上げると言った。
「それについてだが……この夏からの一連の事件には、裏で動いている人物がいる。あるいは、一ノ瀬君の死にも関わっていると僕は思っている」
「真犯人が居ると？　誰だ、それは？」
「……校長、黒川メイ」
「校長だと!?」
先ほどのテロ指定の書類が回された時以上の動揺が生徒会長室に広がった。予想された反応である。ド正義は赤蝮を少し見てから

言った。
「これについては状況証拠と証言だけだが、幾つか説明できる点がある。赤蝮くん、架神くんの時の事で補足をお願いしたいんだが」
「承知しました。拙者が覚えている事であれば全てお話ししましょうぞ」
赤蝮が頷く。
ド正義は皆を見回し、発端となった剣道部廃部からお楽しみ会での口説院言葉のカレーによる爆死、その陰で行われていた架神と校長との関係、そして地下牢での架神への尋問の内容（赤蝮の能力に関しては少しぼかした）、それを補足する形でメイの経歴が偽物である可能性が高い事も語った。
「……以上が僕がこの数日で調べた事柄だ。内容が内容だけに、一部の役員だけの秘密にしていた事を謝罪させてほしい」
一通り言い終え、ド正義は深々と頭を下げた。
会長室は恐ろしい程の沈黙で包まれた。信じがたい事柄が次々と語られ、理解が追い付いていないのだろう。
「校長かぁ……ちょっと年増だけど、ボクを殺してくれないかなぁ……」
空気を読まないアルパの声。
「つまりこういう事か。ド正義や俺ら生徒会を殺す為に送り込まれた校長が、ドジっ子を演じながら俺達の信頼を得た上で裏で行動して、番長グループに汚れ役をやらせようとしている……ククッ、ハリウッドなら映画が一本作れるなァ、オイ」
「ああ。更に言えば、僕の殺害に関わった番長グループを〝敵〟が見逃すとは思えない。おそらくは僕ら生徒会も、そして番長グループもこのハルマゲドンで皆殺しにするつもりだろう」
「皆殺し……何でこんな事に……」
フジオカが楽しそうに言った。赤蝮もそうだが、元犯罪者組はこういう時に強いようだ。褐色の肌を蒼白にしているアズライールとは対照的である。
ド正義はアズライールを安堵させるように、優しく言った。

「もちろん、そんな事をさせるつもりは無い。その為にも、僕たちはこのハルマゲドンで〝勝利〟する。生徒会も、番長グループも生き残り、本当の〝敵〟を倒すという〝勝利〟をだ。その為に――」
ド正義はそこから自分の考えを、戦略を、戦術を語った。場の誰もが横から口を挟まず（アルパが数回あくびをした程度で）、ド正義の話に聞き入っていた。
時計の長針が半分回るくらいの時間が過ぎ、ド正義は話を終えた。
「……どうだろうか？」
太い腕が上がった。範馬である。
「ド正義よ、お前の頭ならば既に気付いていると思うんだが……お前のその戦略は、番長グループの協力が無ければ成立せん。実質的に不可能なのではないか？」
ド正義は頷いた。範馬の言う事は正しい。仮に生徒会だけで何とかしようとしても、ハルマゲドンで番長グループが生徒会に攻めてくれば応戦せざるを得ないのだから。
「番長グループとは今晩にでも交渉を行う。幸いにしてバル君がいる。彼を繋ぎ役にして、邪賢王ヒロシマと直接に話す」
「危険すぎる！　誰を行かせるつもりだ!?」
これも正しい。宿敵たる生徒会役員がのこのこやって来るのだ。良くて人質、悪ければその場で処刑だろう。
だが――この最初の綱渡りを突破できねば、この戦いには勝てない。
「交渉役には……僕が行く」
ド正義は迷いなくそう言った。

第七話　番長小屋

「本当なら、ここでオレがすべき事はアンタを何が何でも止めることなんでしょうなぁ」
　残暑の夕暮れが校舎を照らす。
　その校舎前に停まっている一両のハーレーと、そのハーレーの横に立つ巨漢。上半身裸に学ランの上を羽織っただけの姿で、背中には二振りの日本刀を背負っている。
　彼こそが〝バル〟。認識改変能力により番長グループに潜入している生徒会のスパイである。
　丸々とした顔に深い迷いを浮かべつつ、バルは顎に手をやり眼前のド正義を見た。
「こう言っちゃあ何だが、ド正義さん。番長小屋に丸腰で行くってのは、ピラニアの泳いでる川に生肉を括りつけて飛び込むようなもんだ。せめて、どっちの影響下にも無い中立地帯で会談するとかした方が安全だと思いますがなぁ」
「その時間は無い。今の僕の行動すら、既に〝敵〟に読まれているかもしれない」
　ド正義卓也は毅然とした態度で言った。
　バルは深いため息をついた。ド正義は高潔であると同時に恐ろしく頑固でもある。彼が「こう動く」と決めたら、それは既に動かしようのない決定事項なのだ。
「……『今晩、生徒会の人間が番長小屋に話をしに行く』ってぇ手紙は、番長グループでも一番大人しい〝駒沢〟の下駄箱に入れておきました。おそらく、もう邪賢王さんの耳には届いているでしょう」
「ならば好都合だ。このまま乗せていってくれ。僕と、もう一人」
「3ケツですかい？　乗れなくはないですが……誰を？」
　問いかけるバルに、ド正義は僅かに微笑みを浮かべた。
「……僕が死体になった時、持って帰ってもらわねばならないからな」

ここで改めて、希望崎学園――ダンゲロスの主要な建物や施設の大まかな配置について説明しよう。

巨大埋め立て地である夢の島に建造されたダンゲロスの敷地は非常に広い。その広さたるや、練馬区と同等である。

まず本島と人工島は東西に繋がる一本の大橋で繋がっている。大橋を東に向かうと、まず巨大な正門が来校者を出迎える。しかし、校舎はそこから更に東に２ｋｍほど行った先である。

この校舎は〝新校舎〟と呼ばれている。〝新〟と付けられているのは過去の大規模な学内抗争で破壊された〝旧〟校舎に代わって建てられたからだ。

この新校舎から東に更に数ｋｍ行くと巨大な中央広場「希望の泉」に出る。本来ならば生徒たちの憩いの場になる場所なのだが、番長グループがたむろする場所となってからは一般生徒が足を向ける事は無い。

その広場を挟んで全幅１．５㎞という規格外の広さのグラウンド、更にそこを超えて３㎞弱ほど東に行った島の東端付近にあるのが悪名高き〝番長小屋〟である。なお、先述の旧校舎の破壊を免れた部分は廃墟として残っており、番長小屋から南２㎞ほど向かった場所で風雪に晒されている。夏の肝試しスポットとして生徒たちに人気の場所だ。

――〝番長小屋〟

元は体育用具の倉庫であったと言われているが、その時代を知る者は今の学園には居ない。

素人仕事で増改築を繰り返されたその建物は〝小屋〟と呼ぶには余りに大きく、そして歪な建物だ。建物の裏には番長グループの不良たちが出したゴミが堆積したゴミ山があるが、回収業者も来ない場所だけに溜まりっぱなしで、フィリピンのスモーキーマウンテンもかくやという有様となっている。

そしてそんな番長小屋に、バルが操縦するハーレーは静かに向かっていた。

「ド正義さん、とりあえずオレの〝裏切帝〟で小屋の真ん前までは連れて行けます。しかし、流石に邪賢王さんを前にしたアンタを守るのは出来ません」
「分かっている。もともと、僕一人で話をするつもりだった」
後方に声をかけるバルに、彼の腰のベルトを掴んだままド正義は答えた。
「……気をつけてください。邪賢王さんはともかく、白金さんの刀はかなり軽くなってます」
「迂闊な事を言えば、すぐに僕の首が飛ぶ……か」
「笑いごとじゃないんですがなぁ……」
やがてハーレーはグラウンドを超え、森の間に作られた細い道に入った。まだ距離があるというのに、ツンとする生ごみの臭いがド正義の鼻をつく。
遠くに見えていた黒い影が次第に大きくなってゆく。壁に無数の落書きが描かれた、〝無秩序〟という言葉をそのまま具現化したような建物が。
建物の周囲で座り込む幾つかの影。彼らはハーレーに乗るバルとド正義達を確認できているが、騒ぐ気配は無い。
「おい、アレ……生徒会のド正義じゃねえ？」
「いや、でもバルさんと一緒だぜ？　ンなわきゃねーべ」
「だよなぁ……」
そんな事を口々に言いながらも様子を見ているだけだ。これがバルの〝裏切帝〟の効果である。一見背信行為に思えるような行動でも「あの人に限って」と思わせてしまうのだ。
そのままハーレーは小屋の近くで停車し、ド正義は素早く降りた。乗ったままのバルに振り向きつつ言う。
「それでは、行ってくる。僕が出てくるまで待っていてくれ」
「ド正義さん、その……」
バルは何か言おうとして、言葉に詰まった。
「こういう時、『気を付けて』って言葉ほど空しいものは無いですなぁ。だが、どう言えば良いやら。心配なのに上手い言葉が出てきません

や」
「……ありがとう、その言葉で十分だ」
ド正義はそう答えると、今度こそハーレーから背を向けた。
悪臭放つ小屋の扉を見る。歩み寄るごとにそれは強まり、匂いが瘴気めいて扉の隙間から溢れてくるかのようだ。
「……」
ド正義は口元を引き締め、扉を押し開いた。

「……ド正義!?」
扉を開け、中に入ったド正義を白金の驚きの声が迎えた。
小屋の中は広さこそあるものの暗く、汚く、臭い。天井は高く、粗末な裸電球が申し訳程度に屋内を照らしている。
壁周りには幾つもの木箱が詰まれ、良く分からない資材やらゴミやらが散乱している。
その小屋の中央に鎮座する座像にも見える巨大な物体。バルも相当に大柄だが、これと比べれば子供サイズだ。
「ド正義、まさかおどれが直接来るとはのう……!」
その全高１０ｍほどの巨大な物体、邪賢王ヒロシマは唸るように言うとド正義を見下ろした。
その周囲に立つ数人の男女。いずれもド正義にも見覚えある顔だ。
邪賢王を中央に、まず右に立つ刀を帯びた黒髪長身の美青年、番長グループ副番・白金翔一郎。最初にド正義に気付いたのが彼だが、生徒会の使い走りが来ると思っていたのだろう。驚きを顔に浮かべつつこちらを見ている。
逆にその左、手鏡を手に木箱に腰かける眼鏡と三つ編みが特徴的な、どこか場違いな感じの少女〝鏡子〟。微笑みつつド正義に視線を向けているが、その表情からは内心を読み取る事は出来ない。
再び翔一郎の方に目線を戻しその右、まるで時代劇の忍者のような覆面に顔を包んだ男、元剣道部副部長の服部産蔵。魔人としての能力は不明だが、剣客としての腕は翔一郎に次ぐ。
そして鏡子の更に左の木箱に腰かける小柄な男女。少女の方は鏡

子以上に場違いなゴシック風の黒いドレスに身を包んでいる。彼女は通称〝ダンゲロスの火薬庫〟と呼ばれ恐れられる〝あげは〟。となれば横にいる少年は彼女の保護役を務めているという一年の駒沢か。

「……ああ、僕が来た」

彼ら以外の雑多な番長グループのメンバーは帰宅したか、外にいるようだ。

ド正義は素早く小屋の中に視線を巡らせると、邪賢王を正面から見上げて言った。

身体の奥から本能的な恐れが湧き上がる。宿主の生命の危機を告げる、命そのものからの警告だ。

ド正義はそれを意思で抑え込み、口を開いた。

「今日は、話があってきた」

「何の話じゃ？　ハルマゲドンの事なら、とうに校長が書類を持ってきて拇印も押した。あとは……始めるだけじゃろう」

鬼神のような表情で言う邪賢王の言葉を引き継ぐように翔一郎が続けて言う。

「生徒会役員の一年が死んだ事も聞いた。それが俺達のせいにさせられている事もだ……これ以上、何を言いに来た？　ハルマゲドン前に、大将ひとりで敵陣に乗り込んで俺達の首でも取りに来たか？」

言いつつ、既に翔一郎の手は腰の刀にかかっている。ド正義が何か不審な挙動をすれば即座に抜き打ちができる体勢だ。

ここからは一寸の油断も、不覚も許されない。ド正義はあくまで邪賢王に向けて言った。

「このハルマゲドンは仕組まれたものだ。テロリストとして指定された僕たち生徒会を抹殺する為のな」

「……!?」

ド正義の言葉に邪賢王は怪訝な顔をした。

「貴様、何を……！」

「ここからは僕が得た情報と断片的な証拠、それに推測を加えたものだ。馬鹿げた話に聞こえるだろうが、最後まで聞いてくれ」

問いかけようとする翔一郎の言葉を遮り、ド正義は強く言った。
そこからド正義は話を始めた。自分を含む生徒会の魔人メンバーがテロリスト指定されていること、それに対する始末役として黒川メイが偽の経歴で希望崎に送り込まれた可能性が高いこと、そして――剣道部廃部から口説院の死、更にそこから一ノ瀬の殺害を契機としたハルマゲドン開催に至る一連の黒幕である可能性が極めて高いことを。
「……むうぅ」
邪賢王は唸り、腕を組んだ。余りにも突拍子も無い話である。いきなり信じろというのは実際難しいだろう。
その一方、胡坐を組む邪賢王の足元の翔一郎は刀から手を離したものの、険しい表情でド正義を睨んだ。
「話は終わりか？　ならば言うが……それがどうした？」
刺さるような殺気がド正義に叩き付けられる。
「なるほど、生徒会全員がテロリスト指定されたのが真実だと言うのならド正義、貴様の話は一応の辻褄が合う……だが、だから何だ？　そもそもは貴様が『学園総死刑化計画』を立ち上げた事による自業自得だろう」
「……」
翔一郎の言葉をド正義は反論せずに受けた。心は落ち着いている。相手のこの反応は予想通りだ。
「その話を聞かされて、俺達が『それは可哀想だ、助けてあげよう』と言うとでも思ったか？　ふざけるな！　死ぬのならば勝手に死ね！」
「し、白金さん……！」
次第に翔一郎の言葉が激しさを増してゆく。
その気持ちがド正義には多少は理解できた。恋人であった口説院言葉がそんな〝下らない〟理由で殺された事になるのだ、到底納得できる事ではあるまい。傍らの服部も、今にも殺し合いを始めそうな翔一郎に焦りを浮かべている。
ド正義はその苛烈な怒りを浴びつつ、翔一郎に落ち着いた口調で言った。

「それで済むなら……僕もこうして来てはいない」
「何？」
「このハルマゲドンで死ぬのは僕たちだけではない。生徒会も、番長グループも全員死ぬ。このままではな」
「まあ、そうなるわよね」
　あっさりと言ったのは鏡子である。思わぬ身内からの同意者に翔一郎は戸惑いを見せた。
「鏡子!?」
「だって『生徒会が全滅して、番長グループが学園を支配しました』よりも『面倒な魔人集団は全員死にました』の方が国からすれば後腐れが無いもの。そういう事よね、ド正義会長？」
「……ああ、そうだ。おそらく〝敵〟の狙いはハルマゲドンで僕らと君たちを潰し合わせ、疲弊した残存戦力を自分たちの戦力で掃討する事だろう」
「自分たちの……ってぇのはどういう事じゃ、ド正義？」
　邪賢王の問いに、ド正義は答えた。
「2グループ合わせて約６０人の魔人集団に国家が対応するとなれば、その組織は限られる。最低でも魔人公安以上、下手をすれば〝魔人小隊〟が動くと、僕は見ている」
「魔人小隊……国家防衛組織の特殊部隊っちゅう事か……！」
　魔人犯罪に対抗する国家組織は幾つかある。
　ひとつは一般的な魔人犯罪に対抗する「魔人警察」。
　より組織的な魔人犯罪や魔人テロに対抗するための「魔人公安」。
　そして、国家的な魔人犯罪に対抗すべく自衛組織内に構成されている「魔人小隊（あるいは魔人中隊）」。
　あくまで治安維持のための部隊だが、魔人に対抗するための能力を有する魔人たちで構成されている為に敵に回った時の危険性はそこらの魔人犯罪者のそれを遥かに上回る。特に魔人小隊は互いの能力を活かす連携と鉄の規律によって統制された精鋭部隊で、仮に正面からの勝負となれば素人集団である生徒会や番長グループではひとたまりも無いだろう。

「確かに僕たち生徒会と君たち番長グループは敵対しているし、それをいきなり和解して仲良くなろうと言うつもりも無い。だが……このままでは互いに無駄死にだ。少なくとも、僕たちの決着はこんな形で果たされるべきでないと考える。だからこそ、一時的にでも協力関係を結びたいのだ」
ここが踏み込む場面である。ド正義はそう訴えかけた。
「ぐっ……」
翔一郎は言葉に詰まった。上からの邪賢王の声。
「協力関係と言うが……具体的にはどうするつもりなんじゃ？」
「互いに攻め込まず、完全な籠城戦で時間を稼ぎ……〝敵〟を誘い出す」
ド正義は見上げつつ答えた。第三勢力の具体的な戦力や魔人能力が不明な現在の状況で取り得る、最良の戦術。
邪賢王は顎に手をやりつつ尋ねた。
「稼ぐと言うがハルマゲドンは期間無制限の殺し合いじゃ。意味が無いじゃろう？」
「確かに表向きはそうだが……例えば一週間経って誰も死ななければ、〝敵〟は間違いなく焦りを見せる。校長が上の組織からの指示で動いているならば、現場への突き上げも発生する筈だ」
「ふぅむ……そうなれば、ワシ等を戦わせる為に戦場を掻き回そうとする……か」
「そうだ。相手もプロである以上、そこで1人、2人の被害は出るかもしれない……しかし、そこで相手の尻尾を掴み、一気に表舞台に引っ張り出す！　ハルマゲドンの真っ最中、学園自治法に守られた学内に国家の武力組織が介入してきたというだけで重大事件だ。ハルマゲドン中止に十分足りる理由となる」
そこで翔一郎が口を挟んだ。
「随分とそちらに有利な提案に思えるな。長期戦になれば生徒会側が有利なのは明白だろう？」
「それについては非公式に生徒会が番長グループ側の生活面を援助する。グラウンド東部に意図的に飲食物の保管場所を用意し、密かに番

長グループが持ち出せるようにする。当然無償だ」
この質問もド正義の予想の範疇であった。校長の目が光っている以上、露骨な支援はできない。ギリギリの譲歩である。
邪賢王は僅かに目を閉じ黙考すると、重々しく言った。
「ド正義よ……おどれの言いたい事は分かった。確かにスジは通っとるし、おどれの作戦の為にはワシらの協力が必要なんじゃろう……」
ド正義は真っ直ぐに邪賢王を見返した。
「じゃが……もしおどれの言う事が丸ごと嘘っぱちだったならば、ワシら全員がだまし討ちで死ぬ事になる」
「……」
ド正義の喉が鳴った。邪賢王の声に凄みが増す。
「本当に……信じてええんじゃな？」
「ああ、信じてくれ」
これは本心からの言葉だった。ここで信じて貰えなければ、番長グループを相手取りつつ獅子身中の虫である校長たちを迎え撃たねばならない。そしてそれは番長グループも同じなのだ。
「……」
邪賢王の顔に深い迷いが見える。番長グループの長として、彼もまた数十人の仲間の命を背負っているのだ。ド正義の頬に一筋の汗が流れた。悪臭漂う空間が静寂に満ちる。
「……なら、俺が試させてくれ」
その静寂を打ち破ったのは翔一郎だった。一歩前に踏み出し、懐に手をやる。
「邪賢王の言う通り、貴様の提案に乗るという事は俺達全員の命を預けるという事だ。ド正義、貴様の言葉が本当だと言うのならば……命を預けるに足りる〝覚悟〟を見せて貰おう」
そう言いつつ、翔一郎は懐から短刀を取り出した。刃渡り３０㎝ほどの、木製の鞘に納められたものだ。
翔一郎はその短刀を僅かに抜いて刃の具合を確認すると、それをド正義の足元に放り投げた。
「眼を潰せ、ド正義」

「……！」
ド正義は息を呑んだ。後方の邪賢王が動揺を見せる。
「白金よ、それは……」
「完全に失明しろとは言わない。しかし少なくともハルマゲドンの期間中に能力発動ができない程度にはしてもらう。俺達の命を目玉二つで預けようと言うんだ。悪い取引ではないだろう」
しかし翔一郎は引き下がる気配は無いようだった。その表情は真剣そのものだ。ド正義はゆっくりと腰を落とし、短刀を手に取った。
「それが出来ないと言うなら仕方ない。一人で来た度胸に免じて帰してはやる。あとはハルマゲドンで殺し合うだけだ」
鞘を抜き、白く光る刃を露わにする。ド正義の顔が映るほどに研がれた刃だ。ド正義は大きく息を吸い、吐いた。
「……分かった」
「!?」
翔一郎の顔に驚きが浮かぶ。ド正義はそれに構わず眼鏡を外し、胸ポケットに入れた。続けて腰ポケットからハンカチを取り出し、丸めるとそれを咥えた。
「……」
自ずと動悸が速まる。刃を眼前に向け、腰を落とし、顔を下に向ける。
「……っ！」
手に汗が滲む。短刀を握る指が無意識に刃を床に向けようとする。ド正義はハンカチを強く噛み、短刀を握り直す。
邪賢王が思わず声を上げた。
「ド正義、待て……！」
「……っ!!」
大丈夫――これも、予想内だ！
ド正義の腕が横薙ぎに振られ、番長小屋の床に新たな血痕が飛び散った。

第八話　変わる流れ、変わらぬ悪意

悪臭満ちる番長小屋。その臭いに新鮮な血の匂いが混じる。
「ド正義……！」
白金翔一郎は絶句した。
ド正義達也の能力「超高潔速攻裁判」は、ド正義が相手を〝視る〟ことで初めて発動する。つまり、彼にとって視力を奪われるという事は能力を完全に失うに等しい。
だからこそ翔一郎は彼の覚悟の証として目を潰す事を求めた。ド正義の虚仮を剥がすために、絶対に呑めない条件を提示したつもりだった。
しかし――彼はやってのけた。
「ぐっ……あっ、ぐあぁっ！」
痛みに耐えかねたか、咥えていたハンカチが零れ落ち苦悶の叫びが響く。
「ど……どうだ、白金……まだ、足りないか……!?」
ド正義が鮮血に染まった顔を上げて言った。手で目元を押さえているが、どくどくとそこから血が溢れ、床に染みを作っている。
「まだ足りないか、白金翔一郎！」
「な……!?」
「……白金、おどれの負けじゃ」
気圧される翔一郎の背後で邪賢王が言った。むくりとその巨体を起こし、よろよろと壁を探すド正義の手を取る。
丸太めいた指の感触に、ド正義も相手が誰だか分かったようだ。
「じゃ、邪賢王……か？」
「そうじゃ、ド正義。おどれの覚悟、確かに見させて貰ったわい」
そのまま邪賢王は頭を深々と下げた。
「ハルマゲドンで敵味方が手を組むなど聞いた事が無いが……ワシら番長グループの命、おどれに預ける。こちらから生徒会に攻め込む事は絶対にせん。この邪賢王ヒロシマ、男の誓いじゃ」
「……感謝する」

苦しみつつも、ド正義は口元に無理に笑みを作った。邪賢王の手を離し、手探りにドアの位置を探る。
「ド正義よ、無理をするな」
「だ、大丈夫だ、外に迎えが来る……それに、早くこの『見えない』という感覚にも慣れないといけないからな」
「……」
明らかな強がりである。しかし、こういう時のド正義が下手に手を貸せば更に拒絶しようとする事を邪賢王は知っている。
「……扉はおどれの右肩の後ろ辺りじゃ」
「そうか……な、ならば……僕は、これで失礼する。詳しい話は、また……連絡する……ぐ、ぐうっ！」
ポタポタと赤く染まるド正義の指の隙間から血の雫が零れる。
それでもド正義は膝をつく事無く扉に辿り着き、震える手で押し開けると番長小屋を後にした。彼の足取りを追うように血痕が残る。
扉が完全に閉じると、顔を青くしていたあげはが大きく肩の力を抜いた。横の駒沢が慌てて様子を伺う。
「だ、大丈夫？」
「……」
こくこくと頷く。広範囲無理心中能力という危険極まりない能力を有する少女であるが、血や怪我に拒否反応を示すのは常人と同じなのだ。
「ド正義……まさか、あそこまでやるとは……」
未だに信じ難いのか、翔一郎は扉の方に視線を向けつつ呟く。その姿に対し、邪賢王は言った。
「ド正義はああいう奴じゃ。いつも『自分以外がどうすれば幸せになるか、安心できるか』を考え、自分がどう思われようとか、どう危険な目に遭わずに済むかとか、そういう事を全く考えん」
そしてその結果――かつて「超高潔速攻裁判」で魔人中学生十数人を殺害したド正義は孤立したのだ。
邪賢王の脳裏にその頃の様子が思い返される。自分が守ったはずの一般生徒たちから恐怖と忌避の目で見られるド正義の姿が。

今現在の生徒会が進めている「学園総死刑化計画」にしても、「自分以外にこの計画を完遂できないから」という理由で生徒会の会長席で指示を出しているが、本来は常に最前線で皆を守る男なのだ。
その彼が自身の眼と引き換えに番長グループに協力を求めてきたという事は、ド正義にとって何よりも優先して戦うべき相手がいるという事である。邪賢王にはそれが分かった。
口説院の事もあり生徒会への敵意を隠さなかった翔一郎にも、彼の覚悟は伝わったのだろう。僅かばかりの罪悪感を顔に浮かべつつも翔一郎は言った。
「番長グループ側から生徒会へ仕掛けないよう、俺からも皆には言っておく。ただ……予定していた『保険』については準備を進めておこう。万一の可能性もあるし、準備そのものにリスクは無い」
「例の『災玉』対策か。ええじゃろう」
それでもまだ完全には警戒を解くには至らないようだ。邪賢王は仕方ないと思いつつ頷いた。
「……嬉しそうね、邪賢王さん？」
「ん？　そう見えるかのう？」
鏡子が邪賢王を見上げつつ言った。番長としての威厳を保つために強面を維持している邪賢王は顔に力を込めつつ答えた。
「ええ。凄く嬉しそう」
手元の鏡を弄りつつ、鏡子は微笑んで言った。

「ド正義さん！」
番長小屋の正面にハーレーを停車させ、ド正義が出てくるのを待っていたバルは顔面を血に染めた彼の姿を見て思わず駆け寄った。
「だ、大丈夫だ、歩ける……！」
白ランの襟は既に赤黒くなっており、ド正義の高潔さを示すかのような白地に幾つもの赤い染みが出来ている。
ド正義はバルに対しても強く言おうとしたが、流石に堪えてきたのだろう。既に足元がおぼつかない状態だ。ふらつくド正義の体をバルは慌てて支え、ハーレーへと誘導した。

「無茶しすぎですぜ、ド正義さん……！」
「なに、眼だけで済んだのなら、安い、ものだ……」
そのままバルはド正義をハーレーの後ろに乗せ、自身はシートに身を置くとハンドルを握った。随行していたもう一人の生徒会メンバーに後ろからド正義を支えるように指示を出し、大きく揺れないよう慎重にスタートさせる。
表向きは番長グループ幹部であるバルがここまでド正義を気にかければ、本来ならば周囲は違和感を覚える筈である。
「バルさん、そいつ送っていくんスか？　気をつけて下さい！」
しかし周囲の舎弟はそんな感じの反応で、特に彼の行動に疑問を覚えたりはしなかった。〝裏切帝〟の効果である。
やがてハーレーは走り出した。背後の番長小屋が、次第に小さくなってゆく。
1kmほど離れ、周囲が森に包まれたところでド正義は苦しげに言った。
「そろそろ、頼む……アズライール君」
「……生きた心地がしませんでしたよ、色々な意味で」
ハーレーに掴まりつつ彼の身体を後ろから支えていたファーティマ・アズライールがそう言うと共に、彼女が小脇に抱えていた生徒会の帳簿が微かに光った。
するとどうであろう、切り裂かれ潰れかけていた眼球が映像の逆回しのように元に戻り、顔面に横一文字に作られていた深い傷が消失し、血の跡こそ残っているがド正義の顔の怪我は完全に回復してしまった。
これこそ彼女、アズライールの能力『損害保険の法則』である。
彼女を中心とした半径５０ｍ以内の事前に設定した『保険契約者』が死傷した場合、彼女の管理下にある金銭を消費する事でその負傷や死を無かった事にする能力である（消費される金額は怪我や損害の度合いによって変動する。例として、対象が大爆発に巻き込まれて五体四散した挙句に炎上した場合の回復に必要な費用は約一千万強）。
主に破壊系の能力に覚醒する事の多い魔人の中で回復能力所有者

は少数派だが、その中でもアズライールの能力は相当に高い。例えば彼女が一国の財務大臣になった場合、ほぼ無尽蔵に死者蘇生が可能になる訳だ。
「こんな使い方はこれっきりにして下さい、ド正義さん。負傷から余り時間を置くと〝保険〟の適用外になって、回復できるものも回復できなくなります」
「……ああ、気をつけるとしよう」
　完全回復したド正義はそう答えると、彼女が差し出したティッシュで顔を拭いてから胸ポケットに入れたままだった眼鏡をかけ直した。
「全く……まだ帰ってこれたから良かったですが、中で殺されていたらどうするつもりだったんですかい？」
「予測していた中で、それが一番まずいパターンだった。その時はおそらくは僕の死体はゴミ山に棄てられただろうから、そこで復活させて貰って這う這うの体で逃げるしかなかったろう。勿論、交渉を諦めるつもりは無かったがな」
　ため息をつきつつ尋ねるバルに、ド正義は落ち着いた口調で答えた。
「とはいえ、しばらくの間は顔に包帯を巻いて身内にも僕が負傷したと思わせるつもりだ。君たちもそれについては口裏を合わせてくれ。実際に一度は斬っているんだから、まあ、真っ赤な嘘という訳でもあるまい」
「ド正義さん、前から思っていたんですが……アンタの冗談は冗談に聞こえませんなぁ」
「それについては私もバルさんと同意見です」
　酷く心配させた意趣返しだろう。バルとアズライールは呼吸の合った指摘を返した。
「……いずれにせよ、これで番長グループとの協力関係は作れた。忙しくなるぞ」
　夜の闇に包まれたグラウンドが見えてくる。ド正義はそう言うと、眼鏡の奥の瞳を光らせた。

「ド正義、その怪我は!?」
「会長、大丈夫なんですか!?」
「番長グループにやられたか!?」
　翌朝、顔の上半分を包帯でぐるぐる巻きにして杖をつきつつ入室してきたド正義の姿は、エースら生徒会役員を大きく驚かせる事になった。
「なに、これは僕たちにとって必要な対価だ。医者によると、暫くは不自由するが問題なく治るものらしい……それよりも、番長グループとの協力が取れた。改めて彼等との連携を含めた今後の作戦を考えてゆこうと思う」
「……信用できるのか？　あの番長グループだぞ」
「僕たち生徒会は規律を重んじるが、番長グループはそれ以上に意地や面子を大切にする。邪賢王は舎弟たちの前で僕に協力の約束をした。それを自分たちから破れば、邪賢王の番長としての面目は無くなる」
　声の響きだけで範馬が半信半疑なのが分かる。当然と言えば当然だが、まだ番長グループへの疑いを拭いきれないようだ。
　彼等も決して悪意から疑っている訳ではない。ド正義や生徒会のメンバーの事を大事に思うが故の警戒心である。それをド正義は理解しつつも、今後の作戦を進める上で注意せねばならないと思った。
「さあ、朝の連絡会を行おう。歪み崎くん、悪いがこんな状態なので書類を口述して貰えないだろうか？」
「は、はい！　分かりました！」
「では始めるとしよう、まずハルマゲドン用の食料の備蓄についてだが……」
　斯くして、生徒会ＶＳ番長グループの決戦の場となる筈であったハルマゲドンはその形を変えつつあった。ド正義は自らを陥れようとする、未だ正体を見せぬ〝敵〟の姿を見据え、番長グループはそれに

足並みを揃えると誓った。

――その大掛かりな舞台装置の陰で小さな悪意の歯車を回す者が居た事にド正義や邪賢王が気付くのは、ハルマゲドン開始直前のことである。

9月3日夕方、とあるマンションの書斎。

「……さ、『三人』でいいのか？」

【長谷部】と書かれた表札のドアの向こう、痩せぎすで神経質そうな細目の男が電話機の向こうの相手に確認するように問いかけていた。

『はい！　魔人警察や魔人小隊が相手ではありませんね？』

「あ、ああ。二つの魔人学生グループの抗争だ。外部からの介入は無い」

『何だぁ、それでしたら大丈夫です！　魔人学生６０人程度なら、〝転校生〟三人でお釣りが来ます！』

電話機の向こうの担当者はやけに明るいテンションで話を進めてくる。

「魔人学生６０人を殺してほしい」という大量殺人の依頼を、まるで近所の草むしりをする程度の軽さで扱っている事にこの細目の男、希望崎学園数学教師の長谷部敏樹は恐怖心と共に不快感を覚えた。これは電話の向こうの相手が魔人である事と無関係ではない。魔人と話をするというのは、長谷部にとって毒虫とコミュニケーションを取ろうとしているのと同レベルなのだ。

「大丈夫なんだろうな？　学生と言っても、全員が魔人で６０人かそれ以上なんだが……」

『ご安心ください！　お客様は実際運がいい、ちょうど三人でのチームワークに定評のある〝転校生〟が手すきで……あれ？』

ふと、担当者の声の勢いが弱まった。

「お、おい、どうした？」

『少々お待ち下さいませ……あー、〝ムー〟君が一人で依頼消化中？

何で？　……ああ、はいはい、そういう事。あの子、確かにまだそ

んなに〝集まって〟ないもんねぇ、ははは。戻りは？　まだ連絡来てない？　そっかそっか、そんじゃあしょうがないや』

どうやら他の誰かに事情を聞いているようだが、本来なら保留でもかけて言うべきところまで丸聞こえである。本当に大丈夫なのかと不安に思いつつも長谷部は受話器を下ろせなかった。この電話一本を繋げるためにどれほどの手間と時間と労力を費やしたか、思い出すだけで気が滅入る程だ。それを思えば今は待つしかない。

担当者はこちらが全部聞いていた事に気付いていないのか、再び素の喋りから営業トークへと戻った。

『大変失礼いたしました。ちょっとチームプレイが得意な三人がひとり欠けていまして……9月20日頃までお待ち頂ければ万全の態勢でそちらにお送りできますが……』

「それでは困る。こっちでハルマゲドンが開催されて、その両勢力が激突するのは来週だ」

『なるほど、なるほど……少々お待ち下さいませ。そういう事でしたら……おっと』

ペラペラと紙をめくる音。担当者は何かを見つけたように声をあげた。

『お客様、やはり貴方は運がいい！　ちょうどベテランの〝転校生〟の手が空きました。これなら二人でも大丈夫なくらいですよ！』

「三人で頼む！」

ここまでのグダグダな対応を聞かされて、三人を二人に減らされてたまるか！　長谷部は内心で悪態をつきつつ強く言った。

『承知致しました！　えー、それでは依頼内容のご確認をさせて頂きます。依頼内容は「ハルマゲドン期間中、希望崎学園内に滞在している〝転校生〟を除く全魔人の抹殺」。適用範囲は地上200mで地下は対象外。お間違いないでしょうか？』

「……ああ、それでいい。地下には同僚の魔人体育教師も居るからな」

ハルマゲドンに参加している魔人学生（クズ）どもはさておき、開催中に地下シェルターに避難している教員まで殺害対象にしてしまっては流石にまずい。長谷部は幼い頃からの魔人差別主義者であったが、その

程度の判断力は残っていた。
『ありがとうございます！　こちらからお送りする〝転校生〟は三名。契約書をその場で彼らからお受け取りいただき、内容確認の上でご署名を頂いて初めて依頼の遂行開始となりますのでご了承ください。万一お客様が契約を結ばれる前に死亡された場合は契約不可能と判断し、〝転校生〟はそのまま帰ってしまいますので、えー、この点もご了承お願い致します』
「分かった……他には？」
『はい、これが一番大切な点でございますが……』
　本当に重要な点なのだろう、担当者はここまでの声からトーンを落として神妙そうに言った。
『〝報酬〟の扱いについてでございます。〝報酬〟は依頼を完遂するまで可能な限り無傷かつ健康な状態を保つようにしてください。〝報酬〟が大きく負傷してしまったり、最悪死亡してしまった場合は例え中途半端な状況であっても〝転校生〟は帰ってしまいます。恐れ入りますが、アフターケアもお客様に丸投げとなってしまいますので、くれぐれもご注意ください』
「それでいて、転校生の手の届く位置に置いておけと言うのだろう？」
『はい、こればかりはシステム上、どうしようもない箇所でして』
「分かった。安全な場所を用意しておく」
『ありがとうございます！　それでは、最後に〝報酬〟の確認をさせていただきます。えーと、〝天音沙希（あまねさき）〟……で、お間違いないでしょうか？』
「……ああ、それでいい」
　昨年のミス・ダンゲロスに選ばれた少女で、魔人でない一般生徒。
　死んでほしくて堪らない魔人でもなければ個人的な怨みがある訳でもない少女を生贄にする事に罪悪感を覚えないと言えば嘘になるが、それだけで自分の願望を諦めようと思える程には長谷部は聖人ではなかった。
　〝転校生〟。
　複雑な手順を踏む事で召喚できると言われる、伝説的存在。従来の

魔人とは次元の異なる強さを有し、〝報酬〟次第で近所の除草作業から国家転覆まで請け負う謎の超人集団。
〝報酬〟とは、生きた人間。性別や年齢は様々だが、〝転校生〟が依頼を終えた時、その世界からひとりの人間が消える。
長谷部がこの依頼に踏み切った理由は単純で、陳腐で、幼稚だ。魔人が憎くて堪らない。魔人に死んで欲しくて堪らない。魔人だらけの希望崎学園が我慢できない。このハルマゲドンに参加する６０名ほどの魔人が全滅すれば学内の魔人は３割以下となり、随分と自分にとって心地よい学園になるはずだ。曲りなりにも一時は大学の助教授までなった頭脳の持ち主とは思えない、愚かな妄想である。
だが、その幼稚さの持ち主が〝転校生〟と契約するまでに至るだけの知能と行動力を持っていた場合、それは妄想でなく現実となる。
『それでは、これで失礼致します。ご利用ありがとうございました！』
「……ああ、よろしく頼む」
歪んだ笑みを浮かべつつ、長谷部は電話を切った。

「……くしゅん！」
「だ、大丈夫、沙希？」
放課後の美術室、デッサンモデルとなっていた天音紗希は急にくしゃみをした。カンバスに筆を走らせていた中性的な雰囲気を漂わせる少年が心配そうに声をかける。
「うん、男女君。大丈夫、ちょっと鼻がくすぐったくなっただけだから」
「それならいいんだけど……先輩、ちょっとエアコン効きすぎじゃないですか？」
「んー、適温の筈だがなぁ……？」
男女と呼ばれた少年は、やけに高い鼻が特徴的な三年生に声をかけた。首を捻りつつ「先輩」――希望崎学園美術部長・ヴァーミリオン海我はエアコンの温度表示を見る。
一方、少女はくしゃみをした事が変に広がりを持ちそうになっているのが恥ずかしいのか、手を振りつつ言った。

「本当に大丈夫。もう治まったから……」
「それならいいけど……疲れたなら、もう今日は止めた方が」
「ううん、ハルマゲドンが始まったら、今度はいつ学校に来れるか分からないし。それに……」
そこまで言うと、何故か沙希は少し顔を赤らめた。少年は小首を傾げる。
「沙希？」
「えっと……男女君が描いてくれた私を、早く見たいから」
「……！」
彼女の赤面が移ったのか、少年の顔も一気に赤くなる。
「ん？　やっぱエアコン弱いか？」
二人の顔が赤くなっているのに気付き、ヴァーミリオンは言った。

この少年の名は、両性院男女（りょうせいいんおとめ）。
美術部に所属する二年生にして――隠れ魔人である。

第九話　決戦前夜

放課後の希望崎学園グラウンド東部、急ごしらえのプレハブ倉庫を前にド正義と絶子が立っていた。

「……いやー、困った！　教員棟周辺に設置できる場所が無かったからという理由で、こんなに番長小屋に近い位置にハルマゲドン用の貯蔵庫を作ってしまったなあ！」

「棒読み」という表現すら言い憚れるようなわざとらしい言い方で、顔に包帯を巻いたままのド正義は大声で言った。

「そ、そうですねえ」

ひきつった笑いを作りつつ、横の絶子が同意する。

「これでは番長グループの連中に狙われてしまう！　どうしたものかなあ！」

「だ、大丈夫ですよ、会長。その為に頑丈なカギを付けたじゃないですか」

手元のカンペを見つつ言う絶子の言葉に、ド正義はやはりわざとらしい大声で答えた。

「おお、そうだった！　頑丈なダイヤル式の鍵を付けたのだったなあ！　何番だったかなあ、歪み崎くん!?」

「ええっと……さ、３７５６４です！」

「３、７、５、６、４か！　不思議だなあ！　まるで『皆殺し』と読めてしまうではないか！　これが番長グループの誰かに聞かれでもしたら、簡単に覚えられてしまうなあ！　気をつけなければなあ！」

「そ、そうですねえ……」

段々とド正義に付き合うのが疲れてきたのだろう。絶子は微妙な反応を返す。

そんな二人の姿を、事前に連絡を受けて来た番長グループの歩透（あゆみわたる）と白金虹羽（しろがねこうう）は木陰から呆れ顔で伺っていた。

「アレで演技してるつもりなのかよ……」

「生徒会長、苦手な事もあったんだなぁ」

「３、７、５、６、４か！　ちゃんと覚えなければ、貯蔵庫を開けられ

ず困ってしまうから、忘れないようにしなければなあ！」
周囲に響く張りのある大声で、ド正義は大真面目に言った。

ダンゲロス／ＩＦ　第九話　決戦前夜

ド正義がグラウンドで叫んでいたのと同日、同時刻の校長室。
「……はい、既に書類は揃いました。あとは開始を待つだけです」
『順調だな。こちらも準備は進めている』
校長、黒川メイ――この先、彼女がこの名で呼ばれる事は無い――防衛省陸上自衛部隊〝魔人中隊〟二尉、月読零華（つくよみれいか）は眼下で慌ただしく駆け回る生徒会の面々の姿を見下ろしつつ電話を行っていた。通話先は上官である神代太陽（かみしろたいよう）一尉。現場からの叩き上げで、能力に由来する異様な口臭の酷さを除けば信頼に足りる人物である。
『周辺警戒を行う魔人警察とは連携を取ってある。月読二尉、ハルマゲドン開始後に部隊を投入するので君はそれと合流してくれ。その後の部隊の指揮運用は君に一任する』
ハルマゲドン中、希望崎学園に直結している大橋周辺は魔人警察によって封鎖される。これは公的な範囲内での抗争であるハルマゲドンの戦闘を外部に拡大させないための措置で、期間中に学外に出てきた魔人や、逆に増援として外部から加わろうとした魔人が指定された境界線を越えてしまった場合、魔人警察には射殺が許可されている。
「部隊メンバーの選考は？」
『君の要望通りに女性のみで選抜してある。「災玉」だったか？　男性限定で瞬間的にあらゆる性病を発症させ、金玉を爆発させて死に至るウィルスを散布する……おっかない能力もあったものだ』
「生徒会側の能力で最警戒すべきがその『災玉』、次いでド正義卓也の即死能力です。ただ……ド正義卓也についてですが、数日前に眼を負傷しました」
『ほう？』
「番長グループの奇襲を受けたようです。指揮力の低下は避けられないでしょう」

正直なところ、あのド正義がよりによってこのタイミングで負傷した事に零華は若干の違和感を覚えてはいた。しかし、これは仮に故意の自傷だとしても今の生徒会にとってデメリットしかない行為である。曖昧な憶測でしかない事を上官に言うのは憚られた。

『番長グループの方はどうかね？』

「そちらは接点を持つのが難しく、把握できているとは言い難い状況ですが……リーダーである邪賢王ヒロシマは少なくとも遠隔系や特殊系、精神系の能力ではありません。肉体強化系か、自己再生系の能力と推測されます。あと警戒すべき対象としては一年生の〝あげは〟という少女。彼女は自身が負傷した場合、周囲の人間に同じダメージを与える能力を持っています」

『いわゆる無理心中系か……厄介だが、銃火器による遠距離射撃ならば対応できるか』

「はい。それで問題ないかと」

『……ああ、それと』

ふと、神代が何かを思い出したように言った。

「はい、何でしょう？」

『本件と直接関係あるかは不明だが……数日前、防衛庁のデータバンクに大規模なサイバー攻撃があったそうだ。電算室の連中が最初は内々で片づけようとして露見が遅れた』

「サイバー攻撃？　何かデータが狙われたのですか？」

『調査中だ。何でも、爆弾をばら撒きながら泥棒をしようとしたような乱暴な手口で、データを盗むのが目的だったのか、破壊が目的だったのかすら分からんらしい』

「それは……確かに乱暴ですね」

『攻撃の規模からして第三国からのサイバーテロの線が濃いそうだが……君と本作戦に関するデータが漏れた可能性もある。迅速に進めてくれ』

「了解しました。万が一、ハルマゲドンが長期戦になる気配を見せた場合は双方が早期に激突するよう仕向けます」

『頼むぞ』

通信を終え、受話器を置くと零華は校長室からの景色を見た。
希望崎学園、通称ダンゲロス――危険な魔人を集め、社会に出る前に潰し合わせ、その数を減らす為の場所。
この学園は平和であってはならないのだ。ましてや『魔人の国』などと言い出し、協力して巨大なコミュニティを築き上げるなど論外である。
〝魔人〟は〝魔人〟とだけでは生きてゆけない。
社会と交わり、公益に供して初めて生きる事が許される存在なのだ。
「国家の犬」として生きる道を選んだ零華にとって、それが唯一の哲学だった。
本作戦は危険思想の中心的存在であるド正義卓也と、そのシンパ団体である生徒会の魔人を全滅させる事で完遂となる。とはいえ、今後のダンゲロスをかつての無秩序に戻すには番長グループの壊滅も必要であろう。
〝魔人小隊〟は対魔人戦闘のエキスパートだが、それでも両勢力60人の魔人を相手取るのは簡単ではない。双方の潰し合いで半分程度まで減ってくれた上で、残りの手負いを掃討するのがベストと零華は考えていた。
既に両勢力はポイント・オブ・ノーリターンを超えている。あとは終盤まで、どちらかが一方的に勝つ展開にならないよう眺めているだけだ。
「……ん？」
窓から見える中庭で、女生徒たちがこちらに向けて手を振っている。零華は防弾ガラス製の窓を開け、『黒川メイ』の顔で見下ろした。
『校長先生ー！　やっほー！』
「はーい、やっほー！　気をつけて帰るのよー！」
『はーい！』
元気そうに手を振り返すと、女生徒達はわっと賑わいを見せる。
高校生活を謳歌する少女たち、彼女らには将来の不安も挫折の予感もなく、根拠の無い未来への希望に溢れているのだろう。その姿は眩

しく、若々しく、瑞々しく――
窓を閉じ、身を翻すと零華は吐き捨てるように言った。
「……反吐が出るわ」

「さて……これで番長グループの方には伝わってくれただろうか？」
「だ、大丈夫なんじゃないでしょうか……」
ド正義考案の伝達方法『うっかり番長小屋寄りに作ってしまった貯蔵庫の鍵のナンバーを〝偶然〟聞かれてしまう』を何セットか繰り返したのち、ド正義がひと息つくと絶子はぐったりとした声で答えた。
「では次の準備に向かうと……」
ド正義は杖をつく手を止め、耳を澄ました。日頃のこの時間ならばグラウンドには幾つものかけ声が飛び交い、魔人野球部のバットの澄んだ打撃音や魔人ラグビー部のホイッスルの音が時折聞こえるはずである。しかしそれが全く聞こえない。
「……もう体育会系の部活は休止しているんだな」
「ハルマゲドンが明日ですから、昨日今日で活動を休止しているところが多いですね。範馬先輩とかは『魔人インターハイも終わったから丁度いい』とか言って、次期部長への早めの引継ぎまでやってたみたいです」
魔人となった学生は、基本的に一般的な高校生のスポーツ大会には一切参加を許されなくなる。魔人化に伴う身体強化により、同じ土俵に立てなくなるからだ（自身が魔人である事を隠し、能力をセーブする事で「ちょっと優秀な普通の学生」を演じている者もいるため皆無ではない）。
とはいえ情熱を持て余す少年少女にその力を発揮する場所を与えなければ、有り余るエネルギーは逆にフラストレーションとなり魔人少年犯罪の勃発へと繋がりかねない。そのため、魔人学生には狭い世界ではあるが魔人用の大会が用意されている。魔人インターハイ、魔人甲子園、魔人玉竜旗、魔人竜王戦などだ。故に魔人の多い希望崎では、その評判とは裏腹に部活動も盛んであった。
「確か女子剣道部は一刀両くんが主将だったか。彼女もそうなのだろ

うか？」
「彼女はまだ二年ですから、流石に引継ぎはしないみたいですけど……確か今日がハルマゲドン前の最後の稽古ですね」
「そうか……何とか早く、学校を再開できるようにしなければな」
ハルマゲドン期間中、授業、部活動を含めた通常の学校運営は一切が停止する。ド正義の予測では最低でも一週間、長ければ一ヵ月という長期になる見込みであったが、それでも一日も早く終わらせたいという気持ちに嘘は無かった。
次いで、ド正義は一刀両断の事を考えた。女子剣道部と男子剣道部はかつては同じ道場を使っており、番長グループ副番である白金翔一郎とも彼女は交流があったという。どうにか協力関係を築く事ができたが、場合によっては一刀両と翔一郎が殺し合う事にもなっていたのだろう。
「……残酷な事をするところだったな、僕は」
それは彼女にとってとても辛い事であったろう。ド正義はそう思い、呟いた。
――実際は、その真逆なのであったが。

「一同、礼！」
「ありがとうございました！」
希望崎学園・剣道場。凛とした一刀両の声と共に、防具を着けた女子剣道部員たちが頭を下げる。
「……みんな、お疲れ様。明日からしばらく活動は休止するけど、それぞれ自宅で自己鍛錬は怠らないようにして下さい。特に竹刀は一日に最低一度は触れて、百は素振りをするように。一日触れないだけで三日分は腕が鈍ると思っておいてね」
「はーい！」
元気よく返事を返す部員たち。その中の一人が、一刀両に心配そうに言った。
「先輩、先輩もハルマゲドンに参加するんですよね？」
「ええ、私も生徒会役員だから……」

「ええっ!?　そうなんですか、先輩!?」
「確か番長グループって、あの剣道部の白金先輩もいるんですよね!?」
事情を詳しく知らなかった別の後輩たちが驚く。
白金の名前を出され、一刀両は少し顔をうつむかせた。
「……うん、白金先輩とも、戦う事になると思う」
「えーっ!?」
「そんな！　白金先輩のこと、一刀両先輩も尊敬してたのに……！」
「ド正義会長、酷い事するわねー……先輩！　先輩って凄く強いから前に出されるかもしれないけど、相手が白金先輩だったら無理せず逃げてくださいね！」
「そ、それは難しいかな……？」
口々に言ってくる後輩の気遣いに、一刀両は戸惑いつつも答えた。
水面下では協力関係を結んだとはいえ、それはあくまで秘密裏にであり一般生徒たちには「生徒会と番長グループとの殺し合い」という名目のまま告知を進めている。後輩たちの心配は当然だろう。
しかしながら一刀両の内心には、彼女らの心配とは真逆の〝欲求不満〟が燻っていた。
「大丈夫。ハルマゲドンが終わったら、また会いましょう」
「約束ですよ、先輩！」
「その時は私の知ってるとっておきの和菓子屋、教えますからねー！」
心配そうな後輩たちを帰し、道場に一人残った一刀両は防具を脱ぐと道着だけの姿になり神棚を前に正座した。
ハルマゲドンを前にして心が乱れている。それは一刀両にも理解できた。しかし理解しつつも、その感情が押さえ切れない。熱い吐息と共に言葉が漏れる。
「白金先輩……私を……」
思い切り！
全力で！
斬り殺してほしい！
――それが一刀両の抱える欲求不満であった。
一刀両断。剣を持つために生まれてきたような名前の彼女は、女子

魔人剣道界において最強と呼ばれる天才剣士である。その実力は一年生の頃に魔人玉竜旗で優勝し、二年生にして現役の三年生魔人剣士すら上回る実力で主将を務めている事からも明らかであった。

しかし、その才覚ゆえの不満を一刀両は強く感じていた。彼女が本気を出した場合、竹刀を使った上で、更に相手が魔人であっても良くて大怪我、悪ければ即死級の怪我を負わせてしまうのだ。剣道用の防具など、彼女の剣技からすれば紙も同じである。

それ故に彼女は、平時の試合や稽古では常に5割以下に手を抜いた上で戦う事を要求されてきた。これは尋常なストレスではない。例え相手の隙が見えたとしてもそこが致命傷になりかねない箇所であれば打ち込むのを我慢せねばならず、実際に打ち込む時もあえて息を吐き、気を抜き、ある程度脱力させないと相手を殺してしまうのだ。もはやこれでは試合すらもただの「接待」である。

そんな彼女が初めて「自分の全力を出して斬り合える」と感じたのが男子剣道部主将の翔一郎であった。〝剣の悪魔〟の異名を持ち、一刀両と同じく天才剣士と呼ばれる美青年。

彼の剣技を見た時、一刀両は全身が痺れるような衝撃と共に予感めいたシンパシーを感じた。

白金先輩も、自分と同じような欲求不満を抱えているのではないか？

剣道場は男女の剣道部が共用で使っていた。部活動中、一刀両は手が空いた時は横で稽古を行う翔一郎の姿によく目を向けた。

翔一郎が全力を出していない事は明らかだった。翔一郎に次いで剣技に優れた副部長の服部と打ち合っている時でさえ、全力の8割程度と一刀両は見ていた。

もし、彼が自分と同じ気持ちで全力を出せずに不満を抱いているなら――

そして、そんな翔一郎を相手に自分が全力を出し、また彼も同じように全力を出して打ち合えたら――

それは――互いにとって、人生で最も気持ちいい瞬間になるはずだ。
無論、天才と呼ばれる魔人剣士が互いに全力で打ち合うのだ。おそらくはどちらかが死ぬだろう。
それも悪くない。否、むしろ殺してほしいとまで一刀両は思っていた。翔一郎の豪剣が自分を打ち据え、貫く姿を想像するだけで一刀両の身体は疼き、股間からは尿とは異なる何かが――
「……一刀両？」
「きゃあっ！」
背後からの意外そうな声に、一刀両は悲鳴めいた声をあげて我に返った。
「すまない、瞑想中だったか？」
「白金……先輩」
道場の入り口に立つ翔一郎の姿に、一刀両は呟くように言った。
「剣道部は潰されても、個人利用までは禁止されていなかったからな。ハルマゲドン前に少し使わせてもらおうと思ったんだが……邪魔なようなら、退散するとしよう」
「いっ、いえっ！　大丈夫です、先輩っ！」
今にも出てゆきそうな気配に、慌てて一刀両は翔一郎を引き留めた。
「……まだ俺を〝先輩〟と呼んでくれるんだな、お前は」
一刀両の必死さが伝わったのだろう。翔一郎は足を止め、道場に上がった。
「隅の方を借りる。気にせず一刀両も続けてくれ」
「は……はい」
そう言うと翔一郎は道場の竹刀のひとつを手に取り、素振りを始めた。幾十万回も繰り返されたであろう素振りの姿ひとつ取っても翔一郎の姿は一片の乱れもなく、美しい。一刀両は素直にそう思った。
改めて神棚の前に姿勢を正し、心落ち着かせようとする。
「（……うぅん）」
「気にせず（瞑想を）続けてくれ」と言われたが、その心を乱される

要因が後ろに居ては落ち着ける筈もない。しばらく何とか集中しようと試みた一刀両は早々にこれを諦め、再び翔一郎の方に向き直った。
視線を感じたのか、素振りの手を止めて翔一郎が彼女の方を向いた。
「どうした、一刀両？」
「そ、その……こ、今回のハルマゲドンでは、よ、よろしくお願いします！」
「……本当に、奇妙なことになったものだ。まさか生徒会と足並みを揃える事になるとはな」
たどたどしく挨拶する一刀両に、翔一郎は苦笑いを浮かべた。
口説院の死の事もあり、最近では番長グループの中でも翔一郎が一際生徒会への敵意を露わにしていた事は一刀両も知っていた。内心ではまだ複雑なものがあるのだろう。
「だが……一刀両、お前と殺し合う事を回避できたのは、まあ良かった事と言えるのかもしれないな」
「（そんな事はありません！　遠慮なく殺しに来てください！）」
内心でそう思いつつも、一刀両は言えずにいた。女性から懇願するのは〝はしたない〟からだ。
「〝アレ〟からどうだ？　強くなったか？」
「っ！　た……鍛錬は、続けています」
翔一郎の言葉に、一刀両は動揺しつつも答えた。
実を言えば、この年の春ごろに翔一郎と一刀両は非公式の試合を行っている。結果は何合か打ち合った後に、胴に打ち込まれて気絶した一刀両の負け。
本気の翔一郎であれば、そこで一刀両は死んでいた筈である。翔一郎の全力を引き出せなかった事への悔しさと、自分だけ全力を出して〝気持ちよくなってしまった〟事への申し訳なさに、当時の一刀両は涙したものだ。
そしてその日から、常（魔）人であれば発狂しかねない程の鍛錬を一刀両は積み重ねてきた。今ならば、あるいは――

「あ、あのっ、先輩っ！」
「何だ、一刀両？」
〝はしたない〟と思われるかもしれない。
しかし、ハルマゲドンが始まればこうやって顔を合わせる機会は無いかもしれない。道場内には自分と翔一郎だけ。一刀両は「告白」するのは今しかないと決断した。
「ここっ、このハルマゲドンが終わったら……わ、私と〝突き合って〟くださいっ！」
「え？」
翔一郎の動きが止まる。
予想外の反応に、既に完全に頭に血が上っていた――いわゆる「テンパっていた」状態の――一刀両は慌てて次の言葉を探した。
言い方が悪かった？　ならばもっと直接的に、自分の思った事、感じた事をそのまま言えば――
「すっ、すみません、先輩！　間違えました！」
「そ、そうか、一刀両。驚いた……」
「私っ！　先輩と〝したい〟です！　先輩と、思いっきり、全力で、〝したい〟です！」
翔一郎の身体が完全に硬直する。
もはや自分の気持ちを押さえ切れなくなった一刀両は、衝動のままに言葉を続けた。
「お願いします！　先輩、私に〝やらせて〟下さいっ！　口説院先輩に比べれば満足させてあげられないかもしれないけど、私、先輩のために一生懸命腕を磨きました！　先輩の〝豪剣〟で、思いっきり私を貫いてください！　私も全力で受け止めて、先輩のを一滴残らず絞り出しますからっ！」
「え、あ、あ……？」
「お願いします、先輩っ！」
「……」
彼女の名誉のために補足するならば、一刀両は本来はこう言いたかったのである。

『私っ！　先輩と（命を懸けた斬り合いが）したいです！　思いっきり、全力で、（斬り合いが）したいです！』
『お願いします！　先輩、私に（死合を）やらせて下さいっ！　口説院先輩に比べれば（強さでは）満足させてあげられないかもしれないけど、私、先輩のために一生懸命（剣の）腕を磨きました！　先輩の豪剣（比喩的表現ではなく字面通りの意味）で、思いっきり私を貫いてください！　私も全力で受け止めて、先輩の（普段抑えていたであろう全力の剣技）を一滴残らず搾り出しますからっ！』
――だが、それをどう受け止められたかは別問題である。ようやく硬直が解けた翔一郎は、まだ動揺を残しつつも一刀両に言った。
「わ……分かった、一刀両。そこまで言わせて断っては、俺も男として失格だ」
「じゃあ……」
「ああ、ハルマゲドンが終わったら、相手になってやる」
「……ありがとうございます、先輩！」
大きな誤解と、翔一郎の持つ一刀両のイメージが大きく変わるという弊害はあったものの、こうして二人の剣士は約束を交わした。
一刀両断、恋愛感情と闘争心と被虐欲と性欲の区別が出来ない微妙な年ごろの夏であった。

――ハルマゲドンまで、あと一日。

第十話　〝転校生〟

海から陽が昇り、朝焼けの光が港町を照らす。
希望崎大橋を自転車で、バイクで、あるいは徒歩で渡る幾人もの生徒の姿が見られるが、まだ早朝という事もありピーク時に比べればその数は少ない。
巨大な敷地を誇るダンゲロスだが、意外にも全寮制ではない。無断で寝泊まりをしている者も居るが、多くの生徒は普通に自宅から登校している。
故に大橋周辺には、そういった学生向けの店も多い。行き帰りの生徒の腹を満たすファーストフード店や制服・体操着・水着などを扱う服飾店、昔ながらの文房具屋などだ。
その一軒、『魔人ＯＫ』と書かれた立ち食いソバ屋に二人の学生の姿があった。
「……いよいよだな」
一人はライオンを思わせる、ライダースーツに身を包んだ大男。大盛りの肉ソバに更にコロッケを乗せたものをガツガツと咀嚼している。
生徒会役員の一人である鈴藤啓太（りんどうけいた）、通称〝リンドウ〟。能力は脚力のみで亜音速までの超加速走行を可能とする「フラクタ」。
「ああ」
もう一人の学生は、何故か眼を閉じたまま月見ニシンソバを食べる細面の青年。よく見れば、その周囲には悪趣味なマスコットめいた二つの眼球が浮いている。店には他の客も居るが、特に気にする事も無く其々が注文したソバやうどんを食べている。魔人社会において〝眼球が浮いている〟程度であれば珍しくもないからだ。
番長グループの一人〝夜夢アキラ〟。能力は超硬度の眼球を操る「アイ・スクリーム」。
「ハルマゲドン決定の知らせを聞いた時、お前に果たし状を送るつもりだった」
七味をかけつつ夜夢が言った。

「お前が香魚を連れて生徒会に行ったことを、俺はまだ許せてはいない」
「女々しい奴だ。この二年で同じ問答を何回繰り返す？」
肉を口に放り込みつつリンドウが答える。
「リンドウ……香魚が、自分の能力をどれだけ呪わしく思っているか知らないお前ではあるまい」
ニシンを箸でほぐしつつ夜夢が更に尋ねる。
夜夢とリンドウ、そして生徒会役員の友釣香魚。この三人は中学を同じとする友人であった。
「生徒会の役員として彼女は今も能力によって不良魔人を殺している。それが彼女のトラウマを掘り返す事になると何故分からん？」
「彼女はそれに満足している。今まで呪わしいものでしかなかった能力が、他人の役に立つ事にな。お前は今の香魚を知らないからそう言ってるだけだ」
友釣香魚、彼女は集団レイプ魔に襲われ処女を奪われた際に彼らへの憎しみから「災玉」に覚醒した、いわば不可抗力的に覚醒した魔人である。
しかし、覚醒の要因はどうあれ世間は魔人は魔人として無情に扱う。香魚はまるでレイプ魔を誘っては殺す快楽殺人者のように報道され、その日まで友人だったはずの女子たちからは陰惨ないじめを受けた。
そのいじめから香魚を守ったのがリンドウと夜夢であった。中学に入る前から魔人に覚醒していた二人は彼女の友人となり、その悪名により香魚を周囲から守ったのだ。
そんな三人が、魔人学園と呼ばれるダンゲロスへの進学を決意したのは当然とも言えた。しかし、ここで三人の岐路に亀裂が走る。リンドウは香魚を生徒会に加入させる事を提案。反対する夜夢は番長グループへの加入を提案したが、香魚は考えた末に生徒会を選んだのだ。
「邪賢王さんは能力を使わせずとも彼女を肯定し、迎え入れてくれる。それだけの度量がある人だ」

「それであの悪臭塗れの番長小屋に通わせるのか？　お前も随分身勝手だな」
「……！」
「夜夢……正直、俺もこのハルマゲドンをいい機会と思いお前を殺すつもりでいた」
「お前もか、俺もだ」
夜夢とリンドウは揃って丼を持ち上げ、汁を啜った。
「……だが、香魚に危害が及ぶとなれば話は別だ」
二人の声は完全に一致した。
「!?」
「……ククッ」
少し照れを見せた夜夢に、リンドウは愉快そうに笑った。
「俺も香魚も既にテロリストだ。卒業したら、どっかに身を隠さなくちゃならんだろう。その時は夜夢……お前が香魚を守ってくれ。俺みたいな大男が一緒では目立って叶わんからな」
最後の肉を頬張り終え、リンドウが言う。
夜夢は少し笑い、残していた卵をツルンと呑み込むと答えた。
「馬鹿を言うな。その時は……三人一緒だ」
「……そうか」
店の前を通る人が多くなってきたようだ。そろそろ登校のピークである。
「ごちそうさま」
二人は同時にツユを飲み干すと、同時に丼を置いた。
ハルマゲドン開戦まで、あと11時間である。

ダンゲロス／ＩＦ　第十話　〝転校生〟

日中は平常通りに授業が行われた。
しかしながら、ハルマゲドンが今夜19時から行われる事は既に全

学生が知るところである。授業中もどこか緊張感が流れ、普段ならばひそひそと囁かれる授業中の生徒同士の会話も交わされない。
やがて昼休みを過ぎ、午後の授業を終え、放課後となる。
『……全生徒にお知らせ致します。本日19時より学園公認抗争『ハルマゲドン』が開始します。参加されない生徒の皆さんは、早めに帰りましょう。ハルマゲドン期間中は学校に再度入ることはできなくなります。机の中の教科書や、食べ残し、宿題などを忘れず持ち帰りましょう』
ホームルームを終え、校内放送が流れるとそれを待たずに生徒たちは一斉に鞄を手に教室を出始めた。下手に残って生徒会や番長グループの行動に巻き込まれては冗談ではない。
「やれやれ、あと2、3時間あるってのに余裕が無いもんだ……」
そんな生徒の流れとは逆に緩やかに歩く男がひとり。
番長グループの構成員にして隠れ魔人であるヴァーミリオン海我は、逃げるように下校してゆく生徒たちを見ながら言った。
やがてその足は美術室の前で止まり、海我はその戸を開けた。
「……あン？」
「あれ、ヴァーミリオン先輩？」
美術部としての活動は既に昨日で休止している。誰もいないはずの美術室でカンバスに筆を走らせる少年の姿に、海我は思わず声をあげた。
その少年、両性院男女にとっても自分以外が誰か来るのは予想外だったのだろう。きょとんとした表情でこちらを見ている。
「何やってんだ、両性院？　今日からハルマゲドンだってのに」
「あの……絵を忘れて取りにきただけだったんですけど、描き直したいところが出てきて。まだ余裕もあるから大丈夫かなって」
「呑気だな、お前も……」
呆れつつ海我は美術室に入った。見てみれば、先日モデルになってくれた天音沙希の肖像画である。彼女は男女とは幼馴染と聞くし、絵を描くにしてもこだわりがあるのだろう。
「先輩こそ、どうしたんですか？」

「ん？　ああ、まあな」
　言葉を濁しつつ海我は答えた。何とも困った事になった。『あの絵』をとりあえず番長小屋まで持っていこうと思っていたのだが、そのためには一度表面を隠している布を取り、イーゼルから外してから再度かけ直さなくてはならない。
「（……今の時間ならまだ下校中だろうし、大丈夫か）」
　しばらく考えたのち、海我はそう結論づけると男女の様子を見た。再び絵の方に集中しているようだ。気付かれないように進めようと、海我は自身が描いた『あの絵』の布を取った。
「……!?」
　海我の動きが止まった。信じがたいものを見るように、自身が描いたはずの絵の『現状』を確認する。
　それまでののんびりした口調から一転した緊迫した様子で、海我は男女に言った。
「おい、両性院」
「え？　は、はい？」
「お前と、この前のモデルの天音さんとは幼馴染だったよな？　連絡先とかは交換してるか？」
「さ、沙希の……ですか？　はい、分かりますけど……」
「すぐに連絡してみてくれ。俺は別のところに連絡する」
「え？　え？」
「急げ！」
　突然の要請に男女は混乱したようだが、海我の真剣な声に押されるように携帯を取り出した。
　海我自身も自分の携帯を取り出し、番号を押す。電脳魔人「ｘｘ」からの盗聴を防ぐために内々の連絡に携帯は使わないのが番長グループの約束なのだが、この緊急時では仕方ない。
　数度のコール音の後、相手が出た。発信欄の名前は「ヒロシマ」。
『どうしたんじゃ、海我？』
「邪賢王、こんな時にすまないが……厄介事が起きた。去年のミス・ダンゲロスに選ばれた天音沙希を覚えているか？」

『ああ、覚えとるわい。「あの日」の事じゃったからな』
「その天音沙希だが……どうも面倒ごとに巻き込まれたようだ。教員の長谷部と、あと何人かの知らない顔に拉致されている」
『……!?』
「とりあえず映像を送るが、今から『絵』を持って番長小屋へ行く。生徒会と協力するってんなら、そっちにも連絡しておいてくれ」
『わ、分かった！　手は回しておくわい』
緊張した声で邪賢王は電話を切った。それを待っていた男女が焦りも露わに海我に言う。
「駄目です、先輩……沙希には繋がらないし、自宅にも戻ってないって！」
「畜生、やっぱりか……！」
「沙希に、沙希に何かあったんですか!?」
男女は食いつかんばかりの勢いで海我に尋ねた。彼からすれば全く状況は分かっていないのだ。焦るのも当然だろう。
海我にとっては自分が魔人である事をバラすのと同じであり抵抗はあったが、男女の様子を前にそうも言えなかった。
「……男女、そこの俺の絵を見ろ」
「絵？」
指で示された『あの絵』に男女が歩み寄る。
「……これは!?」
その絵には、見知らぬ場所で拘束されている沙希と、それを囲む数人の男女が描かれていた。

「みんな、揃っているな？」
――同時刻、生徒会長室。
長机に整然と座る――夢見崎アルパのように半分寝ている者もいるが――生徒会役員たちを見渡してド正義は言った。その顔には未だに包帯が巻かれたままだ。
横に座る赤蝮が、目の見えない彼を補うように言う。
「ハルマゲドンに参加しない一般生徒メンバーは既に返し申した。参

戦する者はｘｘ殿以外は全て揃っておりますぞ」
「ｘｘ君の容体は、まだ完全には回復していないか……」
「肉体的な負傷は治ったそうですが、如何せん精神的なダメージが深刻なようでござる。回復までにあと数日は見るべきとの事」
「仕方ない、これで始めるとしよう」
　頷くと、ド正義は姿勢を正して言った。
「いよいよあと二時間ほどでハルマゲドンが始まる。既に幾度か説明した事の繰り返しになるかとは思うが、改めて話をさせてくれ。絶子くん、書類を皆に配ってくれたまえ」
「は、はい」
　絶子が立ち上がり、時計回りに書類を渡してゆく。一通り渡されたのを確認し、絶子はド正義に言った。
「会長、全員に回りました」
「ありがとう、絶子くん……さて、このハルマゲドンは表向きは『番長グループと生徒会のどちらかが全滅するまで殺し合う』事になっている。しかし、僕たちが目的とする本当の意味での勝利は『番長グループと共闘し、この抗争を仕組んだ黒幕である校長たちの正体を暴きハルマゲドンを中止する』事だ。それは分かってくれていると思う」
「番長グループを完全に信用する事に、俺はまだ納得し切れてはいないがな……」
　腕を組みつつ範馬が苦々しく言う。今まで敵対心を向け合っていた相手である。口に出してこそいないが、他にも範馬と同じ気持ちの者はいるだろう。
「勿論、最低限の用心はする。しかし今回の作戦は『お互いに手を出さないと確信できている事』が前提となる。そうでなければ、戦況を掻き回そうとする第三者の介入があった時に疑心暗鬼に捕らわれてしまうからな」
「むう……」
　それを理解しつつもド正義は丁寧に説明した。現実問題として自分たちがテロリスト指定されている以上、番長グループ以外の敵対的な勢力があるのは事実である。範馬は唸りつつも口を閉じた。

「みんなには申し訳ないが、まずは一週間ほど教員棟から出ずに生活を送ってもらう。渡り廊下には対魔人シャッターを幾層も立ててある。基本的には二人一組で行動をとり、一階の見張り役は２４時間交代制で行う。こちらからは一切攻撃を仕掛けずに、〝敵〟が焦るのをひたすら待つ」
「それで何も動きが無かった場合は？」
「更に待つ。最低一ヵ月は生活可能な物資を用意してある。僕らはともかく長期戦に不利な番長側が動かなければ、流石に〝敵〟は違和感を覚え動くはずだ。そこで介入してきた敵の兵か、あるいは校長自身を捕らえて全て白状させる」
　エースの質問にド正義は答えつつ自分の言っている事の困難さを思った。相手はおそらくプロの武装集団、簡単にはいくまい。だが、やらねばならない。
「……む？」
　その時、机上に置かれていたド正義の携帯が震えた。傍らの絶子が画面を確認する。
「会長、番長グループの邪賢王からです」
「分かった。通話にしてくれたまえ。ちょっと失礼する」
　ひとこと断り、ド正義は渡された携帯に出た。野太い声がド正義の耳に飛び込んでくる。
『すまんのう、ド正義。こんな時じゃが緊急連絡じゃ』
「どうした、邪賢王？」
　緊張感ある声にド正義は不穏な気配を感じる。
『ド正義、去年のミス・ダンゲロスの天音沙希を覚えとるか？』
「……『あの日』の事だ。忘れる訳もない」
　少しの間を置いてド正義は答えた。
　忘れもしない去年の学園祭の開催日、その日はミス・ダンゲロスが選ばれ――〝転校生〟が襲来し、そしてド正義が予想外の形で童貞を失った日でもある。
『その天音が、教師の長谷部に誘拐されたようじゃ』
「誘拐だと!?」

思わず出たド正義の声に、会長室の皆がざわつく。
『それも、単なる誘拐という訳では無さそうでのう……共犯者がおるようなんじゃが、これがどうにも希望崎の生徒ではないようじゃ』
「希望崎の生徒ではない……邪賢王、どうしてそこまで分かる？」
『ウチのモンに「絵に描いた人物の様子を、リアルタイムで変化させる」能力者がおる。そいつが、前にモデルをしたっちゅう天音の絵を見て察知してくれたんじゃ』
「なるほど……で、その共犯者が希望崎で見ない顔という事だな？」
『そういう事じゃ。まだワシ等の推測を出んが……ひょっとするとこいつら、〝転校生〟かもしれん』
「……!?」
ド正義は息を呑んだ。過去に〝転校生〟に挑んだ際の凄惨な光景が思い浮かぶ。まあ、ド正義自身は初撃で昏倒して気付いたのは全てが終わった後だったのだが。
『ド正義、おどれも長谷部の魔人嫌いと肝の小ささは知っとる筈じゃ。それがこのタイミングで金や天音自身を目的に誘拐なんて大胆な真似をするとは思えん。残る可能性は……』
「……僕らの抹殺に〝転校生〟を呼んだという事か」
これも〝敵〟の動きのひとつだろうか？
ド正義は考え、すぐにそれを否定した。〝敵〟が〝転校生〟を使ってド正義達を殺すつもりだったのなら、水面下での工作などを抜きにいきなり召喚すれば良いだけの話である。
〝転校生〟たちの起こす破壊や殺人は時折ワイドショーを賑わせるが、彼ら彼女らの詳細が判明する事は決してない。まるでこの世界に最初から存在しなかったように姿を消してしまうのだ。
〝敵〟はあくまで自分たち生徒会と番長グループが殺し合い全滅する筋書きを描いていた。それに転校生を介入させるのは共闘を誘いかねない悪手だ。
だとすれば、これは長谷部が個人で〝転校生〟を招いたと見るべきだろう。ド正義はそう結論づけた。
「全く、面倒な事になったな……！」

『おどれらの方は自由に教員棟から出入りできんじゃろう。何とかワシらの方で打てる手を考える。ド正義、画像を送るんで、おどれはおどれで天音を助ける作戦があれば教えてくれ』
「分かった。早急に対応する」
通話を終え、ド正義が携帯を切ると範馬が食いつくように尋ねてきた。
「ド正義！　今、〝転校生〟と言ったようだが……あの〝転校生〟か!?」
範馬慎太郎。彼もまた、かつてド正義と共に〝転校生〟に挑み、そして敗北して運よく生き残れた人物である。
包帯を巻かれた顔のままド正義は顔を上げ、言った。
「ああ……どうもこのハルマゲドン、一筋縄ではいかないようだ」

同時刻、夕闇迫る学園内を走る二台のハーレーの姿があった。
「やれやれ、こんな形で来てもらうつもりは無かったんですがなぁ！」
バルはもう一台のハーレーの後ろに乗る両性院に言った。
「『こんな形』って、どういう意味ですか、先輩!?」
「お前はもともと、別件で番長小屋に来てもらうつもりだったんだよ」
海我にしがみつきつつ尋ねる両性院に、ハーレーのハンドルを握りつつ海我は答えた。
「僕を!?　何でです、僕は魔人じゃ……」
「隠す必要はねえよ。お前が俺と同じ『隠れ魔人』だったのは知ってる」
「!?」
両性院の身体が強張った。
「な、何でそれを……」
「その話は後だ。何はともあれ天音沙希、彼女を助ける方法を考えにゃならん。最悪の場合、〝転校生〟を相手にする羽目になる」
「生徒会と戦わずに済むと思えば、今度は〝転校生〟……上手くいかんモンですなぁ、全く」
「え!?」

両性院は更に驚かされた。今のバルの言葉がハルマゲドンの前提をひっくり返すものだったからだ。
「ちょ、ちょっと待ってください！　番長グループと生徒会が殺し合うからハルマゲドンが開催されたんですよね!?」
「着いたらその辺りも纏めて説明してやるって！　見えてきたぞ！」
森の向こう、番長小屋の姿を認めつつ海我は言った。

――その番長小屋から南に２km、旧校舎。
「……なるほど、確かに『天音沙希』で間違いないですね」
その教室のひとつに３人の男女が居た。彼らの中央には、何らかの薬品で眠らされたと思われる天音沙希が寝かされている。
グループの一人、茶色のブレザーを着た長身の青年が屈みこんで彼女の様子を確認する。褐色の肌とブレザーの上からでも分かる鍛えられた肉体はスポーツマンを思わせるが、暑苦しさは無く、むしろ涼し気な印象を周囲に与えている。
「〝ムー〟も惜しい事をしたわねー。折角のレア〝報酬〟だったのに」
３人の中の唯一の女性、１４０cm程度の小柄な身体を黒を基調とした奇妙な制服に包んだ美少女がそれに続く。
「で、依頼完了までどうするの、この子？」
「下手に暴れられて傷ついても面倒だ。逃げにくいように服は脱がせて、張り付けるか何かで拘束だな」
普通の高校生ではあり得ないような内容で、目覚めない沙希を眼前に彼らは当たり前のように会話を交わす。
そんな姿に不気味なものを感じつつも、沙希をここまで連れてきた長谷部は眼前の二人が〝転校生〟である事を改めて確信した。
「お、おい、まだ始めてくれないのか？」
「長谷部さん、こちらも『契約』ですから……残り一人が来てからになります」
「それで、残り一人はまだ来ないのか？」
「我々も常に共に行動している訳ではないので、そこは何とも……た

だ、依頼に関しては任せてください。こちらも〝報酬〟がかかっている以上は手は抜きません」

〝ユキミ〟と名乗った青年は落ち着いた口調で長谷部に言った。

――同時刻、学園敷地内の森の中。

「フゥム、フゥム。君らも苦労しているのだね……いやいや、そんな事はない。ところで、少し伺いたいのだが……」

樹に手をあて、他に誰も居ないというのに独りで物を言う人物がひとり。

挙動不審者であろうか？　しかし、樹に対して話をするその姿は落ち着いており、狂人めいた雰囲気は感じられない。

「なるほど、なるほど……いや、良い話を聞けた。お礼と言っては何だが、加奈陀産の『めいぷる』は如何かね？」

否、よく見ればその人物は樹に話しかけているのではない。その樹に停まっているクワガタに話しかけているのだ。

やがてクワガタとの話を終えたのか、まるで大正の書生風の姿のその人物はゆらりと歩き出した。

「さて、〝ユキミ〟と組むのも大分久し振りだ。頑張らせてもらうとしようか」

第十一話　かつての戦い、今の戦い

「どうかね、友釣君？」
「他の生徒会メンバーにも確認してみましたが、やはりどの学年・クラスにも該当する人物はいないようです。制服も、ネットで検索してみましたが一致するものは……」
「となると……やはり〝転校生〟の可能性が濃厚か」
番長グループから送られてきた画像を印刷し、それを生徒会の皆で確認した結果をド正義は聞いていた。
「さて、どうしたものか……！」
包帯で顔の上半分は隠れているものの、硬く結ばれた口元からはド正義の苦悩が見て取れる。
〝敵〟ではない別勢力としての〝転校生〟の介入は、この状況において極めて厄介であった。
生徒会と番長グループの協力体制は当事者たちしか知らない極秘事項である。仮に長谷部が〝転校生〟に自分たちの殲滅を依頼したならば、やはり「ハルマゲドンで生徒会と番長グループが潰し合う」という前提で話を進めているはずだ。
となれば、〝転校生〟は〝敵〟と同様に生徒会と番長グループの潰し合いから漁夫の利を得る戦略で動こうとするだろう。そして――双方が動かなければ、やはり陰から戦場を掻き回そうと動き始めるはずだ。
そうなれば〝敵〟の正体を暴くどころでなく、生徒会と番長グループは秘密裏に戦況を荒らそうとする二つの勢力を相手にする事になる。迅速な対応が必要だ。
そして〝転校生〟は魔人が数人がかりで襲いかかっても鎧袖一触の、まさしく別次元の強さを誇る怪物である。それが最低でも二人以上。邪賢王は番長グループのメンバーのみで何とかしようと考えているようだが、かつて〝転校生〟を殺した事のある鏡子が居るにしても大損害は避けられないだろう。それでは結局、互いのグループの壊滅を避けるために結んだ協力関係の意味が無くなってしまう。

では大っぴらに生徒会と番長グループで共同戦線で〝転校生〟に挑めるかと言えば、これも難しい。
ハルマゲドン開催中、〝敵〟がド正義たちを放っておくという事は無いだろう。何かしらの偵察能力で両勢力の動きは探る筈だ。その中でド正義と邪賢王が並んで〝転校生〟に挑めば流石に〝敵〟は自分たちの目論見が見抜かれている事に気付き、実力行使に出る。〝転校生〟との戦いで消耗した状態でのプロの対魔人部隊との戦闘は可能な限り避けたかった。
それでは〝敵〟と〝転校生〟を衝突させられれば？　残念ながらこれも論外である。
ド正義もこの案は一度は考えた。しかしこの場合、〝転校生〟への〝報酬〟のために用意されたと思われる天音沙希の命が問題となる。
ハルマゲドン開催に話を持ってゆく段階で架神を唆し口説院を謀殺し、一ノ瀬も殺したと思われる連中である。仮に相手が〝転校生〟だと判明すれば、奴らは〝転校生〟との直接対決よりも容易な〝報酬〟の殺害を考えるだろう。過去の〝転校生〟が出現した事件の記録によれば〝報酬〟と思われる人物が死んだ場合、〝転校生〟はその場で帰ってしまうらしいのだ。
この場合確かに〝転校生〟との直接対決は避けられるかもしれないが、何の咎も無しに〝報酬〟にされた少女を見殺しにできる程にはド正義は非情ではなかった。
つまり、この状況を打破するには「〝敵〟に勘付かれないように迅速に番長グループと協力し、最低限の人数で〝転校生〟に仕掛け、天音沙希を救出する」という困難極まる三段跳びをしなければならない。
「……」
ド正義は机上で指を組み合わせ、じっくりと考えた。やがて、口を開く。
「……友釣君。ちょっと、僕の携帯からバル君にかけてくれないか？」
「は、はい！」
横で様子を伺っていた香魚は、差し出されたド正義の携帯を受け取

ると操作を行い、ド正義に返した。
『はい、こちらバル。えらいことになりましたなぁ、ド正義さん』
「ああ、全くだ」
ド正義は小さくため息をつくと、改めて電話の向こうのバルに言った。
「バル君、そちらの番長グループ一年の〝駒沢〟なんだが……」

ダンゲロス／ＩＦ　第十一話　かつての戦い、今の戦い

番長小屋の天井に吊られた裸電球が頼りない光で屋内を照らす。
「……と、言う訳だ。分かってもらえただろうか？」
「そんな事になっていたなんて……」
白金翔一郎が一通りの説明を終えると、両性院男女は半ば呆然と呟いた。
その反応は当然であろう、ド正義が生徒会長に、邪賢王が番長になってからの希望崎学園は「正義の生徒会ＶＳ悪の番長グループ」という構図のイメージが定着していた。それがいつの間にか生徒会の魔人がテロリスト指定されていて、更に抹殺しようとする外部の敵勢力に対して番長グループと協力して立ち向かおうとしているなど想像の範疇外にも程があるだろう。何しろ説明している翔一郎自身、ド正義が自身の目を潰すまでは全く信じていなかったのだから。
「とはいえ、ここまではあくまで状況の説明だ。両性院、君にとって、そして我々にとっても重要な問題についてはこれから対策を練る事になる」
「そ、そうです！　沙希は大丈夫なんですか!?」
ハッとして両性院は聞いた。そもそも彼がここに来た理由は、天音沙希の現状を映すヴァーミリオン海我の絵と共に彼女を助ける手立てを求めてきたのだ。
しかしそれを聞かれた翔一郎はすぐには答えず、チラリと壁に掛けられた粗末な壁時計を見た。時刻は１８時半を指している。
「……両性院、当初は君に『とある理由』で我々に協力してほしいと

思っていた。しかし〝転校生〟の襲来に早急に対応しなければならない現状、その理由は薄まっている」
「理由……ですか？」
「まあ、そこは今はいい。肝心なのは、君がここに残るかどうかだ」
翔一郎はそう言うと真っ直ぐに両性院を見た。
「君にはまだ選択肢がある。ひとつは我々を信じてここで学校から離れ、ハルマゲドン終了まで安全に待つという選択。もうひとつはこのハルマゲドンが完全に終了するまで学校から出る事を諦め、我々と共に死ぬかもしれない戦いに身を投ずるという選択肢だ」
「……!?」
そう言われ、両性院は何故翔一郎が時計を見たのか理解した。番長小屋は学園の敷地の東端にある。ここから19時までに正門まで行くには既に徒歩では間に合わない。自転車でギリギリ、番長グループが使用するハーレーに乗せてもらえば何とかという所。そして、その判断までに許される時間は僅かだ。
「……両性院、おどれは帰れ」
頭上からの声。見上げてみれば、邪賢王が鬼のような形相でこちらを見下ろしており両性院は思わず飛び上がりそうになった。
「天音沙希……彼女はええ娘じゃ。ワシらのような魔人の中でも更にはみ出し者連中にも、あの子は分け隔てなく接してくれよる」
「そうですなぁ。あの子は〝魔人〟だとか〝不良〟だとか、そういうの関係なしにその〝人〟を見てくれます」
邪賢王の言葉に傍らのバルも同意する。
「彼女の命はワシらの命に替えても守る。おどれがおっては逆に足手まといじゃ。とっとと帰らんかい！」
邪賢王の荒げた声で小屋の壁が震える。
両性院は自分の心臓がきゅっと縮むのを感じた。全身から汗が噴き出し、邪賢王からの「圧」で押し潰されそうな錯覚を覚える。
「僕は……！」
しかし、両性院は両脚に力を籠めると顔を上げ、真っ直ぐに邪賢王と視線を合わせた。

「僕は、残ります」
「足手まといじゃと言っとろうが！」
「だったら捨て石にしてもらっても構いません！」
「……！」
　常人ならば失禁しかねない程の迫力で怒鳴る邪賢王に、両性院は拳を握り締めて言い切った。
　その顔には邪賢王に対しての恐れこそ浮かんでいるが、同時に「絶対に退かない」という決意が宿っていた。
　中性的な外見通りの繊細な少年かと思ったが、存外骨はあるらしい。視線をぶつけ合う二人の姿を見て翔一郎は思った。
「僕は……僕は、沙希を守るためだけに子供の頃から彼女と一緒に居ました。ここで彼女の件を戦う力がある他の人に任せるのは確かに正解なんでしょうけど、そうすれば僕はきっと一生後悔します」
「両性院……」
「お願いします、邪賢王さん！」
　両性院はそう言うと頭を下げた。
「……好きにせえ」
　その姿をしばらく見ていた後、邪賢王は諦めたように首を振った。翔一郎はその様子に頷くと、口を開いた。
「分かった、両性院。それは君の選択だ。苦しい戦いになるが、今の決意を最後まで忘れないでくれ」
「……はい」
「では、君が残るのならば改めて説明させて貰う。まず現在囚われている天音沙希だが……とりあえずの所、連中が彼女を傷つける事は無い」
　彼女の生殺与奪が完全に握られている状況ながら、翔一郎はそう断言した。両性院が尋ねる。
「何故、そう言い切れるんですか？」
「両性院、君は〝転校生〟についてどの程度知っている？」
「え？　ええっと、〝転校生〟が起こした事件についてワイドショーで言っているのを見た程度ですけど」

「まあ、そんな所だろうな」
「……ワシ等はかつて〝転校生〟と戦った事がある。あの天音がミス・ダンゲロスに選ばれた学園祭の日じゃ。ド正義達が連れてきた生徒会役員と一緒に、ワシと番長グループの手練れが希望崎大橋に現れた〝転校生〟を迎え撃ったんじゃ」
「ええっ!?」
　翔一郎を補足するように言った邪賢王の言葉に、両性院は思わず驚きの声をあげた。番長小屋に来て数度目の驚きである。確かにあの日、ミス・ダンゲロスのコンテスト会場に出席予定だった生徒会長が急遽欠席していたが、そんな事情があったとは。
「で、でも、こうして邪賢王さんが生きているって事は……その〝転校生〟には勝ったんですよね？」
「勝った……とはとても言えんな」
　両性院の問いかけに、邪賢王は渋い顔をした。
「あの時、ワシはグループの中でも戦闘系能力持ちの達人級を何人か連れて向かった。それはド正義も同じだったようじゃ。しかし……〝転校生〟には全く通用せんかった。何と言うか、アレこそ『別次元の強さ』っちゅう事なんじゃろうなあ。どうも相手は対象を引き寄せる能力を持っていたようじゃが、まず最初にド正義がそれで引き寄せられ、一撃で沈んだ」
「会長が!?」
「ああ。まあ、何故かあいつはド正義は殺さずに悶絶させただけじゃった。問題はそこからじゃ。ワシ等の拳、蹴り、刀、砲丸、ロケットパンチ……その一切を〝転校生〟は避けずに食らい、全くダメージを受けとらんかった」
「ロケットパンチ……」
　両性院の脳内で、制服姿の学生が巨大ロボットのロケットパンチを直立不動で受け止めるイメージが浮かんだ。信じ難いがおそらくはそんな感じなのだろう。
「逆に〝転校生〟の攻撃は……いや、アレは攻撃とも呼べんかったな。そいつが軽く手を振っただけで刀が折れ、首は飛び、軽く触れただけ

で胴体に穴を開け……かく言うワシ自身、情けない話じゃがボロ雑巾のようにブン投げられた舎弟を受け止めようとしただけで吹き飛ばされて重傷じゃ」
「ちょ、ちょっと待ってください！　ド正義会長がやられて、邪賢王さんが重傷で……じゃあ、どうやって〝転校生〟は倒されたんですか!?」
　当然とも言える疑問を両性院は投げかけた。ダンゲロスの最強戦力と目される二人が一蹴された時点で、状況としては既に「詰み」の筈だ。そう聞かれた邪賢王は少しだけ眉をしかめた。
「……そこにいる仲間の鏡子じゃ」
「鏡子さん？」
「ああ、あいつが転校生を殺してくれた。鏡子がおらんかったら、〝転校生〟は学内に乗り込んで何人殺しとったかも分からん」
　その言葉に、両性院は思わず遠くの木箱に座っていた鏡子を見た。視線を受け、いつもの真意の読めない微笑みを浮かべたまま彼女は答えた。
「昔の話よ。それに……今は『殺せない』から」
「……『殺せない』？」
　どういう意味なのだろうか。一度魔人になった者は、それこそ能力喪失能力でも食らわない限りは生涯能力は消失しない筈である。
　両性院は鏡子の言葉の意味を考えようとしたが、その方向を変えるように邪賢王が言った。
「結局、その戦いを生き延びたのはワシとド正義、崩落した橋の落下に巻き込まれて逆に助かった生徒会の範馬……そして鏡子だけじゃった」
「俺は万一に備えて学内で守りを固めていたが、多分それも〝転校生〟の前では無意味だったろう。俺も死んでいたかもしれない」
　〝剣の悪魔〟とも呼ばれる学内最強の剣士である翔一郎があっさりと自身の負けの可能性を認めた事で、両性院は改めて〝転校生〟の恐ろしさを実感した。
「その後、ワシ等は〝転校生〟について徹底的に調べた。次に希望崎

に〝転校生〟が襲来した時、同じ轍を踏まんようにな。連絡は取っておらんかったが、それはド正義も同じの筈じゃ」
「学園祭の日、そんな事が……」
確かに学園祭から数日後、生徒会役員の〝事故死〟についての告知はあった。だが、自分を含めた希望崎の生徒の大半はそんな死闘があった事すら気付かなかったのだ。
「まあ、プロでもないワシら学生程度では知れる事にも限度はあったがのう……じゃが、それでも〝転校生〟の依頼と〝報酬〟について知る程度はできた」
「〝報酬〟？」
嫌な予感が両性院の背筋をぞわぞわと這いあがってゆく。
「ああ。〝転校生〟っちゅうのは、やらかす事は色々あるが……共通しとるのは、最後に生きた人間を何処かに持ち去るっちゅう事じゃ」
「……まさか」
「〝転校生〟が仕事をすれば一人の人間が必ず消える。どうも仕事が終わる前に死んではいかんらしい。昔の事件では、現場の近くに居た魔人でもない一般人が死んだらいきなり〝転校生〟が帰ったっちゅう事もあったようじゃ」
「じゃあ、沙希が!?」
「ああ、じゃから逆に言えば長谷部の『依頼』……おそらくは、ハルマゲドンに関わる魔人を殺す事とかじゃろうが、それを終えるまでは少なくとも天音沙希は殺されんという事じゃ」
「で、でも、沙希が〝報酬〟にされたって言うなら尚の事急がないと！」
「落ち着かんかい、両性院！　放っておくとは言っとらん。じゃが、二人以上の〝転校生〟相手に無鉄砲に突っ込んでも学園祭の時と同じように何人殺されるか分からん上に、天音を助けられん羽目になるかもしれん。それでは何にもならんのじゃ！」
「……！」
焦る両性院に邪賢王の怒声が浴びせられる。両性院は歯噛みし、顔をうつむかせた。

「……ならば、まず『番長グループだけでどうにかする』という発想を捨てる事だな」

突然、そこに第三者の凛とした声が響いた。

「!?」

その場の一同が一斉に声の方を向いた。

長く伸びた前髪で瞳を隠した小柄な少年と共に立つ、顔に包帯を巻き杖を手にしたド正義がそこに居た。

「生徒会長!?」

「ド正義、何でおどれがここにおるんじゃ!?」

「我々も番長グループ構成員の能力を多少は把握していたのでな……とある『ツテ』で協力をお願いして、ここまで彼に連れてきてもらった」

そう言いつつド正義はバルに少しだけ視線を送った。携帯を片手に頷くバル。

「そ、その……生徒会とは協力するって聞いていたので……マズかった、ですか?」

ド正義の横に立つ少年、番長グループ構成員〝静かなる駒沢〟は遠慮がちに尋ねた。彼を確認し、邪賢王は唸った。

「……なるほど、駒沢の『I・Z・K』を使ったっちゅう事か」

〝静かなる駒沢〟こと駒沢の能力『I・Z・K』。自身の存在を希薄化する事により、周囲から一切認識されなくなる隠密系能力である。駒沢が走る、跳ぶなどの激しい動きをしない限り、能力発動中の彼を敵が認識するのはほぼ不可能となる。

（いつから居たの？）（ぜんぜん）（気付かなかった）

また、この能力の特徴として駒沢の身体に（間接的にでも）触れていれば周囲にも存在の希薄化を共有できるという点がある。希薄化させた状態での不意打ちなどは不可能だが、一緒に歩く程度であれば問題はない。

「しかしド正義よ、何もわざわざおどれ自身が来る事は無かったじゃ

ろうが」
「作戦を立てるにせよ、まずは僕自身が試してみないとな。これで番長グループに気付かれるようであれば、別の方向で作戦を考えねばならなかった。時間こそかかったが、この方法を使えば生徒会と番長グループの直接的な連携は可能だ」
「(ここと教員棟を歩きで何度も往復するのはちょっと……)」
駒沢は内心で思ったが、それを口に出すのは流石に控えた。
ふと、ド正義は邪賢王から両性院へと顔を向けた。
「両性院男女君……だったか?」
「え!? あ、はい」
「君の決意は聞かせてもらった。やや無謀な決断だとは思うが、もう学校に出るには間に合わない。危険な戦いになる。危ないと感じた時は、迷わず逃げ給え」
「ド正義、おどれ何時から小屋の中にいたんじゃ?」
「そうだな、大体お前が『足手まといじゃ!』と言った辺りからか。相変わらず演技が下手だな。両性院を心配するのは分かるが、それならもっと自然に……」
「おどれがそれを言うか? 虹羽から聞いたが、ワシら用に用意された貯蔵庫の前で……」
両性院はまるで旧来の友人のように言葉を交わす『希望崎学園を二分する不倶戴天の敵』のはずのド正義と邪賢王の姿を驚きと共に見た。
その時、壁時計が鈍い音を立てた。短針が「Ⅶ」を示し、小屋に19時の到来を告げる。ハルマゲドン開幕である。
ド正義は邪賢王への指摘を中断すると、改めて周囲に言った。
「……まあ、それは後にしておこう。〝転校生〟対策のために、僕は来た」

――同時刻、旧校舎。
「おい! もう19時を過ぎたぞ、まだ来ないのか!?」
焦りをとっくに超え、怒りを撒き散らしながら長谷部は怒鳴った。

「……」
ユキミはそれを聞き流しつつ外を見た。暗闇に、何やら黒い小さな影が飛んでいるのが目に付く。甲虫だろうか。
「どうしてくれるんだ！　ハルマゲドンが始まって、シェルターに入り損ねてしまったじゃあないか！」
どうも今回の依頼人は『完全に安全な場所から顛末を眺めようとする』面倒なタイプだったらしい。この手の依頼人は自身がリスクと罪悪感を負おうとしない――数十人の魔人を殺そうと企む張本人にも関わらずだ。
しかし、それをユキミは軽蔑しない。軽蔑というのは自分より『やや下』の同種の存在に抱く感情だ。人間が虫を見て軽蔑するだろうか？　つまりはそういう事なのだ。
とはいえ、ハルマゲドンが始まったというのに『もう一人』が姿を見せないのも奇妙な話である。イライラと歩き回る長谷部に一応のフォローを入れようとした時、窓に一際大きい影がかかった。
「ふむ……依頼人殿、それであれば集合時間を契約時に明記しておくべきであったな。申し訳ないが、『はるまげどん』の開始時間しか小生は聞かされておらぬ」
「な……!?」
落ち着きある、澄んだ高い声が旧校舎の教室内に響く。
窓から突然現れたかと思えば淡々と指摘を行うその人物の姿に、長谷部は絶句した。
それは、まるで大正文学の世界からそのまま出てきたかのような黒衣の男だった。
頭には古めかしい学生帽、スタンドカラーの白シャツの上から濃い藍色の着物を纏い、濃緑色の袴に焦げ茶色の編み上げブーツ。更にその上から黒いマントを羽織り、腰には「花」「清」「千」「文」と書かれた和紙製の小箱が吊り下げられているが、中からは何が居るのかゴソゴソと音がしている。
長谷部が言葉を失っている間に、その男は窓から降りるとスタスタと歩み寄り、彼の手にあった契約書に眼をやると何処からか出した万

年筆ですらすらとサインを書いた。
「これにて契約完了。依頼に入らせていただく。小生の名は鵺野蛾太郎。気軽に『ヌガーさん』と呼んでくれて良いぞ」
「ヌ、ヌガー先輩!?」
「……驚きました。まさかヌガーさん、貴方が来るとは。貴方はこの手の〝報酬〟には最近興味がないと思っていたんですが。」
素直な驚きを表情に浮かべつつ黒鈴とユキミが言う。
「確かに小生にとっては魅力の薄い報酬だが……貴殿との『よしみ』という物だよ、ユキミ」
〝転校生〟の中でも屈指の実力者と称される男、鵺野蛾太郎はそう言うと薄く微笑んだ。

第十二話　〝相互理解〟

番長小屋の壁時計の１９時を告げる音が鳴り終える。

「〝転校生〟対策……ド正義、おどれの事じゃから既に考えはあるんじゃろう。どうするつもりじゃ？」

「まず最優先すべきは〝報酬〟の天音沙希、彼女を救出し保護することだ。人命救助の意味もあるが、そうする事で〝転校生〟の動きをある程度予測できるようになる」

「しかし、〝転校生〟にとっても天音は絶対に手放せん存在じゃ。そう簡単には奪えんぞ？」

「あー、それについてなんだが悪い知らせだ」

邪賢王がそう言った時、小屋の隅で新しい絵を描いていたヴァーミリオン海我がカンバスを手に歩いてきた。皆の前でその絵を置く。

「まあ見てくれ……って、ド正義はまだ見えないんだったな。長谷部の絵を急ぎで描いてみたが、どうやら〝転校生〟は最低三人はいるらしい」

「何じゃと!?」

「……三人か」

その絵には怒る長谷部と三人の男女が描かれていた。内二人は沙希の絵にも描かれていたブレザーの男と奇妙な制服の少女。残り一人は大正の書生風の古めかしい服装の男である。

「むうぅ……これは相当に厄介じゃのう。正面からの勝負では勝ち目は薄いか……」

「ならば正面からではなく裏から攻めるまで。危険性は高いが、生徒会と番長グループのメンバーの能力を合わせれば勝機はある」

内心がどうかは不明だが、ド正義はあくまで落ち着いた口調で言った。

「ワシらとお前ら生徒会とで力を合わせる……全く、ハルマゲドンまでは想像もせんかった言葉じゃのう。それで、誰が必要なんじゃ？」

「６人、６人で〝転校生〟を攻略し、天音沙希を救出する」

そう言うとド正義はその６人の名を挙げた。

ダンゲロス／ＩＦ　第十二話　〝相互理解〟

旧校舎正面の少し開けた場所。
腰かけるに丁度良い岩に鵺野は姿勢よく座り、透き通る声で周囲に言った。
「夜分に失礼申し上げる！　小生の名は鵺野蛾太郎、こちらの我が友の名は『キヨ』『ハナ』『チヨ』『フミ』。諸般あり今宵よりこちらの森を大いに騒がせる事になる故、ご挨拶させて頂きたい。この森の『長』はおられるか！」
「ねえユキミ、アレって、ヌガー先輩は何をやってるの？」
教室の窓から声をあげる鵺野の姿を眺めつつ、黒鈴はユキミに尋ねた。
契約書を書いた鵺野は挨拶もそこそこに、
「ここの森は広い。ひと言『ご挨拶』をしてくる」
とだけ言って教室を出て行き――ああして森に向かって何かを言っている。
「ヌガーさんのクワガタは森のクワガタからすれば異分子だからな。都市部の学校とかならともかく、ここみたいに森の多い場所だとあらかじめ挨拶しておかないと元のクワガタ達を警戒させてしまうんだそうだ」
「え？　ヌガー先輩の能力って殺人クワガタを操る能力だったんじゃないの？」
眠そうな眼を少し開いて意外そうに聞く黒鈴に、ユキミは口元に人差し指を立てつつ言った。
「それ、間違ってもヌガーさんの前で言うなよ？　温厚な人だがクワガタの事だけは別だ。あの人の能力はあくまで『クワガタとのコミュニケーションを可能にする』能力。それで仲良くなったクワガタと共に鍛錬を重ねていっているだけだそうだ」
「そうなん……!?」

「だ」まで言う前に黒鈴の言葉が途切れた。
見れば、鵺野の周囲に黒い小さな影が集まってきている。おそらくは森のクワガタ達だ。
「……小生の声に応えていただき、感謝する」
鵺野の眼前にひときわ大きなクワガタが進み出た。それに対し鵺野は一礼すると、懐から樹脂製のシャーレを取り出し地面に置いた。次いで小瓶を取り出し、シャーレに中の液体を注ぐ。
「まずは一献。富士樹海の樹齢千年の霊木より集めた熟成樹液は如何か？」
「……」
「はははは、舌が肥えていらっしゃる」
クワガタがカチカチと顎を鳴らすと、鵺野は破願して笑った。どうやら森のクワガタの長老（？）が面白い事を言ったらしい。
そろそろと大きなクワガタは従者めいた数匹のクワガタと共にシャーレに近づき、その中の樹液を舐め始めた。
「……」
「それは何より。さて、では我が友もご紹介させて頂こう」
そう言うと鵺野は腰に吊るした四つの小箱の蓋を開けた。中からもぞもぞとクワガタが這い出てくる。森のクワガタもなかなかの大きさだったが鵺野のクワガタはいずれもそれより一回り大きく、見事なアゴを備えている。
「まずこちらが『キヨ』、ややお転婆な所があるが愛嬌のある子だ。次いで『ハナ』、大人しく可憐。この最も大きいのが『チヨ』、皆のまとめ役を務めている。そしてトリに控えるのが『フミ』、最も年若いが元気さに満ちている」
「……」
「っ!?　いやいや……そう言われるとお恥ずかしい限り」
鵺野は本当に恥ずかしそうに学帽を押さえて照れる顔を隠した。傍から見る限りには狂人にしか見えないが、本当に通じている点が一線を画す。

「おっと、相撲ですかな？　わが友は強いですぞ？」
「……」
「良いでしょう、ならば……」
「……先輩、アレを何時まで続けるつもりなのかしら？」
「ま、まあ、必要な行為だからな」
　森のクワガタと戯れる鵺野は、まるで子供のような無邪気な笑顔を浮かべてクワガタ相撲を眺めている。そのシュールな光景に黒鈴が呟くと、ユキミが曖昧なフォローを入れる。
　やがて、話が終わったのか鵺野のクワガタは家である小箱に戻り、森のクワガタも散り散りに飛び去って行った。
　鵺野はそれを満足そうに見送ると、肩を回しつつ旧校舎に戻ってきた。ひょいと地面を蹴り、二階のユキミ達が拠点としている教室の窓から帰還する。
「お疲れ様でした、ヌガーさん」
　ユキミが労いの言葉をかけると、鵺野は楽しそうに言った。
「いやはや、ここのクワガタの方々は随分と義理堅いようだ」
「え？」
「いや、先ほどの相撲なのだが彼らはこう言ったのだよ。『こちらの相撲自慢が負けたら、貴方の仕事を手伝おう。逆にこちらが勝ったら我々の暮らしの手助けをしてくれ』とね」
「そんな複雑な内容のやり取りをしていたんですか？」
　思わず問うユキミに、鵺野は当たり前のように言った。
「生き物である以上、暮らしの悩みや恋の悩みの一つや二つは有るものだよ。そして、小生のクワガタは見事勝利を収めた」
「しかし、只のク……いえ、彼らはどんな『手伝い』をすると？」
　危うく「只のクワガタが」と言いそうになり、ユキミは言い方を変えて尋ねた。
「彼らは『眼』になってくれるそうだ」
「『眼』？」
「この森の全てのクワガタが、我々以外の人間が森に入れば連携を取り即座に小生に教えてくれる事になった。これで多少は楽になるだ

ろう」
「……！」
事もなげに言う鵺野に、ユキミは息を呑んだ。
この希望崎学園は敷地の結構な割合が森で出来ている。練馬区並みの広大な土地を管理するにも手が足りず、元は建物があったであろう場所にも木が生い茂っているような有様だ。現在ユキミ達が拠点としている旧校舎周辺にしても深い森に包まれている。その敷地に棲息する全てのクワガタが監視カメラとなり、伝令役になると言うのだ。鵺野は「多少」と言ったが、これで自分たちは広大なレーダー網を得た事になる。
〝転校生〟の任務において最も重要になってくるのは、実のところ情報戦である。相手より先んじ、能力を発動させる前に無限の攻撃力で一撃で殺す。それが〝転校生〟が未知の魔人を相手取る時の基本戦術。
魔人を超越した存在である〝転校生〟は時間の概念を超えた不老の肉体と無限の攻撃力、そして無限の防御力を全員が持っている。しかし、「不老」ではあるが「不死」ではない。絶大な攻撃力・防御力を持っていると言うだけで肉体機能や構造自体は通常の魔人と変わらない。故に息が出来なければ死ぬ、腹が減れば餓死する。相手が即死能力を持っていれば普通に死ぬし、慌てて熱い汁ものを飲めば舌を火傷する。
それらのリスクを大幅に抑えるために必要なのが情報収集能力なのだ。
「……流石ですね、ヌガーさん」
「褒めるなら小生の『友』を褒めてくれ給え。とりあえずは、話に聞く二つの勢力が激突するのを待とうではないか」
ユキミの感嘆をゆったりと返し、鵺野は教室の椅子に腰かけた。
その鵺野が言う「対立する二つの勢力」の片側の拠点である筈の番長小屋。
「つ……連れて、きました……」

往復約１０kmの徒歩による大移動を終えた駒沢がフラフラになりつつ言った。
「すまんのう、駒沢」
「い、いえ、大丈夫です。邪賢王さん……それに、これからもう『ひと頑張り』しないといけませんから」
邪賢王の気遣いに、駒沢は首を振りつつ答えた。木箱に座っているあげはの心配そうな視線に気づき、そちらにも大丈夫そうに手を振る。
彼が連れてきた生徒会メンバーを声で確認し、ド正義は頷いた。
「……皆、よく来てくれた。事情は既に聴いていると思うが、現在の我々は非常に危険なライン上に居る。既に〝敵〟の暗躍が予測される状況で〝転校生〟が三人学園内におり、わが校の一般生徒である天音沙希が彼らと長谷部によって捕らえられている。これを何としても救出しなければならない」
包帯で顔が隠れた状態ながらも、日頃と変わらない凛とした声が番長小屋に響く。
ド正義は杖で床を突き、眼前に居るであろう『７人』に言った。
「隠し立てせずに言う。本作戦は死傷者の出る可能性が極めて高い。去年の学園祭では一人の〝転校生〟に対して５人の魔人が死亡、２人の魔人が重傷を負い、かく言う僕自身も戦闘不能に追い込まれた。今回はその時の反省を踏まえ、相手が〝転校生〟だろうと通用する能力者を揃えたつもりだが……三人の〝転校生〟の能力が全く不明な以上、それでも確実とは言えない」
見渡すように首を回し、全員に声が、思いが行きわたるようにド正義は言葉を続ける。
「危険を理解した上で退がるのは、臆病ではなく冷静な判断だと僕は思う。それでも本作戦に参加してくれると言うのであれば……一言でいい、僕に聞こえるよう答えてくれ。そうでない者は、無言で一歩下がって……」
「ド正義会長……そうは言っても、私が居なかったらこの作戦って成立しないわよね？」

「む……」
「フフッ、いいわ。やってみましょう？」
――番長グループ・鏡子。
「拙者の命は所詮、もともとド正義殿に拾われた命……捨てる覚悟は常に出来ておりますぞ」
――生徒会・赤蝮伝斎。
「確かにこの作戦であれば、俺と一刀両が適任だろう。いけるか、一刀両？」
「はい、先輩！　あの、これが『初めての共同作業』というものでしょうか!?」
「……」
――番長グループ・白金翔一郎。
――生徒会・一刀両断。
「ぼ……僕にしか出来ない事です。やらせてください」
――番長グループ・〝静かなる駒沢〟。
「フゥ……正直言えば気は進まないのですが、ここで当座のリスクを回避した場合、最終的な私の死亡リスクがより高まるという計算にしかなりませんから」
――生徒会・ファーティマ＝アズライール。
「……退がるつもりはありません」
――無所属・両性院男女。
「両性院君、気持ちは分かるが……」
「お願いします、会長」
珍しく言い淀むド正義に、両性院は真っ直ぐに言った。
実際、ド正義の作戦に彼は含まれていない。自分から死地に飛び込もうとする両性院を止めたいとド正義は思っていたが、仮にここで断れば彼は独自で行ってしまいそうであった。
「……分かった。ならば君は赤蝮君のチームに加わってくれ給え」
「ありがとうございます、会長！」
見えないと分かりつつも、両性院は深く頭を下げた。
「とりあえず全員参加なのは良いけれど……随分と消極的ね、ファー

テイマちゃん？」
「精液臭い顔を近づけるな、変態」
優しく声をかけてくる鏡子に、アズライールは露骨に嫌な顔をしつつ言った。
細目のスラックスに白シャツに黒チョッキというアズライールの洒落た格好と、洒落気の無いフチ無し眼鏡に三つ編みにセーラー服という素朴な格好の鏡子が並び立つのは何とも対照的な様子だ。
「あらあら」
「勘違いされては困る。協力する必要性は認めるが……私個人がお前と仲良くする道理は無い。被害届こそ出ていないが、お前が昼休みに中央広場で食事中の男子生徒に声をかけ、搾り取った『モノ』をご飯にかけて食べている様子が複数の生徒から通報されている。『白い米が食えなくなった』という苦情と一緒にな」
困ったように笑う鏡子に、アズライールは冷たく言う。
「そうは言っても私、アレがかかってないとご飯を食べた気にならないのよね……」
「一般的にはそれは『変態』もしくは『狂人』の行動だと言う事を知らないようだな？」
涼しい顔で鏡子が言葉を返すと、更に鋭い言葉でアズライールは言った。
「（……そう簡単にはいかないものか）」
内心でド正義はため息をついた。範馬ほど露骨な態度を示してはいなかったが、アズライールにもやはり思うところはあったようだ。中東の女性は貞淑さを求められると言うが、その辺りも〝あの〟鏡子を毛嫌いする理由なのだろう。
「……ふうん」
「な、何だ？」
ふと、鏡子の声のトーンが僅かに下がった。
流れるようなしなやかさでアズライールの褐色の手を取ると、鏡子はド正義に声をかけた。
「ド正義会長、作戦前にちょっとこの子と『レクリエーション』をさせ

て貰っていいかしら？」
「お、おい、離せ！　何を……!?」
「……作戦開始は翌朝の未明だ。眠る時間は与えてやってくれ」
「会長!?」
　歯切れ悪くド正義は言った。男というのは筆おろしの相手には、なかなか強気には出られないものである。
「大丈夫、そんなに時間はかけないわ。ちょっと『相互理解』を深めるだけだから」
「だからそんなのは私は要らないと……！」
「ダメよ、ファーティマちゃん？　貴女、折角これだけ色々と『属性』を兼ね備えてるんだからそれを活かさないと」
「い、いやっ、おい、待て……！」
　アズライールは何とか鏡子から逃れようとするが、彼女に握られている手をどうにも離せないままズルズルと小屋の隅の物陰に連れて行かれ、そのまま二人の姿は木箱の陰に消えた。
「いい加減にしろ！　私は……ひゃあっ!?」
「ほーら、脱ぎ脱ぎしましょうね～」
「ちょ、お前、どうやって!?　きゃ……！」
　ぽいぽいとアズライールのチョッキとシャツが外側に放り出される。
「あら、可愛いブラ」
「～～っ！」
「さて、それじゃ……『相互理解』とイきましょう？」
「え？　あ、あっ!?　ふぁあっ!?　ど、何処、舐めてっ、ンンッ！」
「綺麗な肌……丁寧に手入れしてるのね」
「だ、だからちょっと待って！　私は女で……！」
「……？　何か問題があるの？」
「問題も何も……ふぁ、ンッ、アアッ！　み、耳はぁっ！」
　陰を作る木箱がカタカタと揺れる。今度は中からパステルカラーのブラが放り出され、赤蝮の男根めいた髷に引っかかった。それを手に取り、赤蝮は淡々と言った。

「……Aでござるな」
　その間にも、物陰での『相互理解』は早くも次の段階に進んだようだった。
「先っぽが固くなってる……可愛いわ、ファーティマちゃん。あむっ……」
「あぁ、だ、駄目、そこっ、咥えちゃ……ああんっ！」
「敏感なのね……じゃあ、こういうのは、どう？」
「ふぁあっ！　それっ、それ、もっとダメ……っ！」
「ダメ？」
「だ、ダメぇっ！」
「そうなの？　でも、ここは『もっと欲しい』って言ってるわよ？」
「んひぃっ！」
　当初の強気な態度はどこへ行ったのか、木箱の向こうから聞こえるアズライールの声は既に涙声である。
　衣擦れの音が少ししたかと思うと、その声は一際高くなった。
「あっ、ああっ！　やっ、そこっ、そこはぁっ！」
「あらあら、凄いお漏らし……指がふやけちゃいそう」
「ひあぁっ！　や、やめっ！　本当に……ンンッ！」
「上から撫でているだけでこれなら、指が挿入(はい)ったらどうなるかしら？」
「んあぁぁっ！」
　ぽいと何かが物陰から飛来し、両性院の顔に「べちゃり」と貼り付いた。
「え？　あ？　うわっ!?」
　それが異様に水分を吸った状態の、ブラと同じ色のパステルカラーのアズライールのショーツである事に気付き、両性院は顔を赤らめた。
「ひっ、あ、あぁ……！」
「うーん、思ったより弱いわね……という事は……」
「っ!?　やっ、そこ、違っ！　くひぃぃっ！」
「『違う？』そんな事は無いわよね？　ほら、すんなり二本も挿入っ

ちゃうなんて普段から『使って』ないと無理だもの。ふふっ、いやらしい子ね」
「あ、あぁ……ご、ごめん、なさい……あ、謝りますから、許し、ンンッ！　許して、くださ……ひいっ！」
「許すも何も怒ってないわ。ファーティマちゃんに、私は私の事を知ってほしいだけだもの……それで、私もファーティマちゃんの可愛い所をもっと知りたいだけ……」
「ひあっ!?　こっ、壊れっ！　ぎひぃっ！」
　蛇口がある訳でもないのだが、何だか水音が聞こえてきた。木箱が更にガタガタと揺れる。
「可愛いわ、ファーティマちゃん……いいわよ、もっと、もっとその顔を見せて。だらしなくて、いやらしくて、素敵……」
「ひあぁっ、み、見ない、で……ふぁぁっ！　見ないでぇ……！」
「それじゃ……そろそろラストスパートとイきましょうか」
「ひぎぃっ！　あっあぁっ！　やっ、やあぁっ！」
　不安定だった上の方の木箱の一つが転がり落ちる。
　日頃のクールな態度からは想像できない、顔を涙と涎で汚し、半ば白目を剥きながら恍惚の表情を浮かべるアズライールの顔が覗く。
「あら、ちょっと激しすぎたかな」
「あはぁ……み、見ちゃ、やぁ……！」
「ふふっ、丁度いいわ。ファーティマちゃん、皆に貴方の本当の姿を見て貰いましょう。これから一緒に命懸けの作戦に加わる〝仲間〟なんだから」
「あっ！　ンッ！　んくぅっ！　こ、怖いっ、怖いぃっ！」
「怖がる事は無いわ。ほら、怖かったら『お姉さん』とキスしましょ。んっ……」
「んっ、んんっ、ぷぁ……はっ、あっ！　あぁぁぁっ！」
　ビクビクと震えながら、アズライールの顔が見えなくなる。腰が抜けたようだ。
　やがて、物陰から鏡子が彼女を連れて物陰から出てきた。『何故か』アズライールは全裸で、全身が汗や唾液や更に良く分からない液体に

塗れている。
「……終わったのか？」
声と音で彼女の「相互理解」が終わったのを理解したド正義が尋ねる。
鏡子はまだ一人で立てない状態のアズライールを抱き寄せると、やはり液体塗れの眼鏡越しに言った。
「ええ……やっぱり、じっくりと互いを理解するのって大切ね。彼女も素直になってくれたわ。ね、ファーティマちゃん？」
そう鏡子が言うと、アズライールは潤んだ瞳で答えた。
「は、はい……お姉さま。ンッ……」
「んっ……もう、甘えん坊なんだから。ンンッ……」
そのままキスをせがむアズライールに、鏡子は人前にも関わらず舌を絡めた激しいキスで返した。

ここで彼女の誇りと名誉のために補足しておくと――アズライールを篭絡させた彼女の性技、これは魔人能力ではない。
〝鏡子〟、彼女は幼少期、実に小学校低学年の頃に性に目覚め担任教師を獣に変えて以降、一年３６５日常に性の高みを目指し、自身の技を磨いてきた希望崎最強の、否、世界一のビッチである。
彼女の魔人としての能力は別に存在するが、セックスについての全ては魔人として覚醒する遥か前から彼女と共にあり、そしてこれからも存在するであろう彼女のアイデンティティーなのだ。
故に鏡子はこう呼ばれる。〝宇宙一セックスの上手い女〟と。

第十三話　魔人小隊

――９月１０日、２２時。希望崎大橋・西側ゲート周辺。

夜の闇の中、幾つものライトが隠れ潜む者はいないかと右に左にと動く。

夕方まで学生が行き来していた橋の入り口には厳重なバリケードが築かれ、紺色の制服を着た幾人もの警官が一定の間隔で並んで周囲に警戒の視線を張り巡らせている。

バリケードの横には、「現在、ハルマゲドン中につき通行禁止」と赤文字で大きく書かれた看板が立てられ、その下には次のように書かれていた。

【現在、希望崎学園敷地内において理事会公認抗争「ハルマゲドン」が行われております。ご迷惑おかけしますが、同抗争終了告知まで通行はご遠慮下さい。

なお期間内において敷地内へ潜入を試みる行為、あるいは侵入を行った場合は一般人、魔人共に処罰の対象となります（警戒中の警官には不審者に対しての射殺権が与えられています）。

希望崎学園理事会】

警備している警官は全て魔人だ。

彼ら、いわゆる「魔人警官」は魔人の就職先としては安定性と収入面において最も人気が高く、同時に超高倍率でもある勝ち組職業である。

しかし、魔人を取り締まる側に回ったからといって彼らが魔人差別から逃れられるのかと言えば、決してそんなことは無い。

一般の部署からは変態か化物の集団のような目で見られ（その見方は決して間違ってはいないのだが）、通常の犯罪者とは比べものにならない程に危険な魔人犯罪者と命懸けで渡り合い、満身創痍で帰還しても「その為の部署なんだから当たり前」とばかりに労りの言葉もかけられない。

そして、そういった鬱屈した感情は身内でなく敵である魔人犯罪者に向けられる。相手を牽制するために撃った拳銃の「誤射」や、命の危険を覚えたために〝やむを得ず〟相手を殺す「正当防衛」などで死ぬ魔人犯罪者が逮捕される数より多いという噂は、あながち間違いではない。

その魔人警官のひとり、現場管理を任されていると思しき男性警官が迷彩服姿の女性と話をしていた。

「ご協力感謝します。それでは」

「はい、お気をつけて」

互いに敬礼を交わすと、女性は後ろを向いた。

見れば、奇妙なことにそこには30名ほどの女性と共に〝お神輿〟があった。おそらくは全員で担ぐのであろう。結構な大きさの、がっしりとした神輿である。

「……」

その神輿の上では、一人の女性が座禅を組んでいた。綺麗に頭を丸めた尼僧を思わせる風貌の女性だが、着ているものは他の女性たちと同様の軍用の迷彩服だ。

「……ふう」

彼女らを見送った警官は、緊張が解けたように大きく息を吐くと自身の持ち場へと戻った。

「先輩、あの子たちって誰なんですか？」

持ち場を一旦頼んでいた、後輩の警官が彼に尋ねた。

「事前のブリーフィングでちゃんと説明しただろ。お前、聞いてなかったのか？」

「俺、本当は外周の交通整理担当だったんスよ。ここの担当が昼飯のカキフライに当たったとかで、急に位置変更になったんス」

「……魔人でもカキには勝てねえってか」

先輩警官は苦笑すると、先ほどまで彼女らがいた筈の場所を見た。既にそこには誰もいない。

「魔人小隊だよ、魔人小隊」

「ええっ!?　あんな子たちが？」

「〝機密事項〟だとかで教えてくれなかったが、今回の部隊は女だけなんだとよ」
「へえ……でも、中って今は殺し合いの最中なんスよね？　何をしに行くんス？」
　軽く聞いてくる後輩に、先輩警官は薄ら寒さを感じつつ答えた。
「……中の魔人の学生（ガキ）共を皆殺しにするんだとさ」

ダンゲロス／ＩＦ　第十二話　魔人小隊

「わっしょい」
「わっしょい」
「わっしょい」
「わっしょい」
　座禅を組む女性を乗せた神輿を担ぎつつ、迷彩服の女性たちはかけ声と共に大橋を渡ってゆく。魔人の身体能力があるとはいえ、３０人近い人数が足並みを揃えなければならず歩みは遅い。
「……ねえ、貴女たち。幾ら周りからは認識されないからって、もっと真面目にやろう？」
「そうは言いますけど〝代行〟、この人数では声を合わせないと転びますよー」
「だったら他にあるでしょ！」
　月読零華との合流までの間の隊長代行を委任されている出鯉舞（でこいまい）が後方の小隊員に言うと、神輿の後方辺りを担いでいる隊員〝ｅｓ（えす）〟が抗議の声をあげる。
「それじゃ、何て言えばいいんですか？」
「ええっと……訓練中のかけ声の『１，２』とか」
「え～……じゃ、じゃあ、それでやってみます？」
　舞の提案をｅｓは渋々と受け入れた。
「いきますよ？　せーの、いっち、に！」
「いっち、に」
「いっち、に」

「いっち、に」
「……代行、やっぱり神輿に『いっち、に』は無いですよ」
「う～……分かった。でも、お祭りじゃないんだからせめて『わっしょい』はヤメにして、『セイヤ』とか『ソイヤ』みたいな勢いあるかけ声で行こう？」
「まあ、それなら……いくよ、みんな！　そいやっ！」
「ソイヤッ！」
「セイヤッ！」
「ソイヤッ！」
「セイヤッ！」
今度は先ほどより勢いづいたのか、若干速度が上がる。
無論、彼女らは意味も無く迷彩服姿で女神輿を担いでいる訳ではない。これには理由が二つあり、神輿の上で座する小隊員、阿頼耶識（あらやしき）そらの存在〝遮断〟能力「ラージギール」に深く関係している。
古代インドの王舎城に由来する名を持つこの能力は、ひと言で言えば「周囲との関係性を遮断する事で、自分の〝存在〟自体を世界から無くす能力」である。概念的ではあるが、人間はその周囲を囲む他者や物質との関係性によって〝存在〟していると言える。その関係性を断ち切り、その世界に「存在しない事にする」事が阿頼耶識そらには可能なのだ。
これは単純に「見えなくなる」というだけの話ではない。世界から「存在しない」と認識されるのだ。例えば番長グループ・駒沢の能力「I・Z・K」は存在をあくまで〝希薄化〟させる能力である。単に認識されないだけで駒沢は確かにそこに居るし、仮に彼の居る場所で爆発が起これば駒沢は普通に死ぬ。
ところが、「ラージギール」は世界そのものから存在を「無かった事にする」。例えば「ラージギール」中の阿頼耶識の位置に偶然銃弾が飛んできたとしても銃弾は彼女を〝認識〟せず、そのまま通過する。それは毒ガスだろうと核爆発だろうと同じである。何故なら彼女はこの世界に「居ない事になっている」のだから。
仮に世界を水面だとするならば、駒沢の能力はその水面上で透明に

なる能力、阿頼耶識の能力はその水面下に潜る能力と言えるだろう。透明の駒沢は嵐が来ればそれに巻き込まれるが、水面下の阿頼耶識は嵐の影響を受けないのだ。

そして、この能力は阿頼耶識と間接的にでも接触していれば共有が可能となる。小隊全員を能力でフォローするのに手を繋ぐだけでは難しい。これが神輿を使う理由の一つである。

もちろん、これ程の強力な隠匿能力だけに制限も多い。

まず、「ラージギール」発動中の阿頼耶識は禅定（心が動揺しない、完全にひとつの事に集中している状態）に突入させる必要があり、その間は能力発動以外の一切の行動が出来なくなる。共有者は他の行動が可能ではあるが、世界から一切の干渉を受けなくなる代償として「こちら側」からも一切の干渉ができなくなる。友好的にせよ敵対的にせよ、世界に干渉するには関係性を持たないといけない訳だ。

神輿を使うもう一つの理由がこれである。常に身を隠すには、彼女を輸送しなければいけないからだ。

「セイヤッ！」
「ソイヤッ！」
「セイヤッ！」
「ソイヤッ！」

やがて、彼女らの神輿は長い希望崎大橋を渡り切り学園正門に辿り着いた。正門を抜け、敷地を囲むように生い茂る森の中へと神輿は入ってゆく。

「……周辺、敵影なし。〝イズミノ〟、『リクィド・スフィア』を」
「はい」

切れ長の瞳と薄い眉が特徴的な小隊員、イズミノは舞に呼ばれると神輿に片手を添えたまま腰の魔法瓶の蓋を開けると神輿に置き、そこに水を注いだ。

「ンッ……」

口腔内で舌を動かし、唾液を分泌させるとイズミノはその水の中に自身の唾液を垂らした。水面に浮かぶ波紋をしばらく確認した後、顔を上げる。

魔人探索能力「リクイド・スフィア」。水面に唾液を垂らし、そこに生まれる波紋から周囲の「能力発動中の」魔人を察知する能力である。相手の能力までは把握できないが、「自動発動型を含む能力の発動」が感知のトリガーであるため、「Ｉ．Ｚ．Ｋ」のような隠密能力や透明化能力、また夜夢アキラの眼球のような体のパーツにも反応できるのが強みだ。

「……半径１㎞圏内に、我々以外の能力発動者なし」

「それなら大丈夫ね。阿頼耶識二尉、『ラージギール』一旦解除。５分休憩を」

舞の声に応えるように神輿上の阿頼耶識が瞳を開けると、抱えていた小隊員たちはゆっくりと神輿を下ろして其々身体を伸ばし脱力した。メリハリある緊張と休憩が、長期間と予測される任務においては重要だ。

「ここから本校舎までは約２㎞、更にそこから月読二尉の居る教員棟地下までも多少の距離があるわ。今のペースだとあと一時間ほどって所ね。まだ学園内での大規模な激突は確認できていないけど、移動中に衝突が発生した場合は『ラージギール』を解除して急いで二尉と合流。場合によってはそのまま学生たちの殲滅に移るから、火器は何時でも発砲可能にしておいて」

「はい、代行」

周囲に説明しつつ、舞は短時間ながら隊長代行を行うプレッシャーを感じていた。階級的には上官である阿頼耶識が本来は適任なのだが、彼女は「ラージギール」発動中はそれ以外何もできなくなる。結果、舞にお鉢が回ってきた格好だ。

「うわっ！」

その時、ヘルメットを脱いでいたｅｓが声をあげた。

「どうしたの、ｅｓ？」

「見て下さいよ代行！　こんな大きなクワガタ、うちの実家にも居ませんでしたよ！」

何だかテンションが上がっているようなｅｓの指さす先を見ると、確かにそこには大きなクワガタが樹液を吸っている。呆れつつ舞は

言った。
「ｅｓ、確かに今は休憩中だけど……」
「あ、クワガタ嫌いでした？」
「いや、そうじゃなくて」
魔人というのは元々マイペースな性格の者が多いが、それにしても呑気なものだ。
舞はそう思ったが、同時に理解できる部分もあった。今回の作戦は――相当に「ぬるい」。
今回、彼女ら魔人小隊が相手するのは恐るべき国際魔人テロ組織でもなければ、１９６０年代末から１９７０年代にかけて世間を荒らした学生魔人運動セクト過激派「革命的魔人主義連盟（革マジ）」の老獪な残党でもない。
標的は〝ただの〟民間の魔人学生６０名。予想される武装レベルもせいぜい日本刀や小銃、粗末な爆弾程度。１０両の戦車で市街地を破壊し回った魔人暴力団を殲滅した時に比べれば危険度は格段に低い。更にその６０人の魔人は二つの勢力に分かれており、零華が裏で糸を引いていた事にも気付かず敵対心を強め合い、このハルマゲドンでどちらかが全滅するまで戦うつもりでいる。
つまり、彼女らが相手する予想敵はその潰し合いで生き残った手負いの十数名の学生程度なのだ。上手く事が運べば今晩中に殺し合いが終わり、明日の朝には殲滅完了できているかもしれない。そんな任務であった。
「あ……！」
虫を捕獲するための道具は無いが、何とかクワガタを捕まえようとしたのだろう。ｅｓはそろそろと両手を丸めて樹のクワガタを包もうとしたが、それを察知したのかクワガタは一瞬早く樹皮を蹴り、夜空へと飛び立った。
「あーあ……」
「休憩終了まであと一分よ。そろそろ再出発の準備！」
「はい、代行」
夜空を飛ぶクワガタは、何かを伝えようとするが如くカチカチと顎

を鳴らす――

「……おや」

旧校舎・〝転校生〟拠点。

生徒会と番長グループの激突を待ちつつユキミや黒鈴と他愛ない話をしていた鵺野は、何かに気付いたように頤を上げた。

「どうしたの、ヌガー先輩？」

「ふむ、〝虫の知らせ〟が来たようだ」

そう言うと鵺野は立ち上がり、窓枠に停まるクワガタに学生帽を脱いで一礼した。

「ご協力感謝する。して、如何に？」

「……」

「ふむふむ……」

クワガタが顎を鳴らすと、鵺野は興味深そうにその話を聞いた。彼以外にはクワガタの言葉は分からないため、何ともシュールな光景である。

「……」

「……!?」

だが、その顔に僅かの驚きが浮かんだ。

「……」

「いや、ここからは小生たちの問題だ。お気遣い感謝する」

そう丁寧に礼をしてクワガタを森に返した後、鵺野は教室に振り返り、その隅で身を縮ませている長谷部に歩み寄った。

「な、何だ？」

契約が完了してからというもの、彼はこうしてコミュニケーションを避けるようにして座ったままである。全裸にした沙希を何処からか用意した十字架に張り付ける際にも、手伝いの意思表現すらしなかった程だ。

〝転校生〟側としても面倒臭そうな契約者と必要以上に話をする必要も無かったため、鵺野らも置物のように放置していたのだが――

急に声をかけられて警戒する長谷部に、鵺野は無表情に尋ねた。

「長谷部殿、今一度確認するが……今回の小生たちの任務は『はるまげどん期間中、敷地内の地下を除く〝転校生〟以外の全ての魔人を殺す』、これに相違無いな？」
「あ……ああ、そうだが？」
「なるほど……ではもう一点、今回我々が相手取るのは『生徒会と番長グルウプの構成員である約６０人の魔人』……これも相違無いか？」
「そ、そうだ、その６０人を殺してくれれば……」
「本当にか？」
　怯えを浮かべつつも長谷部は答えた。しかし、鵺野は間を置かず更に尋ねてきた。
「……ヌガーさん？」
　ユキミはその鵺野の態度に違和感を覚えた。日頃の余裕ある、飄々とした態度とは明らかに違う。
　長谷部も自分が疑われている事に気付いたのだろう。怯えから今度は怒りに表情を変え、逆に鵺野に言ってきた。
「な、何を疑っている!?　　わ、私が嘘をついているとでも言うのか!?」
「偶に居るのだよ。偽の依頼で呼び寄せた〝転校生〟を殺し、その秘密を暴こうという不届きな手合いがね。貴殿がそれではないかと小生は疑っているのだ」
「馬鹿な事を！　か、勝手な思い込みで私を疑うな！」
　顔を赤くして怒鳴る長谷部に、鵺野は更に一歩踏み出した。
　長谷部は再び顔に怯えを浮かべたが、それでも強気な態度を崩さずに言った。
「わ、私に触るな！　知っているぞ、お前ら〝転校生〟は契約者は傷付けられないんだろ！　脅しても無駄だ！」
「……？」
　鵺野は歩みを止め、小首を傾げた。
「そ、そうだ、それ以上近寄るな……」
「……長谷部殿、どうやら貴殿は勘違いをされているようだ」
「え？」

「契約書をよく読まれよ」
　鵺野にそう言われ、長谷部は白衣の内側に入れていた契約書を取り出して広げた。鵺野は言葉を続ける。
「主文の下に小さく書かれていないかね？　『上記依頼に含まれない人物（契約者本人を含む）・物品の保護に関しては乙（契約者）がその責任を負うものとする』……例えば本件が『長谷部俊樹を護衛しつつ、期間中に敷地内に存在する〝転校生〟以外の魔人を全て殺す』であったならば、小生らは貴殿を守るために全力を尽くしたろう。しかし……今回の依頼に貴殿の護衛は含まれていない」
「……な」
「つまり、だ」
「あっ!?」
　鵺野の腰の箱が開き、弾丸めいた速度で「キヨ」が飛んだかと思えば長谷部の手にあった契約書が宙を舞った。強靭な顎で長谷部の手から契約書を奪い取った「キヨ」は、大きく円を描いて鵺野の許へと戻る。
　見れば、長谷部の頬に一筋の切り傷が付けられていた。奪い取る瞬間にツノで薄く切ったのだ。
　自分が傷付けられた事に気付き、長谷部はそれまでの虚勢を捨てて教室の壁際まで逃げるように下がった。
「ひっ、ひいっ！」
「小生たちにとって大事なのはこの契約書であって、貴殿の命はどうでも良いのだよ」
　鵺野は全く感情を見せない瞳で長谷部を見据えた。
「それをご理解いただいた上でもう一度聞こう。今回我々が相手取るのは『生徒会と番長グルウプの約６０人の魔人』……これは間違いないのだね？」
「そ、そうだ！　お前たちを騙そうとか、そんなつもりは全く無い！　ハルマゲドンで生徒会と番長グループの魔人どもが殺し合う事になったから、学園から魔人を減らす良い機会と思って依頼しただけだっ！」

長谷部は必死に答えた。これを嘘と思われれば次の瞬間に殺されるかもしれないのだ。文字通りの命懸けの弁明である。
「……フゥム。どうやら嘘はついていない……か」
じっくりと長谷部の顔を見た後、鵺野はそう言うと息を吐いた。
とりあえずの命を拾った長谷部はへたへたと腰を落とした。失禁したかもしれない。
「ヌガーさん、あのクワガタは何を言ったんです？」
「ん？　ああユキミ、すまなかった。こちらが知っている情報を曖昧にしておかねば、そこから嘘をつかれる可能性があったのでね」
話が落ち着いたのを見て、ユキミは尋ねた。先程までの無表情から一転した穏やかな笑顔で鵺野は答える。
しかし、すぐに鵺野は表情を引き締めるとユキミ達に言った。
「ユキミ、黒鈴……どうやら今回の依頼、思っていた以上に厄介なものになるようだ」
「厄介……ですか？」
「彼のクワガタは小生にこう伝えた。『神輿を担いだ兵装姿の女性数十人が正門付近に居た』とね」
「……!?」
わざわざハルマゲドン中に女神輿が目的も無く入ってくる理由はない。そんな事をする者が居たとすれば、十割で魔人だ。
その意味が二人に伝わったのが分かったのだろう。鵺野は反応を待っていたように言った。
「おそらくは……この世界の〝魔人小隊〟だ」

第十四話　魔剣「福本剣」

「おそらくは……この世界の〝魔人小隊〟だ」
クワガタからの情報を元に出した鵺野の言葉に、ユキミは表情を曇らせると腕を組んだ。
「……まずい、ですね」
「ああ、実にまずい」
「随分と話が変わってきちゃったわね……」
黒鈴も眠そうな顔のまま眉をひそめる。
彼ら〝転校生〟にとって魔人小隊は〝天敵〟とまでは言えないものの〝恐ろしく厄介な相手〟だ。幾人もの〝転校生〟が依頼の為に向かった世界の魔人小隊、もしくはそれに類する対魔人部隊に殺されている。〝転校生〟の中でも鵺野やユキミは古参と呼ばれる部類だが、依頼を受ける日々の中で友を、先輩を、後輩を失ったのは一度や二度ではない。
普通の魔人を相手取るのと魔人小隊を敵に回すのとの一番の違いは、対〝転校生〟についてのノウハウの有無である。〝転校生〟がその世界に出没する頻度による情報量の多寡はあるが、多くの場合彼らは〝転校生〟がどのような存在なのか、どんな能力を有しているか、そして――それを殺すにはどうすれば良いかを把握している。
〝転校生〟にとって最も厄介なのがこの「殺し方を知っている」という点だ。〝転校生〟の最大の特徴である無限の攻撃力と無限の防御力はあくまで肉体的なものであり、それ以外は普通の魔人とさして変わるものではない。精神操作系の魔人が数人でも敵部隊に揃っていれば、こちらが先手を取れない限りは「詰み」である。
「ただ、まずい状況ではあるが完全に小生たちに不利と言う訳でもない……長谷部殿、本依頼について他に知っている者は？」
鵺野は首を回し、部屋の隅からこちらを伺う長谷部に尋ねた。
「だ、誰にも言ってない！　お前らのところの担当に言っただけだ！」
身を縮こませつつ長谷部が答える。すっかり怯えてしまっているようだ。自分の身をを守ってくれると思い込んでいた相手が自分を

殺しかねないと分かったのだから仕方ないと言える。とはいえ、一人で外に出て行く事も出来ずああやって最大限の距離を取りつつ教室内に居るしかないという状況だ。
「まあ、そうであろうな。つまり魔人小隊は『〝転校生〟が目的で学園内に乗り込んできた訳ではない』という訳だ」
「だとすると……生徒会か番長グループ、どちらかがテロ組織指定されていて、それを今回のハルマゲドンで殲滅しようとしている？」
「おそらくはその筋で間違いないだろう」
　ユキミの推測を鵺野は肯定した。確かにレアケースではあるが、彼らは同様の「聞いていた話と違う第三勢力の介入」によって状況が混沌と化した依頼を幾つか経験している。多くの場合、〝転校生〟を呼び出した人間の知らない所で別勢力が独自に動いており、いざ依頼を遂行しようとした時にブッキングしてしまうという流れだ。
　そしてこの場合の生き残るコツは――「如何にして混沌とした濁流から身を離しておけるか」にある。
「方針は変えずに行こう。魔人小隊の狙いが学生たちであると言うなら、向こうの狙いも我々と同様に学生同士を潰し合わせて漁夫の利を狙う作戦の筈」
「その後、消耗した魔人小隊を殺す……という流れがベストですね」
「ちょ、ちょっと待てお前ら！　魔人小隊まで殺すつもりか!?」
　長谷部が慌てて言った。不思議そうな顔で鵺野が彼の方を向く。
「いや……これは長谷部殿、貴殿の希望なのだが？」
「私の!?」
「『はるまげどん期間中に指定された敷地内に存在する〝転校生〟以外の魔人の殲滅』……それが貴殿の依頼だ。魔人小隊が相手というのは小生としても気が進まんが、〝魔人〟である以上は仕方がない」
「そ、それは困る！　魔人小隊を殺せば、国を敵に回す事になる！　私はどうなるんだ!?」
　必死に尋ねる長谷部に、鵺野はからかうように言った。
「さて……どうなるのだろうね、学者殿？」
「っ！　け、契約破棄だ！　お前ら、とっとと帰れ！」

自身の命が危ういとは知っている筈だが、怒りが自制を上回ったのだろう。長谷部は鵺野を怒鳴りつけた。
そんな長谷部に、鵺野は微笑んで答えた。
「残念ながら契約破棄は口頭では受諾されないのだよ。契約書を破棄しない限りは、依頼は継続される」
「な……！」
「つまり、小生から『これ』を奪い返せば貴殿は契約を破棄できるという事だな」
「そ、そんな……！」
そう言いつつ、鵺野は懐から先ほど長谷部から奪った契約書をひらひらと翳した。
魔人ですらない長谷部が〝転校生〟から契約書を奪うなど出来よう筈も無い。長谷部の顔は赤から青へ、青から蒼白へと変わっていった。
「た、頼む、帰ってくれ……」
「腹を括りたまえよ、長谷部殿」
先程までの怒りから絶望へと変わった表情で、長谷部は懇願した。
鵺野は涼しい顔で答える。
「『６０人の魔人学生を殺す』と決めた時点から、既に貴殿は最早後戻り出来る所に立っておらぬ。貴殿が再び教壇に立つには、可能な限り我々に協力し、敷地内の魔人が全滅して小生たちが帰った後で警察に保護され『避難が遅れ遭難しかかっていた不幸な教師』を演じるしか無いのだよ」
「そんな……私は、ただ、魔人を……」
ぐったりとした様子で、長谷部は再び椅子に腰を落とした。この短時間で随分と老けたようにも見える。
彼の存在を完全に無視しつつ、黒鈴が言った。
「……ねえ、先輩。本当に学生たちは予想通りに動いてくれるかしら？」
「さて……雑多とはいえ両勢力合わせて６０人の魔人だ。中には探知系能力者も居るだろうし、小生たちの存在は既に察知されていると考

えるべきであろうね」
「だったら、学生たちが喧嘩を一旦中断して、私たちを攻めてくるケースもあり得るんじゃない？」
「確かに可能性はあるが……今の時点では薄いな。どちらの勢力にとっても、俺達は後回しにしたい筈だ」
黒鈴の懸念をユキミは柔らかく否定した。
長谷部の話によれば、この世界では〝転校生〟はワイドショーで定期的に話題になる程には知られている。学生程度でも「とんでもなく強い魔人」くらいの認識はあるだろう。だとすれば、両勢力が〝転校生〟の存在を察知していたとしても「相手勢力に〝転校生〟の相手をしてもらおう」もしくは「後ろから殴られないように先に当面の敵勢力を最小限の被害で撃破し、その後で〝転校生〟を迎え討とう」という発想に行きつくのが普通だ。
「無論、同胞のクワガタ達には其方にも目を向けて頂くが……当面は両勢力と魔人小隊が互いに激突するのを待つとしよう、そして、一方的な展開になりそうであれば影から小生たちが支援し、可能な限り消耗し合うように仕向ける」
この鵺野の提案は現時点で彼らが得ている情報から導き出される結論としては至極妥当なものであり、ユキミや黒鈴もそれを受け入れた。
――そもそもの「生徒会と番長グループが潰し合う」という大前提が間違っていた事を彼らが知るのは、この6時間後である。

ダンゲロス／ＩＦ　第十四話　魔剣「福本剣」

かつて、生徒会には〝福本忠弘（ふくもとただひろ）〟という名の「刀鍛冶」が居た。
この刀鍛冶というのは比喩ではなく、本来の意味で日本刀を造り、鍛える現代の職人としての刀鍛冶である。彼の家は代々続く刀鍛冶で、幼い頃から才覚を見込まれた彼もまた父の仕事を受け継ぎ、優れた職人になる筈であった。

しかし――彼は「優れた刀を作りたい。鬼の力を借りてでも、もっと優れた、良い刀を鍛えたい」と思う余り、鬼の力を借りて刀を作り上げる外法刀工の魔人に覚醒してしまった。

一般的に魔人が作り上げるものは〝邪道〟のレッテルを貼られ、正当に評価される事はない。美術部のヴァーミリオン海我が自身の正体を隠していた一因もこれである。どれだけ優れ、人の心を動かす作品を創造したとしても「魔人が作った」の一点だけで最低点以下の扱いを受けてしまうのだ。

実際、魔人に覚醒してからの福本の打つ刀はどれも優れたものであったが評価はされず、「ここならば自分の刀も活かせるはず」とダンゲロスに入学してからも当時学園を支配していた「戦慄のイズミ」率いる番長グループに強要されて刀を作らされ、更にその刀も乱雑に扱われて捨てられるなど彼は完全に腐る寸前まで追い込まれていた。

そんな彼を救ったのが他ならないド正義であった。まだ生徒会を発足させる前だっド正義は、当時の福本に刀造りを強要していた番長グループの一派を全滅させた後、自身への協力を提案した。

福本は一、二もなくそれを受け入れ、生徒会メンバーとなった。自分の打った刀が学園を守る力になる。それは彼にとって喜びであり、誇りだった。

そして、福本は最後に一振りの妖刀と、自身の手足の先だけを残しこの世から消えた。

「生徒会のために、俺は最強の刀を作り出す。もしド正義の力だけで乗り越えられない試練が訪れた時、その刀は生徒会最強の魔人に持たせてくれ。少しは役に立つはずだ」

生徒会役員であり、福本と中学の同期であったエースが最後に聞いた言葉がそれだった。

それ以降、通称「福本剣」と呼ばれたその刀は秘蔵の宝刀として保管されていたのだが――

「……本来であれば、もっと正式な式典をもって渡すべきなのだがな」

深夜の番長小屋。ド正義はその「福本剣」を手にしていた。生徒会

メンバーを職員棟から「I．Z．K」で向かわせる際、赤蝮に搬送を依頼していたのだ。
その眼前に立つのは一刀両断。緊張した面持ちで、ド正義の手にする刀に視線を注いでいる。
誰かしらが常に何か話をしており悪臭と共に雑然とした空気が漂う番長小屋だが、小屋の中央に立つ二人の姿に感化されたのか、今の小屋内には神域めいた静かな空気が流れている。
「だ、駄目です、鏡子お姉さま……ちゃんと一刀両さんの、儀式を……ああんっ」
「今の貴女は生ったばかりの新鮮な果実のようなものだもの……熟成されたのも悪くはないけど、新鮮な反応の貴女を味わいたいの」
「はっ……はい、お姉さま、もっと私を味わってくださ、ンンッ！」
――そうでない者も一部いる。
人目をはばからず体を重ねている鏡子とアズライールを意識から出来るだけ遠ざけつつ、ド正義は一刀両に言った。
「一刀両君。本日この場より、生徒会が宝刀『福本剣』を君に預ける。この刀と君の剣術を合わせ、生徒会の力と……」
「あ、あの！」
その時、一刀両がド正義の言葉を遮るように言った。
「どうしたのだ、一刀両君？」
「その事について、お願いがあります」
一刀両の顔こそ見えないが声から彼女が何かしらの決断を抱いている事を察し、ド正義は尋ねた。
「……言ってみたまえ」
「私は……私は確かに『生徒会』の中では剣技において一番かもしれません。けど……『希望崎学園』で一番の剣士ではありません」
そう言いつつ、一刀両は邪賢王の横に立つ翔一郎を見た。
「お願いします、会長。〝転校生〟との戦いの最中だけでも構いません。この刀を、私でなく白金先輩に預けて頂けませんか？」
「一刀両殿、それは流石に……！」
ド正義の横で立会人を務めていた赤蝮が難色を示す。福本が命と

引き換えに造り上げた生徒会の至宝である。その反応は当然だ。
　実際、ド正義としてもそれは受け入れられる提案ではなかった。何とか彼女を納得させようと言葉を考えている内に、別の者が一刀両に言った。
「いや……一刀両、その刀はお前が持つべきだ」
「白金先輩!?」
　彼女にとっては予想外だったのだろう。翔一郎自身からの推薦に一刀両は戸惑いの声を返した。
「福本忠弘、あいつはいい刀鍛冶だった。今の俺が持っている剣も、かつての番長グループの下で一緒だった時にあいつが作ったものだ。強引に作らされていた筈だがそれでも今まで刃こぼれ一つ、曇りひとつ付いていない。どんな目的で使われる刀であれ、あいつは妥協ができなかったんだろうな」
　そう言いつつ翔一郎は腰の刀に手をあてた。一刀両に真っ直ぐに視線を送り、一刀両もそれを正面から受け止める。
「……そんな奴が生徒会の為に、命を引き換えに残した刀だ。番長グループの俺が持っては刀が泣く。一刀両、お前が持ってやれ」
「先輩……」
「本当に良い刀は持ち主を選ぶ。もしそれでお前にその刀を持つ資格が無かったのなら、刀は勝手にお前の手から離れてゆく。そうでなければ、刀は『お前を選んだ』という事だ」
「……分かりました」
　一刀両は頷き、改めてド正義に向き直ると頭を下げた。
「すみません、会長。我儘を言いました」
「いや……その謙虚さこそ、この刀を持つ者に必要なものだ」
　そう言うとド正義は刀を差しだした。横の赤蝮が手を添え、刀を丁度良い位置に持ってゆく。
「……一刀両断、『福本剣』お受け致します」
　一刀両は両手で恭しく「福本剣」を受け取った。翔一郎が柔らかい拍手を送ると、周囲の皆も――互いの身体を貪るのに両手を使っている鏡子とアズライール以外は――拍手を送った。

拍手が収まるのを待ち、ド正義は言った。
「作戦開始は明日の午前４時、夜明け前に仕掛ける！　それまでは各自、英気を養ってくれ」
「了解致しました。ド正義殿は職員棟に戻られるのですかな？」
「いや、ここに残る。駒沢君の『Ｉ．Ｚ．Ｋ』は今回の作戦において鏡子くんと並ぶ重要な要（かなめ）だ。余計な消耗はさせたくない。なので赤蝮君、一刀両君、すまないが君たちも翌朝までここで休んでくれたまえ。アズライール君は……」
「ああんっ！　お姉さまっ、お姉さまぁっ！」
「……言う必要も無さそうだな」
声の昂りだけで大凡を察し、ド正義は杖をつきつつ今度は邪賢王たちの方へと向かった。海我と美術部繋がりだからか、両性院もそちらに居るようだ。
「すまない、簡単に手渡しで済ませられるものでも無かったのでな。時間と場所をお借りした」
「構わんわい」
そう答える邪賢王の足元には天音沙希の絵が置かれていた。全裸で十字架めいた物に張り付けられているようだ。その近くに座る長谷部と３人の〝転校生〟も確認できる。
「何か『絵』に動きはあったか？」
「特にねえな。長谷部が〝転校生〟の情報源になっているとしたら、あちらさんはまだ生徒会と番長グループが殺し合うと思ってるはずだ。それで潰し合って消耗するのを待ってるんじゃねえかな」
ド正義の問いかけに海我はそう答えつつ絵の中の長谷部をつついた。何があったのか、やけにしょぼくれているようだ。
それにしても大した能力だ。目の見えない〝ふり〟をしているためリアルタイムで実物の絵を見てはいないが、ド正義は素直にそう思った。一度対象の絵を完成させてしまえば、絵が変化するまでの時間差こそあれ遠距離だろうとトレースできてしまうのだから。
「……？」
ふと、ド正義はある事に思い至った。

「ヴァーミリオン君、君の能力は『誰でも』絵に描けさえすれば対象になるのか？」
「あんまり他人に教えたくねェんだけどなぁ……まあ、そうだ。絵のクオリティによって更新速度は変わるが、一度絵になった相手は誰でも、どの時間帯でも『その状態』の絵になる。風呂に入ってようが、寝ていようがな」
「ちょ、先輩！　って事は沙希の『そういう所』も全部見ていたって事ですか!?」
「見てねえよ！」
　ちなみに海我のこの返答は嘘である。実際は沙希の入浴シーンやあどけない寝顔で性欲を発散させていたのだが、それを正直に言えば確実に海我は両性院に殺されるだろう。
　その海我の返答に、ド正義は満足そうに頷いた。
「成程……では、『校長』の絵を描く事も可能か？」
「……なるほど、その手があったわい！」
　ド正義の言葉に邪賢王は膝を打った。その言葉を受け、海我も腕を組み考える。
「出来る……と思うぜ。校長なら確か、希望崎学園のパンフレットやらホームページやらで顔写真を載せていた筈だ。それを模写すれば……」
「すぐに頼めるか？」
「おうよ。画材がロクに無えからちょっとクオリティは落ちるかもしれねえが、待っててくれ！　両性院、俺は画材をかき集めるから、お前は校長の画像を携帯で探してくれ。全身像があればベストだが、胸から上だけでもいい！」
「わ、分かりました！」
　そう言うが早いか海我は木箱の山に向かい、ゴミの中から画材を探し始めた。指示を振られた両性院も慌てて携帯を立ち上げる。
　〝転校生〟対策が最優先とはいえ、この戦いの本番は校長とその勢力が本格的に動き出してからである。やらねばならない事は余りにも多い。

ド正義はこの戦いの先に思いを馳せつつ、杖を強く握った。

第十五話　職員棟の上と下で

職員棟・地下シェルター。

１９９２年に希望崎学園で勃発した魔人による番長グループと一般人による生徒会との、１８０人もの死者を出した壮絶な戦争により学内の施設のほぼ全てが破壊された際、教職員の安全を確保するために新校舎建築に合わせて建造された大型シェルターである。核戦争にも耐えうる堅牢な構造と十二分に用意された糧食により、外部から遮断された状態で最長一年の生活が可能となっている。

その居住区にしても避難所めいた大部屋ではない。女性教員のプライバシーへの配慮やＶＩＰの避難も想定された内部は個室化されており、共有のラウンジもあるが食料の補給などの場合を除いて部屋から出る必要は無いように設計されている。

「……ふぅ」

その無人の廊下を歩く、小柄な女性がひとり。

月読零華は腕時計に眼をやりつつ、早足でシェルターの出口に立った。ＩＤカードを通すと厚い鉄扉が重々しく動く。

「遅い、予定時間を二分過ぎているぞ」

「す、すみません隊長！　その、神輿のかけ声が、いえ！　申し訳ありませんでした！」

シェルターを開けた先で直立不動の姿勢で並ぶ魔人小隊の隊員たち。彼女らより一歩前に立っていた出鯉に零華は静かに言った。緊張しつつ出鯉が何か言おうとしたが、それを引っ込めて敬礼で返す。

出鯉も女性としては決して大柄な方ではないが、それでも零華に比べると頭一つ大きい。しかし、魔人小隊で積み重ねてきた経験と実戦による重みだろうか、零華から感じる威圧感を出鯉は確かに感じていた。

「まあいい。まだ上ではドンパチも始まっていない。ここに来るまでで、何か報告事項は？」

そこまで遅刻について引っ張るつもりもなかったのだろう。零華は早々に話を切り替え出鯉に尋ねた。

「は、それなのですが……イズミノ？」
「はい」
聞かれた出鯉は首をひねりつつ後方に並ぶ中のイズミノを呼んだ。魔法瓶を片手にイズミノが進み出る。
彼女の能力「リクィド・スフィア」については当然ながら零華も把握している。零華はイズミノに言った。
「何か『リクィド・スフィア』に反応があったのか？」
「はい隊長、これを見て頂いて良いでしょうか」
そう言うとイズミノは魔法瓶の蓋を外し、そこに水を注すと唾液を垂らした。
唾液による波紋がレーダーのように波打つと、そこに幾つかの不自然な水の跳ねが起きる。彼女の能力で感知された「能力発動中の魔人」の反応だ。中央部に幾つかと、遠く離れた位置に数か所の反応。
「中央の反応はおそらくこの上……生徒会の誰かが能力を使っているものと思われます」
現在の彼女らが居る位置は職員棟の地下、生徒会が会長室を中心に陣を張る教員棟三階の真下である。怨み崎Ｄｅａｔｈ子のような自動発動の能力者もいるため、それが反応に引っかかっている格好だ。
ハルマゲドンが既に始まり学内が閉鎖状況にある今、この敷地内に居るのは彼女ら以外では生徒会と番長グループだけの筈である。しかし――
「……番長小屋とは位置が違うな」
「はい。番長側の別の作戦行動かとも思ったのですが、それにしては職員棟から距離が離れすぎています」
その波紋を見つつ零華が言った。番長グループの拠点である番長小屋は職員棟から真東に数ｋｍのところに位置する。確かにそこにも反応があるが、それとは別の位置、南に２㎞ほどずれた位置にひとつ別の反応が出ている。
「この位置は……『旧校舎』だな」
「旧校舎？」
「かつての学内抗争で破壊され、放棄された建物だ。特に秘匿された

物資などもなく、戦略的価値は低い」
　確かに番長グループが動いているにしては妙な位置である。零華はイズミノに尋ねた。
「この反応に動きは？」
「ありません。特に動きは見せず、能力についても常時発動させている訳ではないようで、時々反応が出るような状態です」
「そうか。だとすると……」
　零華は幾つかの可能性を考える。
　番長側、もしくは生徒会側の伏兵？　否、守りに適した状況を捨てて生徒会側から攻める可能性は低い。かといって番長側が兵を潜めるには不可解な場所だ。
　何らかの第三勢力の介入？　否、学園自治法で定められている学内抗争の上に「単なる学生同士の喧嘩」に他組織がわざわざ介入するメリットがあるとは思えない。
　ならば――
『ハルマゲドン開始前に学外に出損ねた魔人生徒が、能力を使いつつ終了まで隠れようとしている』……といったところか」
　よくよく不運な生徒だ。零華はそう思いつつ言った。
「ｅｓ」
「はい！」
「適当なのを二名連れて旧校舎へ向かえ。そこに隠れている生徒が一名、あるいは数名居るはずだ」
「了解しました。発見時の対応は？」
「殺せ。このハルマゲドンに参加をしている〝当事者の魔人〟たちは本意、不本意関係なく全員死んで貰わねばならん」
　眉ひとつ動かさず零華は言った。自分たちが介入している事自体が「学園自治法」に対しての重大な違反である。それを知る外部の者が居てはならない。
「はい、では行って参ります！」
　ｅｓはやけにテンション高く答えた。零華は与り知らぬ所であったが、先ほどの大きなクワガタがまた森に居るかもという気持ちも

あったのだろう。

――魔人小隊。彼女らが〝転校生〟の存在と介入を知るのは、このｅｓがクワガタに喰われて死ぬ数分前からである。

ダンゲロス／ＩＦ　第十五話　職員棟の上と下で

「会長、今晩は〝番長小屋〟に残るって。赤蝮先輩や一刀両ちゃんも」
「そう……だ、大丈夫かしら……？」
職員棟三階、第二保健室。室内の整理を行いつつ言う絶子の言葉に、Ｄｅａｔｈ子は寝たままのｘｘの布団を直しつつ言った。
敷地の広さに加えて魔人による被害が絶えない希望崎学園には幾つかの保健室が用意されている。とはいえハルマゲドン中は養護教員も避難しているため、現在は生徒会が貸し切りの救護室として使っている状態だ。
「……まだ、起きないわね」
Ｄｅａｔｈ子はそう言いつつｘｘの寝顔を見た。元々骨と皮ばかりの即身仏めいた容貌のｘｘだが、それが土気色で眼を閉じていると本当に死んでいるようにも見える。時折胸が上下する事で、ようやく呼吸していると分かる程だ。
既に出血が止まってから数日が過ぎている。一応は魔人という事もあり肉体的には回復しており、あとは精神的な覚醒を待つだけらしい。しかし――それが何時になるかは、本人次第だという。
今まで生徒会の防犯カメラを含む電脳系のセキュリティはｘｘが独りで全て賄っていた。彼がこのような状態である現在、生徒会の有志が監視役を務めているが――
「やっぱり、不安だよね」
絶子も素直にそう感じていた。
一日の大半を電算室で籠りきりで過ごし、掃除の時くらいしか顔を合わせない先輩ではある。しかしながらこういう時になって改めてｘｘが生徒会の屋台骨を裏から支えていた事が絶子にも理解できた。

「少しは起きたりしないのかしら……？」
「そんな、寝ているだけって訳じゃないんだから」
　Ｄｅａｔｈ子の言葉に絶子がツッコミを入れた瞬間、
「!?」
「ひゃっ!?」
「きゃあっ！」
　ベッド上のｘｘが突然に目を見開いた。そのままバネ仕掛けのように体を起こす。
「……！　……!?」
　ｘｘはぎょろぎょろと眼を動かし、そこで初めて自分を見ている絶子とＤｅａｔｈ子に気付いたようだった。何かを言おうとしているのか、ぱくぱくと口を開閉させる。
「オ……！　ア……！」
　意識に肉体がついていけてないのだろう。声にもならない音を発しつつ、ｘｘは緩慢な動作で自身の首筋を指した。
「な、何を言ってるの、ｘｘ先輩……？」
「……そうか！」
　オロオロとするばかりのＤｅａｔｈ子に対し、こういう状況で空気を読む事に長けている絶子がｘｘの動作の意味を察した。自身のポケットを探り、携帯を取り出す。
「あとは、ええっと……あー、これ充電専用のやつ！　Ｄｅａｔｈ子、携帯の通信ケーブル持ってる!?」
「え!?　あ、あるわ。ちょっと待って」
　保健室の隅に置いていた鞄を慌てつつもＤｅａｔｈ子は探り、そこから携帯用のケーブルを見つけると絶子に渡した。
「……！」
　ｘｘの瞳が一層大きく開かれ、指で首筋に埋め込まれている端子を指す。絶子はｘｘの背後に回り込み、対応している端子にケーブルを差し込み、反対側を自身の携帯に差し込んだ。
【オイ！　歪み崎、俺は何日寝てた!?　今の状況はどうなってる!?】
　途端に、絶子の携帯から合成音声によるｘｘの声が飛び出してき

た。機械的な音声だが、そこからでもｘｘの緊張が伝わってくる。絶子は何とか落ち着かせようとゆっくりと答えた。
「落ち着いてください先輩。ええっと、今日は９月１０日で、ハルマゲドンの初日です」
【……!?　畜生、出遅れた！　歪み崎、怨み崎！　俺の身体を電算室に運んでくれ！】
「む、無茶です先輩……ま、まだ、起きたばかりなのに……」
【ンな事言ってる場合か！　ド正義はどうした!?】
「ド、ド正義会長は〝転校生〟対策で番長小屋に……」
【〝転校生〟だァ!?　お、うわっ!?】
　Ｄｅａｔｈ子の言葉に合成音声が裏返る。緩慢な動作でｘｘは自分で身体を起こし立ち上がろうとしているようだが、元々の貧弱な身体に加えて一週間ほど寝たきりだった故にその肉体は弱り切っている。体を支えようとしていた腕がつるんと滑り、そのままｘｘの身体はベッドから転がり落ちた。強く引っ張られたケーブルから携帯が外れないように身を近づけ、彼の身体を起こそうとしつつ絶子が言った。
「だから無茶ですって、先輩！　今は生徒会の他のメンバーが先輩の代わりに頑張ってますから、まだ寝ていてください」
【痛たたた……あのなぁ、俺の代わりが完全に出来る奴がいる訳ねえだろうが！　俺の勘じゃ、〝敵〟はとっくに入ってきてる。時間がねえ！】
「……!?」
　当然ながら監視役メンバーには不審なものを発見した場合、即座に報告と共有を行うように指示がされている。しかし、現時点でそういった報告はない。
　未だに反応を決めかねている絶子に、ｘｘは再度言った。
【頼む、歪み崎！　〝転校生〟まで現れたってのに、このまま寝ている訳にはいかねえ……！】
「……まずいと思ったら、すぐに救護室に連れ戻しますからね？　Ｄｅａｔｈ子、担架を用意して」

「わ、分かったわ」
　折り畳み式の担架を二人は組み立てると、ｘｘの骨と皮ばかりの軽い身体をそれに乗せ、前後を持ち上げた。
【すまねえ……運びながらでいい、ここまでの状況を教えてくれ。とりあえずは〝転校生〟について頼む】
「分かりました。その、ハルマゲドン開始前の会議中に番長グループから電話があって……」
【番長グループ？】
「ああ、そういえば先輩が運ばれたのはそれ以前でしたよね。ド正義会長が番長小屋に行ってですね……」
　扉を開けるのに少し苦労しつつ、絶子達はｘｘを運び始めた。電算室は同じ三階にあるが、いかんせん希望崎学園は教室間だけでも不必要なレベルで距離を備えて設計されており、彼を運びながらでは時間がかかりそうであった。
　その時間を埋めるように絶子は歩きつつｘｘにここまでの経緯を説明した。ド正義が自身の目を犠牲にして番長グループとの協力関係を取り付けたこと、ハルマゲドン直前になって去年のミス・ダンゲロスである天音沙希が長谷部と謎の協力者たちによって誘拐されたこと、そしてその協力者は〝転校生〟である可能性が極めて高く、その対策のためにド正義や赤蝮、一刀両、アズライールらが職員棟を密かに離れていること等を。
【〝転校生〟三人か……随分と面倒なことになってきやがったな】
「対〝転校生〟作戦は明日の早朝に実行するそうです。それまでは私たちは守りを固めて、会長たちが帰ってくるのを待っているようにと」
【分かった、それだけ聞けたら……痛たたたた！】
　担架上のｘｘが呻いた。思わず足を止め、絶子が尋ねた。
「だ、大丈夫ですか、先輩!?」
【ああ畜生、頭の中でインド象が踊ってやがる！　ま、まあ……大丈夫だ】
　それは全然大丈夫ではないのではないか、絶子はそう思ったが言え

なかった。既に電算室は近い。ここで救護室に戻そうとしても、彼は這ってでも行こうとするだろう。
一旦担架をゆっくりと置き、電算室の扉を開く。残暑の気配の残る廊下に冷たい空気が流れ込んでくる。
中では数名の生徒会メンバーがＰＣを前に監視を行っていた。絶子は彼らに状況を説明すると、ｘｘを室内に運び込んだ。
「着きましたよ、先輩」
【あーあー、勝手に位置を変えやがって。おーい、キーボード外して、机どけてくれ！】
言われるがままにキーボードをＰＣから外し、机を動かして部屋の中央に大きなスペースを作る。担架から降ろされたｘｘはＤｅａｔｈ子たちの手を借りつつ、そのスペースで胡坐をかいた。
【よし、回線を全部俺の首に差し込んでくれ】
ぷすぷすとｘｘの首筋に埋め込まれた端子にケーブルを差してゆく。最後にＤｅａｔｈ子の携帯ケーブルを抜き、そこにも差し込む。
【歪み崎、怨み崎、ありがとよ。もういいぜ】
「そうはいきません。先輩の調子が悪くなったら、すぐ運ばないといけませんから」
【……真面目だねェ】
モニターに表示されるｘｘの言葉に絶子が首を横に振る。
【さて……と】
ｘｘは一息つくと、一週間ぶりの電脳世界へのダイブを試みた。
【ぐっ……!?】
頭の中に幾つもの視界が展開してゆく。同時にｘｘは後頭部に強い痛みを感じた。分かってはいたがやはり本調子には程遠い。見るだけならば何とかいけるが、積極的なハッキングや攻撃能力「インターネット殺人事件」を使うのは危険か。
痛みを堪えつつ、ｘｘはハルマゲドン開始前からの防犯カメラの映像を走査してゆく。絶子の話では〝転校生〟は旧校舎を拠点にしているようだが、十数年前に破棄された場所だけにあの周辺には防犯カメラは無い。彼が探しているのは、このハルマゲドン開始のタイミン

グに合わせて侵入してきている筈の政府の部隊である。
【大橋からの侵入者……なし。周辺の海からの上陸……なし】
学園側からのカメラでは、本土側の状況は僅かにしか確認できない。周辺警戒のための魔人警察が展開しているようだが、その中から橋を渡ろうとしている警官もいないようだ。
【いや……いる筈だ】
ｘｘもかつては電脳犯罪者として暴れまわったサイバーテロリストである。その経験則が彼に警戒を促していた。間違いなく、〝敵〟は何らかの方法で潜入してきている。
走査を行いつつ、今度はｘｘはド正義の携帯に発信を送った。自身の回復を伝えるためである。
数度のコールの後、電脳世界のｘｘにド正義の声が聞こえてきた。
「ｘｘ君、大丈夫なのか!?」
【完全復活……とはいかねえが、まあ、調べものくらいは出来るって感じだな。今、校長の手勢が侵入(はい)って来てねえか確認しているところだ。まだ見つからねえが、おそらくは……】
「そうか、それなら……ん？　ｘｘ君、ちょっと待ってくれ。替わってほしいそうだ」
どうやら、ド正義は誰かに電話を替わるよう言われたようだ。数秒の間の後、聞き慣れない声が飛んできた。
「あー、聞こえるか？　こちら、番長グループのヴァーミリオン海我だ」
【ヴァーミリオン？　美術部の部長が何でそんなトコに居るんだ？　って言うかお前、魔人だったのかよ？】
「まあ、その話は後だ。ｘｘ、あんたの手を借りたい」
意外に思う間もなく、ｘｘの前に画像が送られてきた。海我が描いた絵のようだ。そこには、何かの建物内で話をする校長と、その部下と思われる軍装の女性が描かれていた。
【おいヴァーミリオン、こりゃ何だ？】
「俺の能力は『ファンクション・ファイブ』。絵に描いた人物の行動をトレースして、リアルタイムで絵を変化させる能力だ」

【……！　って事は】
「ああ、多少のタイムラグはあるが、少なくともここ数分前の校長の姿だ」
　海我の説明に、ｘｘは改めて画像を確認した。
「だが、俺の能力はあくまで『個人』をトレースする能力で、周辺の背景までは詳細に捉えられない。ｘｘ、あんたなら学内の構造は把握してるよな？　断片的だが、そこから校長の位置を割り出せないか？」
　そう言われ、ｘｘは更に画像を拡大する。少なくとも教室が並ぶ一般的な場所ではない。ならば――
【いけるぜ。時間はかけねえ。絵に変化があったらすぐに送ってくれ】
　どうやって侵入したのかは分からないが、やはり彼女らは入り込んでいる。学園内にはプライバシーを理由にカメラが設置されていない場所もあるが、それでも――
「……何だこりゃあ!?」
　その時、電話の向こうから海我の驚愕の声が聞こえた。
【おい、どうした!?】
「い、いや、それが……絵が、消えた！」

　同時刻、番長小屋。
「そんな、絵が!?」
　通話する海我の様子を伺っていた両性院は驚きの声をあげた。今の今までカンバスに描かれていた校長の絵が突然消え、真っ白に戻ったのだ。
「ヴァーミリオン、こりゃどういう事じゃ!?」
「わ、分からねえ！　俺もこんな事は初めてで……！」
　思わず尋ねてくる邪賢王に、海我は戸惑いつつ答えた。混乱しつつも、この原因を考える。
　彼の「ファンクション・ファイブ」のトレースは、更新時間が絵のクオリティに左右されるという面はあるが追尾性においては相当なものである。仮に対象が世界の裏側で死んだとしても、その死体は

ちゃんと描かれる。
また、変装したとしても変装の様子が描かれ、隠す事はできない。
残る可能性としては――馬鹿げた話ではあるが、魔人の能力と考えれば、あり得ない話ではない。
「……有り得るとしたら、対象が文字通り『この世からいなくなった』って事だ。死んだとかじゃなく、それこそ存在自体が消えでもしなければ、俺の能力が解除される事はねえ」
そしてこれは同時に海我の能力が半分殺されたという事でもある。既に『ファンクション・ファイブ』は一度解除されている。再度彼女の絵を描けばトレースできるかもしれないが、いつ消えるか分からない以上、完全な追尾は不可能だ。
【……成程な。ってえ事は、少なくともあちらさんには存在消失能力者が居るって事か】

再び電算室。
ぴくりとも動かず胡坐をかいたままのｘｘの表情は見る限り全く変わっていない。しかし、その内面でｘｘは素早く思考を張り巡らせていた。
【畜生、となると……完全な迎撃も不可能って事か】
そもそも存在に気付けないのだ。当然何らかの制約はあるだろうが、それでも何人かの彼女らがこちらの内部深くに入り込めるのは間違いないだろう。
ｘｘは部屋の隅でこちらの容体を見守る絶子たちに言った。
【おい、歪み崎。フジオカを呼んできてくれねえか？】
「フジオカ先輩……ですか？」
【ああ。危険だが、あいつの手が必要になる】
そうメッセージを表示させ、電脳世界のｘｘは再び絵の解析に挑み始めた。

第十六話　「鵺野蛾太郎」

「……イヤァ、それは確かに君の友も悪いが、君にも歩み寄る余地がある」
「……」
「確かにその通りだ。だが考えてみ給え？　君が生まれる前からその樹は有ったのだ。その頃の『その樹の樹液を吸う権利』は誰にあったのかね？」
「……」
「そうだろう？　君だって永遠に生きられる訳でもない。ならば如何に美味い樹液であったとしても、それは友と分かち合うべきだと小生は思うがね」
「……」
「おお、チヨ。そういえばお前も似たような……」
　深夜の旧校舎、鵺野は真剣な表情で眼前の机に停まる一匹のクワガタに語りかけていた。よく見れば、そのクワガタの後ろに何匹かのクワガタが並んでいる。
　そのシュールな光景を見つつユキミは黒鈴に言った。
「……森のクワガタ達に人（？）生相談を受けているんだそうだ」
「うん……何となく分かってきた」
　眠そうな眼を更に眠そうにしつつ黒鈴が答える。〝転校生〟と言っても眠くもなれば腹も減る。時刻は既に零時を過ぎた。彼女もかなり眠くなってきているようだ。
「黒鈴、魔人学生に動きがあるとしてもおそらくは早朝からだ。今は寝ておけ」
「ふぁぁ……でも、ユキミは？」
「俺は大丈夫だ。お前が起きたら少し休むさ」
「そう……それじゃ、おねが……すぅ」
　既に眠りかけだったのだろう。言葉を終える前に黒鈴は寝息を立て始めた。ユキミは窓に近づき、音もなくカーテンを外すと彼女にかけた。粗末なカーテンだが、そのまま寝るよりはマシであろう。

「……む？」
その時、窓から一匹のクワガタが飛んできた。鵺野がそちらに顔を向ける。
「……」
「……ほほう」
鵺野の目が細まる。人生相談――この場合、クワガタ生相談と言うべきなのだろうが――ではない気配を感じ、ユキミは鵺野に尋ねた。
「ヌガーさん、何かあったんですか？」
「校舎側から武装した三人の女性がまっすぐ向かってきているそうだ。魔人小隊で間違いあるまい」
「……！」
さらりと答える鵺野の言葉に、ユキミは表情を引き締めた。
彼女らが迷わず向かってくるということ、それは魔人小隊の索敵能力者によって既に自分たちの存在が知られているという事だ。
しかし、鵺野は涼しい表情で言葉を続けた。
「ただ、どうも連中は我々が〝転校生〟である事までは気付いていないようだ……すまない、相談の続きはひと仕事終えてから聞かせてくれたまえ」
そう言うと鵺野は眼前のクワガタに頭を下げ、ひょいと椅子から立ち上がった。慌ててユキミが言う。
「ヌガーさん、自分が行きます」
「ユキミ、君の能力の本領は黒鈴にふさわしい『餌』が見つかってからだ。ひとまずは小生に行かせてくれたまえ」
「しかし……」
「退くべきところは弁えている。操作系や精神系の能力者であれば迷わず下がるさ。それに……」
尚も言い募ろうとするユキミに、鵺野は微笑むと腰に吊した箱を撫でた。
「森のクワガタたちに触発されたのか、小生の友らも随分と気炎を上げていてね。少し〝遊ばせる〟としよう」

ダンゲロス／ＩＦ　第十六話　「鵺野蛾太郎」

深夜の森を駆ける三つの影。素早く動き、動きを止め、周囲を伺い、再び動く。

「旧校舎まであと５００ｍ、このまま展開しつつ校舎まで」

「了解」

「了解」

ｅｓの指示に随行する二人の隊員が答える。彼女らはｅｓが文字通り適当に選んだ小隊員で、其々の能力は「銃口を上に向けるだけで再装填（リロード）できる」能力と「ちょっとした物陰に隠れるだけで弾丸が当たらなくなる」能力の持ち主だ。

「（名前、何だったっけ……まあいいや）ここからはコードで呼ぶ、お前がＡ、お前はＢ、私はＣで呼称しろ」

「了解」

二人の隊員は揃って応えた。ｅｓはレシーバーに手を添えると本隊へと通信を開く。

「こちらｅｓ、旧校舎まであと５００。対象の動きは？」

『明滅しているから断定はできないが、数分前に確認した時点では動きなし』

通信機越しのイズミノの声にｅｓは頷く。零華の推測通り、旧校舎に籠っている迷子の生徒か。

とはいえ、相手も魔人である。油断をすれば思わぬ反撃を食らうのが魔人同士の戦いだ。ｅｓら魔人小隊メンバーはそれを無数の実戦とシミュレートで経験している。

そう言う間に距離は残り４００ｍ、月明りだけが照らす森をｅｓらは進み、止まり、身を隠した。

「そろそろ旧校舎が見えてくる。校舎到着後は分散して相手の逃げ場を奪いつつ包囲」

「了解」

「了かはぎょっ」

固いものを貫くような破砕音と共に、Ａの身体ががくんと崩れ落ち

た。
「A？」
　ｅｓは彼女の状態を確認した。見れば、彼女の被っていたヘルメットに大きな穴が開いており、そこから砕けた頭蓋の破片が見える。
　どぼり、とAの足元に大量の血が流れ落ち、彼女の脚の間から血まみれの黒い物体が飛び出してきた。
「げ……」
　その黒い物質は翅を広げ、再び空中へと舞い上がった。
「迎撃態勢ーっ！」
　ｅｓがそう言う前にBは既にアサルトライフルを構え、黒い物質に向けて乱射していた。飛来する銃弾をスイスイと躱し、嘲笑うようにカチカチと顎を鳴らす。
「あれは……!?」
　――クワガタだ！　どういう理屈か分からぬが、対魔人戦闘用に強化されているヘルメットすら貫通する速度と強度を持つクワガタが、Aの脳天から尻穴までを貫いたのである！
　そして、「どういう理屈か分からぬ」という事は、魔人能力という事である。ｅｓは周辺を素早く見回しつつ本隊に通信を送った。
「こちらｅｓ！　襲撃を受け、ええっと、隊員一名が死亡！　強化されたクワガタを操る能力と思われる！」
　結局Aの名前は思い出せなかった。緊張したイズミノの声が返ってくる。
『こちらイズミノ！『リクイド・スフィア』に反応あり！　近い！』
「な!?」
　相手がこちらに近づいてきている？　何故だ？　相手は旧校舎から全く動かないままの、魔人学生だったのではないのか？
　焦燥と混乱でパニックを起こしそうなｅｓの耳に、透き通った声が届いた。
「ふむふむ、どうやら小生たちを完全に把握している訳ではないようだ」

咄嗟に声の方向へと視線を向ける。
そこには、何とも場違いな男が立っていた。まるで大正の書生のような袴姿の――
ｅｓは迷わず引き金を引いた。肉体強化された魔人相手でも致命傷を与え得るように製作された対魔人弾である。一発当たれば重傷、数発着弾すれば即死の筈であった。
しかし――
「……良い判断力だ。言葉が能力のトリガーになる事もある。『まず殺す』という姿勢は非常に正しい。君たちは良い訓練を受けているね」
その銃弾の雨を書生風の男は避ける素振りすら見せず、全弾を正面から食らい――そのまま立っていた。
「しかし、こうして直接攻撃しかしてこないとなると……『精神攻撃系や操作系、あるいは状態異常系の能力者ではない』という事だね。いや、実に都合がいい。アレは小生たちも手を焼くのでねえ」
Ｂが男の背中に銃弾を撃ち込む。しかし同じだ。男は傷ついていないどころか、着弾の衝撃で身を揺らしてすらいない。
ｅｓは眼前の男の正体に勘付き始めていた。魔人小隊の訓練で頭に叩き込まれた緊急時のフローチャートを高速で思い出してゆく。

【作戦行動中の想定外の事態に対して・銃火器無効編】
・作戦行動中に銃が通用しない魔人と遭遇しました。
Ｑ１．本当に銃弾は命中していますか？（幻影・幻覚系の能力の可能性はありませんか？）↓Ａ．はい。命中しています。
↓Ｑ２．対象は命中時に何か所作を行っていますか？（統計上・バリヤー系の能力者の９割は発動時に動作を行います）↓Ａ．いいえ、行っていません。
↓Ｑ３．着弾時、相手の皮膚や装飾に変化はありますか？（肉体強化・及び変質系能力者は多くの場合、皮膚や装飾に変化が表れます）
↓Ａ．いいえ、変化はありません。
↓貴女の前に出現した魔人は〝転校生〟、もしくは其れに準ずる強

力な能力者である可能性が極めて高いと思われます。全力で逃亡し、対〝転校生〟要員に助けを求めましょう（逃亡が困難な場合、情報を漏らさぬように舌を噛み切って自害しましょう）。

「……まさか!?」

その存在自体は教わっていた。過去の断片的な交戦記録を見たこともある。しかし、対魔人戦闘のエキスパートとはいえ情報系能力者であるｅｓが本物の〝転校生〟と遭遇したのはこれが初めてであった。

同時に彼女は思い出してしまう。不意に〝転校生〟と遭遇した場合、過去のケースから算出される生還率は――

「作戦中断、分かれつつ本隊に撤退！　全力で逃げろ！」

「りょ、了解！」

Ｂに指示を出し切るのを待たず、ｅｓは無駄と知りつつも横なぎに銃弾をバラ撒きつつ男に背を向けた。

「そして敵わぬと見れば迷わず撤退を選ぶ……か。見切りの判断も悪くない。君らのようなのが数十人も居るとなると、『この世界』の魔人小隊は中々に手強いようだ」

距離を離している筈なのに、まるで耳元で囁かれているかのように男の声が届く。気休め程度に後方に弾を撃ちつつｅｓは走った。

その後方から迫る翅音あり。クワガタだ！

「ひっ……！」

ｅｓは本能的に身を伏せた。その直上をクワガタのツノが通過する。あと一瞬遅ければ身体のどこかを貫通していただろう。再び身を起こし、走り出す。

少し離れた場所を走るＢにｅｓは視線を向けた。彼女の方にも別のクワガタが迫ってきているようだ。

だが、Ｂが素早く細い木の陰に身を半分隠すとクワガタは彼女の身体を紙一重で掠め、夜の闇に消えた。

更に別のクワガタが飛来、しかしこれもＢの身体には当たらない。彼女の能力「ちょっとした物陰に隠れるだけで弾が当たらなくなる能

力」に依るものだ。
「……ふぅむ。防御系か」
男は小首を傾げると、手元の小石を拾い上げた。
「ならば……これでは？」
そう言うと男は「ひょい」といった風に軽く小石を投げた。
「ぎゃあっ！」
その軽く投げられた筈の石は全く勢いを落とすことなくBが隠れていた木に当たり、そのままあっさりと彼女ごと貫通して彼方へと飛んで行った。
「B！」
叫ぶｅｓは知る由も無かったが、この時に鵺野が行ったのは「木を壊すイメージで投げる」であった。彼女の能力が限定的な防御系能力であると看破した鵺野は、Bを直接狙わずに石を投げたのである。果せるかな、彼女は「木を壊そうとした石」の巻き添えとして死んだのだ。
とはいえ、何故Bが死んだのかを呑気に考察できる状況ではない。ｅｓは必死に逃げつつレシーバーを手に叫んだ。
「こちらｅｓ、現在撤退中！　旧校舎に居たのは魔人生徒じゃない！〝転校せ……」
瞬間、ｅｓの手の甲が深く切り裂かれた。彼女の肉を削ぎ落したクワガタのツノが赤黒く月明りに照らされている。
「うあぁっ！」
堪らずｅｓはレシーバーを手落した。拾い直せば再びクワガタに襲われる。そのまま彼女は逃げる。翅音が近い、一つ、二つ、三つ、四つ。
後方から男の声が響いた。
「ハナ」「ぐあっ!?」
一匹目のクワガタがｅｓの左腕を裂いた。体のバランスを崩しつつ、それでも逃げる。
「キヨ」「ぎいっ！」
二匹目のクワガタがｅｓの右腕を裂いた。両手は既に使えない。

ぶらりと手を下げつつ更に逃げ――
「チヨ」「ぐうっ！」
三匹目のクワガタがｅｓの左脛を裂いた。大きくよろめき、バランスが崩れる。
「フミ」「がぁっ！」
四匹目のクワガタがｅｓの右腿を裂いた。獣めいた叫びと共に四肢から血を流しつつ、ｅｓは転がるように倒れた。
歩み寄る音が聞こえる。手足を懸命に働かせようとしながらも、ｅｓの身体は仰向けになった虫のように動けなかった。
「先程の指示から見るに、君が小生たちの抹殺のために送られた三人のリーダーだね？」
学生帽の下で涼しげに微笑む顔がｅｓを見下ろしていた。整った顔の美青年である。しかし、今のｅｓには死神の顔以外の何物でもない。
「……殺せ」
眼を閉じ、ｅｓは言った。フローチャートには自害を薦める文章があったが、それを彼女は良しとは思わなかった。ここで自分が少し時間を稼げれば、本隊が〝転校生〟対策のために使える時間が少しでも増えるのだ。あえて心臓を狙わずに手足を傷つけて無力化させたのは、自分から情報を引き出すため。その程度は容易に理解できた。
果たして彼女の予想通り、男は言った。
「いや、まあ、殺すのは殺すのだけどね。折角ならば死ぬ前に色々と教えて欲しいのだよ。死出の旅路に立てる義理もあるまい？」
「……」
「言っておくが、放っておいても君は失血死は免れない。救援が駆けつけているとしても、間に合う距離ではないだろう」
「……？」
「ラージ・ギール」で隠れて侵入してきた自分たちの事が把握されている。この男はどこまで自分たちの事を知っているのだ？
痛みの中でｅｓは怪訝に思った。男は言葉を続ける。
「さて……君たちは何人居るのかね？」

「……」
「ここへ潜入してきた目的は？」
「……」
「では、君の能力は？」
「……」
「……ふぅむ。困ったものだねえ」
　男は心から困ったように頭を掻いた。
「小生は手加減は苦手なのだよ。この場合、尋問、ないし拷問をすべきなのだろうが……君を一撃で殺しては意味がない。さて、どうしたものか……ふむ？」
　男はふと、周囲に視線を向けた。仲間だろうか？　それにしては辺りに自分たち以外の人影は無い。
　だが、男はまるで間近に誰かいるかのように頷いた。
「ふむ、ふむ……いやあ、そこまで諸兄らに頼むのは気が引ける……む、そうかね？　まあ、助かりはするが……」
　少し揉めたようだが、最終的には姿なき提案者の意見を男は受け入れたようだ。身を屈ませ、ｅｓの身体に触れる。
「お待たせしたね。小生の〝仲間〟が協力を申し出てくれたので、これから拷問させていただく。出来れば、その前に話をしてくれると小生にも君にも良いと思うのだが……」
「……」
「……で、あろうね」
「!?」
　ｅｓの沈黙を予想していたように男は頷き、紙を破るようにｅｓの服を破り始めた。
　強靭な繊維で作られた防弾ジャケットがあっさりと引き裂かれ、その内側の下着も指一本であっさりと破かれる。瞬く間にｅｓは一糸纏わぬ姿で草むらに仰向けの状態にさせられた。両手足の傷から血はどくどくと溢れ、草や地を汚す。男の言う通り、このまま失血死は免れまい。ならばその死ぬ瞬間まで、どんな凌辱を受けようとも沈黙を保つまでだ。

そう決意するｅａを無感情に見下ろしつつ、男は言った。
「どうも勘違いしているようだね……おそらく、君の予想しているような事にはならないだろう。君が余程特殊な性癖を持ち合わせていたなら、話は別だが」
その時、ｅｓは男以外の気配を感じた。カサカサと草を分け、何かが自分に接近してきている。それも多数。ｅｓは首を傾け、周囲を見ようとした。
「……!?」
無数の目が自分を見ている。それにｅｓは気付いた。無機質な小さな瞳が、じわじわと寄って来る。
「な!?」
それは、クワガタだった。
一匹二匹ではない。少なくとも数十匹のクワガタが自分を包囲している。視界に入らない場所にも接近してきているとすれば、あるいは百匹以上。それが全裸の自分に近寄ってきていた。
「ヒッ……!」
咽の奥から意図しない悲鳴が漏れる。その様子を見下ろしつつ、淡々と男は言った。
「クワガタムシ、特にオオクワガタの大顎というのは極めて強靭でね。更にこの森のクワガタは魔人の気にでも当てられたのか、更に輪をかけて強い。人間の皮膚程度なら容易に貫く程にね」
「え……あ……!」
ぷつり、と最初のクワガタの大顎の先端がｅｓの肌に触れた。やがてそれは二匹目、三匹目と、小さな痛みが無数に身体に加えられてゆく。
「ひっ、あっ……!」
「小生は〝さでいすてぃっく〟な性癖は持ち合わせていなくてね。正直痛ましいと思うのだよ。どうだろうか？」
男のこの言葉は、最終的に殺す相手とはいえ最低限の気遣いなのだろう。それは理解できたが、ｅｓの黙秘の意志は「この時点」ではまだ抵抗を考える程度の強度を残してしまっていた。

数秒後、ｅｓは自分の決意を猛烈に後悔する事になる。
「……！」
「……そうかね。ならば仕方ない」
男は首を横に振ると、手を掲げ、指を鳴らした。
「あぎゃあっ！」
抑えようもない絶叫がｅｓの口から迸った。
「痛い」という情報に埋め尽くされた脳の中で、何が起きたのかｅｓは辛うじて理解した。自分の身体に大顎のツノを引っかけていたクワガタが、一斉に噛んだのだ。
その痛みを例えるならば「全身の肌に無数の錆びたホチキスを当てられ、一斉に針を立てられた痛み」とでも言えば良いだろうか。そんな経験をした事がないので、それもあくまでｅｓのイメージなのだが。
「さて、もう一度」
「ひぎゃあっ！」
指がもう一度鳴る。聞こえる筈のない筋線維を噛み切られる音を、ｅｓは確かに聞いた。
クワガタがゆっくりとツノを外す。全身から血を流しつつ、ｅｓは自分が激痛の中で死にかけている事を自覚した。男の顔が近づく。
「……どうかね？　話をしてくれるつもりになっただろうか？」
「ア……アァ……」
ｅｓの口から苦悶の声が漏れる。男は首を横に振った。
「そうか……それは残念だ。君から情報を得るのは諦めるとしよう。君は〝仲間〟の提案通りに膣内からクワガタに胎内を食い破られて悶死する事になるが、そこは我慢してくれたまえ」
そう言うと、男は音もなく立ち上がりｅｓに背を向けた。思わずｅｓの唇が動く。
「ま……待って……」
男の足が止まった。振り向き、確認するように言う。
「……制止したという事は、小生に何か話があるという解釈で良いのかね？」

「あ……！」
「言っておくが……小生ならば、君に痛みを感じさせずに〝眠らせる〟事ができる」
その言葉に嘘は無いだろう。そして――その言葉が、今のｅｓには果てしなく甘美に聞こえた。
震える声で、ｅｓは懇願した。
「お、お願い……せめて、普通に、殺して……」
「……良いだろう。しかし、それは小生の問いに君が教えてくれればだ」
男は優しげに微笑み、ｅｓに再び尋ねた。
「さて……君の命が消える前に、まずは君たちの目的から聞かせて貰おうか？」

第十七話　出陣

「今、戻った」
「お疲れ様でした。ヌガーさん。首尾はどうでしたか？」
「まあ、当たりも有ればハズレも有り……と言ったところだね」
旧校舎の教室にふらりと戻ってきた鵺野に、ユキミが話しかける。
鵺野は手にしたボールめいた何かを机に置いた。それが人間の生首である事に気付いた長谷部が悲鳴をあげる。
「ひっ、ひいいっ！」
「まず黒鈴には悪いが、『餌』としては彼女らはハズレだった。ひとつは銃の自動装填能力、ひとつは攻撃回避に関する防御能力。リーダーのこの子はと期待したのだが、『生首を一万回リフティングすることで対象の死亡５分前までの記憶を走査できる』という情報系能力だった」
長谷部を完全に無視しつつ鵺野は言葉を続ける。机に置かれたｅｓの首は血まみれで、しかし何かに安心するかのように死に顔は安らかだった。
「確かにそれは黒鈴には無意味ですね。一万回のリフティングとか、彼女には無理ですから……しかしそれなら、何故首を持ち帰ったのですか？」
「せめてもの弔意だよ。死体はここのクワガタたちが噛み解して隠滅してくれる事になったのだが、折角情報を教えてくれた首まで挽肉状にするのは気が引けた」
こともなげに言いつつ、鵺野はその生首を撫でた。
現在、椅子に座ってカーテンに包まれながら眠る黒鈴の能力は「ＸＹＺ」。対象の脳を完食することにより、所有していた能力を排泄するまでの間だけ使用可能にするコピー能力である。
基本的にコピーできる能力に制限は無いものの（複数の脳を食べても使える能力は最後に食べた一つのみという数的な制限はある）、行動を伴う能力などの効果や効率は黒鈴のそれに依る。例えば「腕をロケットパンチに変える能力」であれば黒鈴は自分の腕を引きちぎって

ロケットパンチにする必要があり、更にそのロケットパンチが身体から離れた状態で食べた脳が排出された場合、腕は千切れたままになってしまうのだ。
その意味において、確かにｅｓの能力はユキミの言う通り無意味であった。如何に無限の攻防力を持つ〝転校生〟でも、一万回のリフティングのように専門的な技術が必要なものは話が別なのだ。
生首から離した手を学帽に添えながら鵺野は言った。
「なかなかにこの世界の魔人小隊は優秀だよ。対〝転校生〟対策を取っていなかったから小生も簡単に殺せたが、判断力や統制のとれた動きはなかなかだった。仮に相手が本腰で〝転校生〟用の能力者を揃えてきたら現状の我々では危ういだろうね」
「我々への対策が用意されていない……という事は、やはり魔人小隊の目的は？」
「ああ、この『はるまげどん』に参加している魔人学生の抹殺。特に生徒会側のリーダーであるド正義卓也という人物が最優先目標だそうだ」
「ド正義？」
その名を聞き、ユキミは少し驚きを浮かべた。まるで遠方で知人と会ったような驚きを。
ふと、部屋の隅で怯える長谷部にユキミは声をかけた。
「長谷部さん、ド正義克也という人物の名前に聞き覚えは？」
「え!?　あ、ああ、そのド正義克也の息子だよ、今の生徒会長は」
「……なるほど」
「全く、親も親で〝学園自治法〟みたいな悪法を通したと思ったら、息子も息子で……」
どうやら憎しみが増すと怯えが減るらしい。ぐちぐちと吐き出される後半の長谷部の愚痴は無視しつつ、ユキミは納得した。その様子に鵺野は少し首を傾げたが、何かを思い出したように頷く。
「……ああ、そういえば言っていたね。確かユキミが〝転校生〟になる前に世話になった人物だったか」
「世話になった、と言えばそうですが……まあ、何というか」

鵺野の言葉をユキミは濁した。話を切り替えるように逆に鵺野に尋ねる。
「それでヌガーさん、他に得られた情報は？」
「現在、学園内に潜入してきている魔人小隊の構成員は全員が女性だそうだ。生徒会の役員に『範囲内の男性限定で即死させる能力』を持つ少女がおり、その対策らしい。また、そのための緊急編成ゆえに小隊員同士でも互いの能力は把握しているとは言い難いようだ」
「男性のみの即死能力……それ、使えそうですね」
「そうだな。発見できれば優先して首を持ち帰るとしよう」
そこまで言うと、鵺野は教室内に停まっていたクワガタ達の前に再び座った。
「……さて、待たせたね。それでは相談の続きといこうか」
「ヌガーさん、魔人小隊への警戒はいいんですか？」
当たり前のようにクワガタ生相談を再開しようとする鵺野に思わずユキミは言った。鵺野は微笑みつつ答える。
「連中は我々への対抗策を持っていない。とはいえ全員の能力が分からない以上、こちらから積極的に攻める理由も無い。相手の探知能力が生きているなら、小生がこうして旧校舎に戻った事も察知しているだろう」
鵺野は言いつつ考える。この条件下で、かつ早急な増援が望めない場合において敵の指揮官が最も適切な判断を下すとすれば――

ダンゲロス／ＩＦ　第十七話　出陣

「……」
「……」
無言で通信機を握り締めたままの月読零華を前に、出鯉舞はどう言葉をかけたものか分からないまま沈黙を保っていた。
職員棟・地下。魔人小隊の待機場所として宛がわれたシェルターの一角は重い静寂に包まれていた。出鯉の耳には、つい先ほどのｅｓの最後の通信「〝転校せ……！」の響きが残っている。

ｅｓの安否を口にする者はいない。煙幕や催涙弾、閃光弾などのショック系兵器を中心とした対〝転校生〟装備を万全にした状態でも、〝転校生〟と不意の遭遇をして生還できる可能性は５割を切る。ましてや通常の対魔人装備で、能力的にも勝ち筋の無いｅｓらが生存している可能性など――

「……て、〝転校生〟です。隊長」

「分かっている」

周囲の気温が数℃下がりそうな程に、零華の声は冷たかった。

正直これ以上は舞としても発言したくはなかったが、階級的に近い阿頼耶識そらは「ラージ・ギール」発動に備えてか瞑想中だし、イズミノはその後の〝転校生〟の動きを追うために能力を発動中だ。零華に何かを申請する役目は自分しかいない。「貧乏くじ引いたなあ」と内心で思いつつも、舞は背筋を伸ばして言った。

「隊長、これは予想外の事態です。対〝転校生〟部隊の増援を要請すべきでは？」

対〝転校生〟部隊とは、魔人小隊の中でも精神系、操作系、概念系、あるいはそういった枠組みすら超えた対人能力を有する、対魔人戦闘のエキスパートの集まりである魔人小隊の中でも更なる少数エリートによって編成された特殊部隊である。その行動目標は〝転校生〟の抹殺だけに絞られ、通常戦闘においては必ずしも最強とは言えないが対〝転校生〟戦においては絶大な効果を発揮する、言ってみれば「メタ対策全振り」の魔人たちだ。

対して現在の「ド正義卓也、及びそのシンパ団体〝生徒会〟の殲滅」を目的とした零華の部隊は「災玉」対策に女性だけで編成され、更に〝転校生〟に対して特別な効果を発揮するような能力者は居ない。その面において、舞の判断は至極妥当と言えた。

しかし、零華は頷きもせずに舞に言った。

「出鯉二曹、我々は何だ？」

そう聞かれ、舞は緊張しつつ答えた。

「は……はっ！　国家防衛組織、対魔人部隊『魔人小隊』であります！」

「今回の任務は何だ？」

「はっ！『テロリスト・ド正義卓也の抹殺、及びシンパ団体である生徒会の殲滅、更に同ハルマゲドンに参加している目撃者となる可能性のある人物の殲滅』であります！」
「その進捗状況は？」
「はっ！　ま、全く進んでおりません！」
「そうだ。お前たちはまだ橋を渡り、私と合流し、その何人かが〝転校生〟に殺された……それだけだ」
　みしり、と零華の手元の通信機が音を立てた。
「……それで『何もできていませんが、〝転校生〟が居たから助けてください』と泣いて助けを斯い、無為に到着を待つつもりか貴様は!?」
「……！」
　零華の剣幕に舞は震え、同時に彼女の言葉を理解した。
　これが子供のお使いであれば、「八百屋に行く途中に猛犬がいた」程度の理由で親に助けを求める事は許されよう。しかし自分たちは日常において命懸けの任務を遂行する事を求められる魔人小隊の隊員であり、それに見合う報酬と待遇を受ける者なのだ。救援を求めるにしても「求める事が許されるタイミング」がある。
　確かに現時点でも救援を求めれば拒否される事は無いだろうが、入念な下準備をした上で作戦開始直後に助けを求めた彼女らには「臆病者」の見えぬ烙印が押される事は間違いない。それは無能者扱いよりも辛いことだ。救援を求めるにしても、せめてド正義卓也の抹殺を果たした後で無ければ上官である神代の前に出せる顔も無い。零華はそう言いたいのだ。
「イズミノ、〝転校生〟のその後の動きは!?」
「〝転校生〟、再び旧校舎に移動して動かなくなりました！」
　零華の問いかけにイズミノは即答する。零華は形良い顎に指を添え、敵の動きの意味を測った。
　〝転校生〟との交戦経験は片手で足りる程度しか無いが、零華も彼らの特徴や行動パターン、〝報酬〟などについては把握している。旧校舎を根城にしているのが〝転校生〟だとすれば、何らかの依頼で動いているのは間違いない。

生徒会、もしくは番長グループが呼び出した？　最初に思いついた可能性を零華は否定した。〝転校生〟召喚についての手順は国家機密レベルのトップシークレットだ。一介の魔人学生の知識や行動範囲やコネクションでは、それこそ生徒自身が都知事レベルのＶＩＰの肉親ででもない限りは「召喚方法を知るための方法の入り口」にまでも辿り着けまい。

かといって国が零華らに内密で〝転校生〟を呼び出したとも考えにくい。そんな行動は彼女らの作戦遂行の障害にしかならない筈だ。

となれば、残る可能性は――全く与り知らぬ第三者が、このハルマゲドンに合わせて呼び出したという事か。

「（全く、厄介な事をしてくれる……！）」

その召喚した人物を発見したならば、全て白状させた上でこの場で思いつく限りの残酷な方法で死んで貰おう。零華はそう思いつつ舞に言った。

「そのまま帰ったという事は、〝転校生〟の狙いは我々ではない。生徒会か番長グループか、もしくはその両方の抹殺を依頼されていると考えるべきだ。その動きと目的を把握する必要がある」

「は、はっ！」

「出鯉二曹！『Ｕ装備』で阿頼耶識二尉を連れ旧校舎へ急行、奴らの動きを探れ」

「わ、私が、ですか!?」

「『ラージ・ギール』ならば相手が〝転校生〟だろうと身を隠す事ができる。手は出すな。報告時は彼らから数ｋｍ離れて行え」

「りょ……了解しました！」

顔を青くしながらも、舞は零華に敬礼を返した。パタパタと装備を整えに向かう彼女の背を視線で追いつつ、零華は周囲の隊員たちに言った。

「本作戦の危険度レベルを最大まで上げる！　装備は対〝転校生〟用のものに変更、連中は銃は効かないが、強い光や轟音には一定の効果が確認されている。突然に遭遇した場合でも落ち着いて対応しろ」

『了解！』

彼女の姿勢に、多少の動揺を見せていた他の隊員たちも襟を正して規律を取り戻す。
その様子に零華は僅かばかりの落ち着きを取り戻し、着ていたコートの胸ポケットからスリムタイプの煙草を取り出すと一本咥え、火を点けた。
部下を死なせてしまった後悔はある。自分があと少し用心をして、まず反応の実態を調査するところから始めていればｅｓらは死ななかった。
だが実際のところそれは難しかったろう。学生同士の殺し合いにわざわざ〝転校生〟を呼び出す馬鹿が居るなど誰が想像するものか。月読零華は常に任務に忠実であり、その遂行に関して犠牲が必要であれば迷わずそれを実行に移すことが出来る非情な軍人であるが――寝食を共にしてきた部下を弔う程度の気持ちはあった。Ｒ・Ｉ・Ｐ（安らかに眠れ）。
深く息を吸い、紫煙を吐きつつ零華は思う。今の自分がすべき事は、奴らの死を『無駄死に』にさせない事だ。

午前三時の番長小屋、電球の弱い光に照らされた室内で毛布に包まって眠る幾つかの影。そのひとつがもぞもぞと身を起こした。
「……ん」
両性院乙女は半分眠った頭で周囲を見回した。座禅を組んだまま眠りにつく邪賢王、椅子に座り、刀を杖のように垂直に立てたまま眠る白金。眼を閉じ、完全に眠っているようだが張り詰めた気配が両性院にも伝わってくる。おそらくは、彼の意識の範囲に入れば即覚醒し、踏み込んだ者を切り裂くだろう。
毛布を体から除け、立ち上がる。作戦前で気が張っているせいか深い眠りに落ちる事はできなかった。眼をしばたたかせつつ両性院は扉の位置を探り、外に出た。９月上旬の残暑の気配を強く残す生温い空気が両性院の肌に触れる。爽やかとはいかないが、それでも番長小屋の中の澱んだ空気よりは幾分かマシだ。
「……誰か起きたのか？」
「会長？」

「その声は……両性院君か」
　扉を開けた先、杖を手にしたド正義が独り立っていた。両性院は彼に尋ねた。
「会長、どうしたんですか？」
「今後の事を考えていたのだが、ちょっと気分転換をしたくなってね。外の空気を吸いにきたんだ。君こそどうしたんだ？　作戦決行まではまだ時間がある筈だが……」
「その……眠れなくて」
　身体が覚醒してゆくにつれ、思考がクリアになってゆく。その中で両性院が思ったのは旧校舎で囚われのままの天音沙希の事だった。あと一時間で、彼女を〝転校生〟から取り戻す戦いが始まるのだ。
　ド正義はそんな両性院の様子を気配で伺うと、逆に尋ねてきた。
「……両性院君、少し質問させてもらっていいだろうか？」
「え？　は、はい」
「君と天音君は恋人同士なのか？」
「ええっ!?　い、いえっ！　只の幼馴染で、恋人とか、そういうのじゃ……！」
　唐突な質問に対し、両性院は慌てて否定した。こんな状況ながら、どうしても顔が赤くなってしまう。
「ふむ、ではデートやキスなどをする関係でもないと？」
「あ、当たり前です！」
　ド正義は更に突っ込んだ質問を投げかけてきた。やはりこれも両性院は否定する。何を考えて、彼はこんな質問をしてきたのだろうか。
　だが、その答えは彼にとって予想外だったようだ。首を捻りつつ、ド正義は聞いた。
「では、只の幼馴染ならば……何故君は、そこまで命を張ろうとするんだ？」
「……え？」
「両性院君、君と天音君が恋人同士であったり、あるいは諸事情で名字の違う肉親だったりするのであれば、これまでの君の行動はある程度

は理解できる。しかし……『只の幼馴染』だと言うなら、君の決意はその『度』を超えたものだ。これから行われる戦いは決して英雄的な行為でもなければ、華麗なヒロイック・ファンタジーでもない。死ぬときは誰でも、それこそ僕でも当たり前に死ぬ……そんな泥臭い戦いだ。そこに君は自分の命を投げ打とうとしている。それが分かっているのか？」

顔の上半分を包帯で巻いた状態ながら、ド正義の言葉は平時と変わらない鋭さで両性院を打った。

両性院はその言葉に驚き、考え、やがて決意をその顔に浮かべて答えた。

「……僕と沙希は付き合っている訳でもありませんし、会長の言うような隠れた血縁がある訳でもありません（この学校で『互いに気付いていない生き別れの兄妹』『クーデターから逃れてきた欧州の小国の王族』『千年の歴史を刻む闇の血族の末裔』『地獄の魔王の息子』『宇宙人』などは珍しくもないですが）。でも……彼女は、僕が命を懸けるに足りる人なんです」

「……」

ド正義は答えず、両性院の次の言葉を待つ。

両性院は幼い頃の「あの日」の事を思い出しつつ言った。

「小さい頃は、僕より沙希の方が身長が高くて……僕が、いつも彼女に守ってもらっていました」

物心ついた頃には、両性院は沙希と既に友達同士だった。幼稚園の頃の、どこか姉ぶるような態度で振る舞っていた沙希の姿が昨日の事のように思い出せる。

「でも……ある時、年長組の気の強い男子に僕が目をつけられて……僕も沙希も叩かれて、わんわん泣かされて……」

「子供の頃は、良くも悪くも男女の区別が無いからな……」

「はい。でも、それでも沙希は僕が叩かれないように泣きながら守ってくれて……その日に決めたんです。これからは、何があっても沙希を守ろうって」

「感情が先行し過ぎているな……この戦いに命を投げ打つには、『理』

が足りていない」
「……はい、分かっています」
「だが、理解はできる」
「！」
そう言うド正義の口元には、優しい笑みが浮かんでいた。
『守りたい女のために命を捨てる』……男が戦う理由など、本来はそれだけで良いのかもしれないな」
「……ありがとうございます、会長」
見えないと知りつつも両性院は頭を下げた。彼の問いかけが、ギリギリまで自分を止めようとする気遣いであった事が両性院にも理解できた。
「……両性院君、今は何時だろうか？」
「え？　あ、ええっと……三時半です」
「ならば、そろそろ皆を起こすとしよう」
臭いで場所が分かるのだろう、そう言うとド正義は番長小屋へと向かってゆく。
ほんの少し、夜の闇が薄れたような気がする。あと一時間もすれば日の出になるだろう。
〝転校生〟を相手取っての天音沙希救出作戦、開始である。

第十八話　完全熟達者（オーバーアデプト）

「……」

旧校舎の教室内、ユキミは険しい表情で椅子に座っていた。

――遅い。

魔人小隊3人をあっさりと殺し得た鵺野の技量であれば、「4人」程度の魔人学生であればそれこそ秒殺の筈である。しかし、まだ彼は戻ってこない。

その時、ユキミの携帯が震えた。着信欄を見ずに即座に出る。

「ヌガーさん、どうしました？」

『ユキミ……すまないが、支援を頼む！　これは、この相手は……ぐっ、おおおっ！』

「ヌガーさん!?」

携帯の向こうから聞こえる苦悶の声。普段から飄々としている鵺野が発しているとは思えないような声に、ユキミは動揺しつつも椅子から立ち上がった。

『い、急いで、くれ……！　何とか、ううっ！　ま、まだ持ちこたえているが……これは、まずい……！』

「ヌガーさん、現在位置は!?」

『旧校舎から北に1㎞ほどの、森の、中……す、すぐに、分かる筈だ……あぐぅっ！』

鵺野の苦悶の声が一際強くなる。

『小生とした事が、油断、しっ！　した……ユキミ、気をつけたまえ。学生の中に……〝完全熟達者（オーバーアデプト）〟が居る！』

「……!?」

ユキミは黒鈴を揺すり起こした。半分寝たままの瞳で黒鈴が目覚める。

「ふぇ、ユキミ……？」

「すまない、黒鈴。ヌガーさんが苦戦している。今から俺は支援に向かうから、〝報酬〟を警戒してくれ」

「……！　わ、分かった」

鵺野やユキミ程でこそないが、彼女も周囲からはベテランと呼ばれる〝転校生〟である。短い言葉だったが、現状が如何に「あり得ない」状況なのかを黒鈴は即座に理解し、頷いた。
「頼む。それじゃ、行ってくる！」
そう言うとユキミは窓を蹴り、夜明け前の森へとその身を躍らせた。　最強の転校生、鵺野蛾太郎を苦悶させ得る存在への戦慄を覚えつつ。

ダンゲロス／ＩＦ　第十八話　完全熟達者（オーバーアデプト）

何故このような事態になったのか？　それを説明するには、時間を若干遡らねばならない。
既に頼れる連絡役としての位置を確立した森のクワガタが旧校舎に飛来したのは、午前４時くらいの事だった。
「……ふぅむ」
徹夜したというのに眠くなる風もない鵺野は、そのクワガタの言葉に少し考え込んだ。
「今度は何ですか、ヌガーさん？」
「番長グループ……だったかね？　あちらの拠点で動きがあった。学生魔人が『４人』、向かってきているようだ」
「４人？」
ユキミは怪訝な顔で聞き返した。
「生徒会の方へではなく、こちらにですか？」
「うむ、その４人以外の動きは無い。明らかに我々の存在を察知していると見て間違いないだろうね」
「……」
ユキミは考えた。ハルマゲドンの相手である生徒会よりも優先してこちらに向かう理由は何か？
まず考えられるのは、ユキミ達の事を察知はしているが〝転校生〟だとまでは分かっていないという可能性。生徒会側の伏兵だと思い、先にそれを少数精鋭で潰そうとしているか。

また、〝報酬〟である天音沙希の知人や恋人が番長グループにおり、その為に彼女の救助を優先しているという線もあるだろう。
そのユキミの思考を読んでいたのだろう。視線を向けつつ鵺野は言った。
「どちらにせよ、これは我々にとってはあまり宜しくない状況だ。番長グループには我々よりも先に生徒会と戦い合ってもらい、少しでも数を減らして貰わねばならない」
「行かれるんですか、ヌガーさん？」
「４人ならば、１人仕留めれば足並みも乱れるだろう。ここは我々を警戒し、優先順位を下げてもらうのが一番だ」
マントを翻しつつ鵺野は立ち上がった。
「少し行ってくる。時間はかけんよ、今度こそ黒鈴の『餌』に向いている能力者かもしれない」
「気を付けて。ヌガーさん」
見送りの言葉を背に受けつつ鵺野は窓に足をかけ、宙に身を躍らせた。音もなく着地し、そのまま走り出す。
――振り返るにこの時、鵺野は教室の片隅で震える長谷部に聞くべきであった。旧校舎に接近している４人の容姿から思い当たる人物を。
夏の余韻を残す、湿り気と温さを帯びた空気が夜明けの光によって少しずつ乾いてゆく。
腰に帯びた箱の中の４匹の盟友たるクワガタたちの様子を測りつつ、鵺野は思った。この迎撃を終えた後、クワガタ達にも水浴びをさせなければならないだろう。
森の木々を抜け、こちらへ迫る学生たちの許へ距離を詰めてゆく。あと１kmちょっとと言ったところか。
「……？」
その時、鵺野は僅かの違和感に気付いた。
彼の穿く紺袴、その紐が緩んで――
「ぬっ!?」
突如、鵺野は顔を歪めるとバランスを崩し、

「ぬおおっ!?」
そのまま地面に顔から倒れ込んだ。
「こ……これはっ!? ぐおおっ!」
鵺野の顔に苦悶と困惑が浮かぶ。全身が震え、苦しげな声と共に上体を伏せたまま腰が持ち上がる。
鵺野は一息に袴に手をかけ、一気に引き下ろした。
「……こ、これか!」
自身の腰に眼をやり、鵺野は自身が攻撃下に置かれていた事を理解した。
果たして袴の下に履いていた褌は既に解かれ、鵺野の男性器は何処からか出現した細い指に包まれていた。
「ぐうっ!」
5本の細い指は、一本一本が白蛇のように自在に動き鵺野の股間に絶え間ない刺激を送ってくる。痛みと快感の境界線ギリギリまでを責めてくるその性技は鵺野の全身を貫き、身体を震わせる以外の行動を許さない。〝転校生〟の無限の防御力が、この手淫には通用しない!
「(これは……まさか!?)」
何とか身を起こそうともがきつつ鵺野はこの攻撃が何故通用しているのか、その理由に思考を巡らせた。
考えられる理由は二つ。まず、この手淫がこちらを「苦しめる」のが目的でなく「気持ちよくさせる」目的で男性器に奉仕しているということ。仮にこれが股間へのいきなりのパンチだったり、あるいは玉袋を握り潰そうとする行動であれば鵺野の肉体はそれを「攻撃」と認識し、それを容易に弾いたであろう。
しかしこの指の動きは家族のように優しく、母のように包み込むようで、恋人のように愛おしそうに、それでいて激しく鵺野に射精を促してくる。そこには攻撃性は一切無い。
だが、それだけではない事も鵺野は勘付いていた。鵺野蛾太郎は若い外見とは裏腹に、〝転校生〟として膨大な時間を送ってきたベテランである。童貞ではないし、性経験も手練れとまではいかないまでも

多少の堪えは効くはずである。
「うっ、うあぁっ！」
びゅるびゅると鵺野の男性器から強い粘り気を帯びた液が迸った。
――しかし、これは「格が違う」！
射精したばかりというのに、鵺野のそれは全く硬度を弱めないまま屹立していた。この指が沈静化を許さないのだ！
指の細さや肌の滑らかさからして、おそらく今の鵺野を襲っているのは若い女性であろう。だが、この動きは女郎街の手練れの花魁のそれを遥かに超えていた。
ここまでの性技となれば、常人に修められるものではない。となれば――
「（しくじった！　完全熟達者（オーバーアデプト）か！）ふおおっ！」
再び鵺野が叫ぶと、草むらに再び白濁液が降りかけられた。
全身を強烈な快感と脱力感が包む。このまま快感に身を任せれば、どれだけ楽であろうか。だが、それが自身の死と直結している事も鵺野には理解できた。
〝完全熟達者〟。それは幾多の平行世界を含めて片手で数える程しか存在しない、魔人能力のような突発的な覚醒でなく日々の修練の果てに究極と言える領域まで「技」を極めた者を示す。
英語、パントマイム、セックステクニック――極めた技は其々だが、彼らのその技術は理屈を超えて〝転校生〟を容易に屠り得る。最早それは「そういうもの」としか説明できない境地なのだ。
相手が自覚があるかは分からない。しかし、今こうして自身の男性器を愛撫する能力者が完全超熟者に匹敵するそれである事は確実だった。
「く、くう……っ！　ハ、ハナ、キヨッ！」
何とか身体をよじり、鵺野はうつ伏せの姿勢から仰向けに体勢を変えると身体にかけたままの友を呼んだ。弾けるように箱が開き、二匹のクワガタがそこから飛び出す。
「（おそらくこれは、遠隔操作系の能力と本人の性技能の複合……！）
た、頼む！」

鵺野の叫びに、盟友である〝彼女ら〟も異常が理解できたのだろう。素早く周囲を飛び回り、鵺野を痛めつける――否、気持ちよくさせている――主を探す。
「……！」
「近くにはいない……という事は、やはり４人の一人か！」
まずい、鵺野は思った。こちらに向かっていなければ、対象との距離は１km以上ある。このまま手淫をされた状態で向かうのは不可能だ。
「……止むを得まい！　ハナ！」
苦しげに鵺野は言うと、仰向けのまま腰だけを高くつき上げた。当然ながら、その頂点で存在を主張する男性器は柱のようにそびえ立っている。
「抉れっ！」
「……!?」
鵺野の言葉にハナは一瞬だけ躊躇したように動きを鈍らせたが、やがて決意したのか大きく翅を広げると彼の男性器に向けて大きくツノを広げ、突撃を仕掛けてきた。
男性器から全身に送られる快感に抗う術はない。ならば――性器そのものが無くなればいい。鵺野は迷いなく、それを決断したのだ。
しかしその瞬間、愛撫を加えていた指の動きが変わった。急に動きを止めて竿を強く握ると、そのまま「ぐいっ」と上に引っ張り上げたのだ。
「ぐうっ！」
鋭いツノが鵺野の腰骨に刺さる。ハナは慌ててそれを引き抜いた。
改めて鵺野はこの姿なき淫魔の性技能の高さに驚愕した。相手は鵺野の抵抗が弱まった事でこちらの思惑を察し、強引に自爆を防いだのだ。
だが、痛みのおかげで多少ではあるが身体のコントロールが戻った。鵺野は下半身裸のまま、泥まみれのマントから携帯を取り出す。
「ユキミ……すまないが、支援を頼む！」

森の中に金木犀の花の香りめいた匂いが漂う。
「……ヌガーさん！」
その臭いの中心、白濁液の水溜まりで苦しむ鵺野の姿にユキミは言葉を失った。
「ヌガーさん、これは一体……!?」
「遠隔系の、性魔人だ！　我々の防御力も効かな……ふおっ！」
そう言う間にも鵺野は腰を震わせ、既に何度目か分からない射精を行った。
「クワガタ達の話では、４人の学生はここから北１kmの位置から動いていない……おそらくはそこに、この能力者が……っ！」
「わ、分かりました、ヌガーさん！　少し待っていてください！」
ユキミもベテランと呼ぶに足りる歴戦の〝転校生〟である。彼の言葉から状況を素早く理解し、身を翻すと北へ向かおうとした。
「う、うわっ！」
だがその瞬間、先ほどの鵺野と同じように大きくバランスを崩し、草むらに倒れ込んだ。
鵺野は咄嗟にユキミの腰周りを見た。スラックスのファスナーが開かれ、やはり彼の男性器が引き出されている。
「……!?」
そして同時に鵺野は自分を責めていた指が消失した事に気付いた。全身を包む脱力感と倦怠感を堪えつつ立ち上がり、鵺野はユキミに言った。
「ユ……ユキミ、それだ！　堪えろ、一度精を出せば最後まで搾り取られるぞ！」
「そ、そうは言っても……うぐぅっ！」
完全に不意を突かれ、ユキミは腰を持ち上げつつ悶絶した。
どうやら相手は弱体化した鵺野よりも新手のユキミに標的を変えたらしい。しかしこれで幾つかの事が分かった。まず、相手は同時に複数の標的に同時に手淫を仕掛ける事はできない。そして相手は手淫以外の攻撃はとりあえずはしてこない。
「ユキミ、仰向けになれるか!?」

「や……やってみます！」
そしてこれは鵺野にしても好機であった。自身が手淫を受けている状態ではクワガタ達に細やかな指示は出せなかったが、今の状態ならば――
そう鵺野が思う間に、ユキミは何とか身体をうつ伏せから仰向けに変えた。
「うあっ、あっ、ああっ！」
噴水めいた勢いでユキミは射精した。その男性器を凝視しつつ、鵺野は更なる射精を促す指の動きを丁寧に観察する。
腰の箱のひとつが勢いよく開いた。
「フミ、頼む！」
「……！」
「ユキミ、何とか堪えてくれ。腰を動かすな！」
「は、はいっ！」
箱から飛び出したフミがカチカチと大顎を鳴らした。一旦浮上し、ユキミの股間に狙いをつける。
「行けっ！」
鵺野の言葉に応え、フミは直滑降でユキミの股間へと飛来する。その動きを確かめつつ更に鵺野は指示を出す。
「上、一寸！　右に半寸！」
「……！」
「くうっ！」
ユキミが歯を食いしばる。フミはその横を掠めるように飛び、そのまま彼方へと向かう。
次の瞬間、ユキミの男性器に絡まっていた指が次々と斬り飛ばされた。鮮血が男性器に降りかかり、紅白のコンストラストを作り上げる。
鵺野のナビと自身の微調整により、フミはユキミの性器を傷つける事無く指だけを切断したのだ。
「あ、ありがとうございます、ヌガーさ……」
「行くぞ、次の攻撃を許す前に学生たちを仕留める」

「はい！」
そう言うと、二人は再び森を駆け始めた。
ふと、鵺野は思い出した。少し前に特例で〝転校生〟になり、そして最初の任務で死んだ新人の少年の姿を。そして――彼の死因を。
「ユキミ、これはまずいかもしれない」
「はい、学生風情と思っていましたが……」
「いや、そうではなく……『鏡介』という新人を覚えているかね？」
「鏡介？」
そう言われ、ユキミは少し考えてから答えた。
「何となく……ですが。確か、『認識の衝突』無しで阿頼耶識さんに連れてこられて、最初の任務で……」
「そうだ、帰ってこなかった。初戦で死ぬ〝転校生〟は珍しくないから小生もうっかり忘れていたが、その彼が向かった世界と、その死因……確かこの世界での搾精死だったはずだ」
「……！　では、これが？」
「ああ。おそらくだが、こいつに殺されたのだろう」
鵺野の言葉にユキミは息を呑んだ。〝転校生〟の防御におけるアドバンテージが通用しない相手がいる。それは恐るべき事態なのだ。
「それは……厄介ですね」
「ああ。だが遠隔系の能力者という事は近接戦闘は不得手のはず。そこを突けば十分に勝機はある」
「分かりました。じゃあ俺は……うぁっ！」
突如、走っていたユキミが体勢を崩した。
「ユキミ!?」
「そんな、まだ……っ!?」
そのままユキミは転倒し、腰を震わせた。見れば閉め直したはずのファスナーが開かれ、再び性器に指が絡められている。
反対側の手での攻撃か？　敵ながら、片手を失いながらも大した根性だ。鵺野はそう思いつつクワガタに指示を出した。
「チヨ、フミ！」
二匹のクワガタがユキミの股間に飛来し、再び指を切り飛ばす。

「す、すみません、ヌガーさん！　ふぉっ！」
「!?」
　鵺野の瞳が驚愕に見開かれた。斬り飛ばされた指が地に堕ちる前に消え失せ、再びにょきっと空間から生えると再度ユキミの男性器を包んだのだ。
「……再生能力だと!?」
「ぐっ、ふあぁっ！」
　再びユキミは全身を硬直させて射精した。再び指だけを切り裂く。指は更に再生する。
「きりが無い……か。ユキミ、小生が標的を仕留める。少しの間、堪えてくれ！」
　鵺野は考える。単独の能力者で再生と遠隔の両方を有する魔人？
　あり得ない。ならばこれは――

「くうっ……！」
「お姉様、大丈夫ですか!?」
　鵺野たちの位置から北に1kmほどの少し開けた場所。円陣の中央に位置する鏡子の様子に背後のアズライールが心配そうに声をかける。
　鏡子はその声に、額に汗を浮かべつつも笑みを返した。
「大丈夫、ここからが本番だから！」
　彼女は左手に持った手鏡に右手を埋め込みつつ、その手を絶え間なく動かす。顔には鏡を通して飛び散ってきた精液の飛沫と返り血が模様を作り上げていた。
　これこそが彼女の能力『ぴちぴちビッチ』。半径2km以内の男性の股間を自在に鏡に映しだし、性行為限定で遠隔干渉を可能にする能力である。
　再び鏡の向こうのユキミの男性器が射精し、その飛沫が鏡越しに飛んできて鏡子の洒落っ気の無い眼鏡を汚す。直後、彼女の指がクワガタに切り裂かれる。
「ううっ！　お、お願い、ファーティマちゃん！」

「あまり無茶をしないでください、お姉様！」
鏡子の声にアズライールは即座に答え、手にした生徒会の帳簿を光らせた。再び鏡子の指が元通りに治る。
そんな二人を守るように並び立つ、白金翔一郎と一刀両断。
「相手は二人……もう一人が、そろそろ来るわ」
「分かった……構えるぞ、一刀両」
「……はい、先輩」
それぞれの刀を構え、学園最強の剣士と女剣士は森の奥へと視線を向けた。